やすいゆたか著作集第二十一巻別巻上

長編哲学ミステリー

# 崩れゆく学園

高校生探偵奮戦記

Copyright (C) 2012 Yutaka Yasui. All rights reserved

『長篇哲学ミステリー　崩れゆく学園
―高校生探偵奮戦記―』

はじめに―哲学とは何かを兼ねて……3
一、人麿霊と語った平城天皇……8
二、『ヤマトタケルの大冒険』の報告……12
三、恋敵との再会……14
四、『すりかえられたキリスト』……16
五、校長室殺人事件発生……18
六、ベーコンの「四つのイドラ」……21
七、デカルトの方法的懐疑……25
八、留置場の悪夢……27
九、誰もがメディア……29
十、魂の置き入れと聖霊のつきもの信仰……31
十一、スピノザの汎神論……34
十二、警察での面会……36
十三、キリスト教聖戦団声明文……38
十四、『闇の十字架』発刊される……39
十五、ホッブズの社会契約論……42
十六、アナキスト革命団の決起……47
十七、ロックの社会契約説と革命理論……52
十八、ルソーの『社会契約論』とフランス革命……54
十九、観念論か唯物論か？……57
二十、観念論の三つのタイプ……60
二十一、『純粋理性批判』をめぐって……62
二十二、カントの道徳説……64
二十三、野々上笙子の証言……69
二十四、古谷一哉先生に訊く……71

二十五、フィヒテの主意主義……74
二十六、フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』……76
二十七、陽一、智子の名探偵……79
二十八、シェリング哲学の現代的意義……83
二十九、榊周次の自宅へ……86
三十、ヘーゲル哲学体系入門……93
三十一、北津高校平泉校長射殺さる。……96
三十二、ヘーゲル弁証法……99
三十三、暁マンションの惨劇……103
終わりに……105

『長篇哲学ミステリー　崩れゆく学園
―高校生探偵奮戦記―』

## はじめに―哲学とは何かを兼ねて

謎解きに使えぬものか哲学史ミステリー化で教材革命

榊周次が上村陽一と三輪智子から『ヤマトタケルの大冒険』の報告を受けたのが昨年の五月で、だから今年から大阪商経大学の倫理学入門は三限が『鉄腕アトムは人間か？』で、五限が『ヤマトタケルの大冒険』の二本立てにしている。それもあってか、評判を呼び前期・後期とも五百人を越える盛況は続いている。それを前期３コマ、後期２コマでこなしている。三年連続で、年間千人を超しているので、マンネリで衰退しないように新作を作り続けていけばなんとかなるだろう。

### 『鉄腕アトムは人間か？』のあらすじ

榊周次は大手門高校の倫理の非常勤講師、大学の非常勤講師も兼ねている。上村陽一と三輪智子はその二年生の生徒、陽一は理系志望で大学は医大で生命科学を研究して、寿命を延ばす夢を持っている。しかし中学ではトップクラスだったのに、一番校のために難問攻めで、欠点をとってしまい、理系が苦手になり、地歴や倫理は高得点なので、文転を迫られ苦悩している。智子は家庭で、母親に殺されそうになり、義父に犯されそうになる夢を見る白雪姫コンプレックスに悩んでいる。それでカウンセラーになろうかと考え、大学は心理学科に進もうとしていた。

ふたりは倫理が好きで気が合うので仲良しだった。『ソフィーの世界』の輪

読会を作ったが、メンバーは減って二人だけになり、英語版で英語の勉強を兼ねてしていた。

榊先生からバーチャル・リアリティ劇（電脳空間でそれまでの記憶を消去して役柄に成り切って、本人のつもりで現実だと思い込んで演じる劇）に出ないかと誘われたが、榊先生のＩＴスキルは幼稚園並みなのでそんなことできる筈ないと思っていた。

四月になり、三年生になった陽一は榊先生が辞め、智子も登校していないのに気付き、パソコンで「榊周次の穴」というサイトを覗くと、吸い込まれて、気づくと24世紀の鉄腕アトム三世になっていた。人間たちは自己意識あるロボットを商品奴隷として支配し、スクラップしてしまうので、ロボットたちは生存権など人権を獲得しようとして、解放戦争になっており、鉄腕アトムも解放戦士で、実は核爆弾をサミット開催中のエルサレムの国連本部に投下する命令を受けていた。アトムはロボットたちに説得され、やむなく出撃する。しかしもちろん記憶はなくしているとはいえ、人間を殺せるはずがなく、国連本部に乗り込んで、人間とロボットの共存共栄のためにロボットの人権を認めさせようとする。その中で人間は身体とそこに宿る人格だけではなく、社会的諸事物や環境的自然も含めて捉えるべきであり、ロボットも人間に含まれるとする榊周次のネオヒューマニズムの立場に立たざるをえなくなる。しかし自己意識あるロボットは、人間の生物的限界を克服した超人としての可能性があることに触れてしまったので、ゴルブッシュ国連大統領が隠し持っていたレーザー銃で撃たれ、ミニ核爆弾が爆発してしまう。バーチャル・リアリティの夢から覚めた陽一はこの夢を榊先生が作ったのではないかと疑うのだった。

## 『ヤマトタケルの大冒険』のあらすじ

陽一は、突然天から大音響で「上村陽一は十七歳で死ぬ運命だ」という声を聴く。榊先生に相談すると鉄腕アトムになってミニ核爆弾でふきとばされる夢を見たので、その後遺症ではないかというが、陽一も幻聴だと思っているが、恐ろしくてたまらない。榊先生はあと半年の命だと思って、バーチャルな世界で何人分もの体験をしてみるのも逃避ではないかもしれないという。

日本史の吉永妙子先生は、生徒に歴史の面白さを教えて、興味や学的探究心を植え付け、その結果成績も上がるように、教科書にはない彼女自身の解釈を織り交ぜて授業をしているが、一部の生徒には試験に出ないことを教えるという反発もある。皇室の祖先神は元々は天御中主つまり北極星ではなかったか、物部氏の太陽神信仰を簒奪して天照大御神を祖先神にした際に、北極星を意味する天皇を帝の呼称にすることで、主神変更を天御中主に許してもらおうとしたという説を紹介した。そのために校長に始末書を要求されるが、撥ねつけた。ところが授業内容を録音されていて、偏向教育だと指弾され、休職を迫られ、拒否すると古文の古谷一哉先生との不倫を問題にすると脅かされてやむなく休職させられた。

その穴を埋めるので日本史も教えられる榊先生が戻ってくる。榊先生は持統天皇を息子や孫を皇位につけようと、他の皇子たちを陰謀で葬った恐ろしい女という歴史学者たちの解釈は誤解で、本当は和の中心の優しい女だったという話で、評判をとった。それで陽一と智子の『ソフィーの世界』輪読会主催の講演会で、榊は、河内湖は白鳥の湖だったという話をした。ヤマトタケルの白鳥伝説は、物部氏の兵士が遠く戦地で斃れると白鳥になって河内湖に舞い戻るという伝承を下敷きにしていると語った。

その会が終わって陽一と智子は互いの悩みを打ち明け合い、心の友になった。そして学校の遠足で巻向に行き、ふたりで景行天皇陵に出かけたときに、陽一は一人で潜入して、四世紀半ばのヤマトタケルの世界に入ってしまう。智子も陽一を探しているうちに壁抜けして、同じ世界に落ち込み、弟橘姫になってしまう。

それからは『古事記』の筋書きに沿って熊襲タケル兄弟を征伐し、ヤマトタケルを名乗り、巻向に凱旋するとお供の兵士一人だけで蝦夷征伐に出される。倭姫から天叢雲剣と火打石をお守りに授けられ、蝦夷征伐に出かけると、後を弟橘姫が一緒に死ぬために追ってくる。相模野で蝦夷の騙し討ちで火攻めに遭うが、天叢雲剣で草を薙ぎ火打石で周囲の草に火をつけると、火は蝦夷の方に

行って、助かった。しかし走水の海道で嵐にあい海神に弟橘姫を生贄に差し出す。

蝦夷征伐を終えて尾張の豪族の館で美夜受姫と婚礼を上げる、裳の裾に月の穢れがついていたが、歌で雅なものに昇華して盛り上がり、結婚できた。その床の辺に剣を置いて、伊吹山の山神退治にでかけるが、雹に撃たれて深傷を負い、そのまま大和に戻ろうとして三重の能煩野で力尽きて斃れてしまう。ヤマトタケルの遺体はそのまま全体が白鳥になって墓から飛び立ち、紀伊半島を海沿いに行き、河内湖に舞い戻った。弟橘姫は海神の宮に行くが、目覚めれば陽一と一緒に景行天皇陵から抜け出して、この世界に戻っていた。

問題は土曜日午後六時からの前期「哲学入門」と後期「現代と哲学」である。時間帯が悪いということもおおいにあるだろうが、これは相変わらず概論的な講義なので、登録者は二十人台で、欠席者も多い。ただ理窟を理窟として教えられても、それを咀嚼して納得したり、ましてや生きていく力にできるのはなかなか難しいところがある。

やはり学力問題は深刻で、概論形式の哲学講義で評判を呼ぶのは大変困難である。別に哲学の受講者が少なくてもいいじゃないかと思われるかもしれないが、榊周次は万年非常勤講師である。すでに還暦が過ぎ六十台後半に入ってしまっている。何時お払い箱になってもおかしくないのだ。常に何らかの形で己の存在をアピールし、業績を上げ、授業にも真剣に創意工夫し、教育改革に取り組んでいることを知らしめておく必要があるのである。

小林弘人『新世紀メディア論―新聞・雑誌が死ぬ前に』（バシリコ株式会社）によれば、すでに《誰でもメディア》時代なのである。「日刊だれだれ」がＷＥＢで評判になっているらしい。そうか、常に自分が何に取り組み、どんな問題意識を持ち、どんな壁にぶつかっているか、そしてどんな成果をあげているのかを日々刻々知らせておくべきなのである。「日刊榊周次」は無理だから「週刊榊周次」を作ろうということになった。

倫理学で「哲学ファンタジー」を教材にするのなら、どうして哲学を「哲学ファンタジー」にしないのだというのが素朴な疑問だろう。それがそうは簡単にはいかないのだ。倫理学というのは哲学の一分野である。倫は人の輪ということで、人間関係をどのようにすれば調和のとれた良い関係になるのかを問題にする。そのために各人がいかに生きるべきかを根源的に問いかけるのである。その前提として人間とは何かを追求しなければならない。

日本を代表する倫理学者といえば和辻哲郎であるが、彼の代表作に『人間の学としての倫理学』（岩波叢書）がある。人間とは何かを論じるのが倫理学だということである。その際和辻は人間を単なる個人とみなしていない。「人間」とは元々「じんかん」と読み、「世の中」という意味である。「人間（じんかん）いたるところ青山（せいざん）あり」とはどこで暮してもそこを終(ついの)の棲家と心得るべきだということである。昔は先祖の墓のあるところに住むのが道徳的にも善とされたが、自分を本当に活かせる土地にいってそこを終の棲家とすれば、そこが自分の墓所となるという進出的精神を表現しているのである。

人間とは、個人であると同時に社会であり、個人と社会の弁証法的統一であるということなのである。それで「間柄」というのがキーワードになるわけだ。そういうことなので、個人の生き方、社会のあり方、人間関係や環境との関わりなど、倫理学は人間たちの様々な人生ドラマの中にいくらでも教材がころがっているから、わりに文学作品にして論じることはたやすいのである。

では何故「倫理学ファンタジー」と呼ばないで「哲学ファンタジー」と呼ぶのか？それはもちろん「倫理学ファンタジー」でもいいのだが、人間のあり方、人間への問を根源的に考え直しているという意味で、哲学であり、そこに面白みがあるので「哲学ファンタジー」と表記した方が受けがいいのである。

ではそもそも倫理学も一分野として含む哲学とはどういうものなのか？根源的に考え直しているから「哲学」だということである。物事を原点に戻って一から、あるいは零から考え直す、あるいは捉え返すのが哲学なのである。およそ学問である以上、すべて一から積み上げていくものである。だからすべての学問は哲学でなければならないのだ。

言い換えれば原理に還元して、だれもが認められる公理や定義から出発しなければならない。そしてだれもが納得できるように順を追って展開しなければならない。

哲学は独断であってはならないのだ。よく自分だけしか分からない超難解な議論を展開して、悦に入っている自称哲学者がいるが、それが学である限り、だれもが納得できるものでなければならないのだ。もちろん理解するまでにかかる時間は人によって違うから、一度聴いたらすぐに納得させられるというものでなければならないことはない。数学などはきちんと基礎から学習して積み上げていけばだれでも微積分や行列などを理解し、演算できるようになるのである。ただ人の何倍も時間がかかる人もいれば、さっと理解できる人もいるという違いがあるだけである。

その意味で数学などは典型的な哲学である。繰り返すが、哲学という特殊な学問があるのではないのだ。すべての学問は根源的に問い返され、原理的に誰もが納得できるように展開されて学の体系をなさなければならないという意味で、哲学でない学はないのである。だから哲学者のエベレスト山に例えられるドイツ観念論の大成者ヘーゲルは Phiosophy(愛知、哲学)と言わずに Wissennschaft(知ること、学)と呼んでいるのである。

大学の学科に哲学科があったりするので、一つの学問分野として哲学があるように誤解されているが、それは哲学の中から存在論、論理学、認識論あるいは人間学などを、他の学科でやらないから、狭義の哲学として教えているのである。

それではなぜ哲学は、ソフィー(知)と呼ばれずフィロソフィー(愛知)と呼ばれるのか、プラトン著『ソクラテスの弁明』によれば、それは本当に知ること、つまり真理をつかむことは極めて困難なので、真の哲学者は己の知を真理と言い張ることは難しく、自らをソフィスト(知者)と名乗らず、謙遜して、フィロソフィスト(愛知者)、つまり真理に執着し、探し求めている人と名乗らざるを得ないからである。

ところで哲学教材の文学化をはかろうとしても、どうして榊には、哲学ファンタジーはなかなか作りにくいのか？それは榊が哲学概論的な内容をその中でカバーしたいと考えているからである。

「哲学入門」ではベーコン、デカルト、スピノザ、ホッブズ、ロック、バークリー、ヒューム、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルをカバーし、「現代と哲学」では功利主義、マルクス主義、実存主義、プラグマティズム、現象学、精神分析学、フランクフルト学派、構造主義、ネオヒューマニズムをカバーしたいのであ

る。それらを盛り込んだ文学作品にしたいわけだ。それができれば、大阪商経大学だけではなく、同立館大学の教職哲学のテキストにも出来るはずである。

しかし、それだけの内容を物語に盛り込むとすると、読者の頭が混乱するので、それなら概論でこれまで通りやった方が賢明だということになる。たしかに哲学の文学化を図るのなら、近現代の哲学史を経験論と合理論の対立に集約して単純化するぐらいでないと、消化不良を起こしかねないのだ。

そうなるとドイツ観念論をどちらに位置づけるか、現象学をどう扱うべきかなどやっかいな問題が出てくるのである。それは書きながら整理するしかないが、そういうややこしい問題を抱えながら、ファンタジーに取り込んでいくことがはたしてできるのだろうか？

それならミステリーか何かにして、謎解きをいろんな哲学を使ってやってみるというのも一つの方法ではないか、ファンタジーというのに囚われないで、哲学の文学化を試みるしかない気がしてきた。

ではどういう設定のミステリーにするのか？

榊先生が何か恐ろしい殺人事件に巻き込まれて、容疑者にされ取り調べられる。それで陽一君や智子ちゃんが、近現代の哲学を使って推理し、真犯人を突き止めて榊先生を救うという筋書きにしたらどうだろう。

おいおい陽一君や智子ちゃんではファンタジーの続きになってしまうのではないか。それはそうだが、まったく一から別の作品にするとなるとスムーズに筆が運ばない、せめて陽一君や智子ちゃんを活躍させて、話につながりをもたせ、ファンタジー的要素も残しながらミステリーにした方がいいのではないか。そうでないと最初から本格的ミステリーらしくしなくてはならず、緻密な構成が求められる。なにしろ必要に迫られて文学作品化に挑んでいるのだから、あまり高度な完成度の高いミステリーは望まない方が無難である。ファンタスティックなミステリーの方がよいのかもしれない。

**問　榊周次は、哲学をどうとらえているのか、またどうして哲学教材のミステリー化に着手することになったのか、要約しなさい。**

## 一、人麿霊と語った平城天皇

**み吉野の花を雲とぞたとえしか歌の聖が身を合わせしや**

話を『ヤマトタケルの大冒険』の報告を陽一と智子から聞いた五月にまで戻しておこう。そこからのことを榊周次は創作しなければならない。昨年起こったことを、創作するのだから、簡単だろうと思わないでいただきたい。榊周次は自分自身を含めて登場人物の物語を生み出さなくてはならないのだから大変である。

五月の連休明けに大和の三輪山周辺の遠足があり、景行天皇陵で陽一と智子はバーチャル・リアリティの世界に嵌り込んで、『ヤマトタケルの大冒険』を体験した。その報告を五月十八日水曜日の六時限目が日本史なので、その日の放課後先生に残っていただいて報告しようと相談していた。

御木本校長が榊先生の日本史講義が評判だと聞いて、是非聴講させていただきたいと申し出てきたので、榊先生は「それは光栄です、喜んで」と快諾した。その際に秘書代わりに元の銀行から引き抜いてきた嘱託職員の野々上笙子も歴女だそうなので、一緒に聴講していた。彼女は、バツイチだが、子供がいなかったので、今は自由な一人暮らしだそうである。アラフォーにも見えないことはないが、三十代前半ということになっている。

『『古今和歌集』の『かな序』に『いにしへよりかく伝はるうちにもならの御時よりぞ広まりにけるかの御代や歌の心を知ろしめしたりけむかの御時に　正三位柿本人麿なむ歌の聖なりけるこれは君も人も身をあはせたりといふなるべし秋の夕べ竜田川に流るるもみぢをば　帝の御目に錦と見たまひ春のあした吉野の山のさくらは人麿が心には雲かとのみなむおぼえける』とあります、この文章は怪しげな内容が書かれています。どこが一体あやしげなのでしょう。だれか分かりますか？」

古代史マニアの橋田譲治が手をあげた。「〈ならの御時〉というのは奈良時代という意味ですか？だとしますと、柿本人麿が生きていたというのは怪しいですね。」

「さすが橋田君なかなか鋭い質問です。実はこれは奈良時代という意味ではなくて、〈ならの帝の時代〉という意味です。」と榊先生は答えた。

橋田譲治は「それじゃあ文武天皇の時代ですね、文武天皇と柿本人麿が和歌について語り合ったということですか？文武天皇は藤原京にいたのですからならの帝というのは不自然ですね、『かな序』の著者は間違っていたのですか？」と突っ込んだ。

『『古今和歌集』は最初の勅撰和歌集といわれているので、そういう間違いがあれば、指摘されて直されていただろう。ならの帝と呼ばれていたのは、実は平城天皇なんだ。」

「ハ、ハ、ハ、ハ」と橋田は笑い、「そりゃあないでしょう。だって平城天皇は桓武天皇の息子で平安時代のはじめですよ。」と大声で言った。「人麿は百年前に死んでいます。人麿は化けて出たということですか？」その時突然橋田の隣の席の坂本加奈が黄色い声を上げて「キャー、お化け！」と叫んだので、みんなドッと爆笑した。

「先生、お化けの話なんか、学校の歴史教育で教えてもいいの

ですか、そんな迷信的なことより、きちんとした歴史を教えるべきじゃないのですか。」吉永先生の授業をボイスレコーダーで録音して、粛清の発端となった山田茂樹が、すっくと立ち上がって毅然とした態度で言った。

「山田君、この時代は怨霊が重要なんだよ。長岡京が廃都になったのも、造宮使だった藤原種継が暗殺され、それをきっかけに大伴氏の関係者が大量に逮捕され、皇太弟早良親王が捕まって、淡路に流される途中で憤死し、怨霊が跋扈しているということで、さびれてしまって廃都になったということだ。

桓武天皇の皇后や妃が次々病死し、疫病もはやり、代って皇太子になった安殿（あて）皇太子、後の平城天皇も病気でなかなか起き上がれなくなった、これを占ってもらったら早良親王の祟りだということになったんだ。それで桓武天皇は早良親王に謝って、崇道天皇という諡号を贈った。なんと怨霊を天皇と呼んで祀り、鎮魂しようとしたんだ。」

上村陽一が挙手して発言した。「これまで仏教勢力の政治への干渉を退けるために長岡京に遷都したとされ、種継暗殺と早良親王の失脚憤死に伴う政治的不安に伴って平安京に遷都したということで習ってきたのですが、怨霊を恐れて平安遷都を行ったということなら、怨霊の話は不可欠ですね。それにしても柿本人麿までもが怨霊で死後百年も経って現れて、それも恨み言をいうのではなく、雅な和歌の話をするというのはまたおかしなことですね。」

陽一は梅原猛の『隠された十字架』や『水底の歌』を読んでいたので、勝者が敗者の怨霊を鎮魂し、怨霊の思いをかなえることで、断絶を埋め、社会の和を図っていくという怨霊史観が分かっていたので、別に驚かなかったが、吉永先生に続いて榊先生まで標的にしようとする山田に反発して榊先生を少しでも支えられたらと発言したのだ。

坂本加奈が言った。「本当に早良親王や柿本人麿のお化けが出たのですか？先生もお化けが出るって信じているのですか？」

榊は少し首を傾げた。「僕は見たわけじゃないからね。自分の目で見て確かめたもの、実験観察の結果確かめたものだけを根拠にするというのが、ベーコンをはじめとするイギリス経験論の立場です。

じゃあ人が確かに見たといっている場合、あるいは天からの声を確かに聴いたといっている場合、自分は見ていない、聞いていないからと言って、人が見たこと聞いたことまで否定できますか？

権力闘争というのは、正しいから勝つわけでもないし、間違っていたから負けるわけでもないのです。かなり強引に策略を使ったりして相手を滅ぼしているので、相手が恨んで怨霊になって祟るのではないかと恐れているのです。そういう人には少しで共通性があれば、怨霊に見えてしまいます。」

山田は確かめるように言った。「誰もが見たというのなら、客観的表象であって、実在の可能性が高いけれど、特定の関係者しか見ていないとすると主観的表象にすぎないので、客観的な実在ではないということですね。つまり早良親王や柿本人麿は化けてでたわけではないのでしょう。」

榊は頷いた。「ええ、私もそう思いますね。怨霊を恐れ、信仰することで、怨霊を鎮魂しなければ祟りが起こると考え、怨霊の夢を加害者が代って実現しようとします。そのようにして、敗者の側、被支配者の側、虐げられた人々の思いもある程度叶えられる、ここに日本的な和の精神がみられるわけです。それは日本社会や歴史を見る場合に大切な視点で、日本文化の誇るべきところでもあります。」

「ところで人麿は怨霊なのに恨めしやと言わずに和歌の話をするのはどうしてなのですか？」三輪智子は肝心なところを話してくれないので少しじれったく感じていた。

「平城天皇は皇太子時代に祟りで病気になっていると感じていて、それは父親の桓武天皇への恨みが、その妻子に祟る形で現れたと思っていたので、父親に反撥もあったのです。それで今度は自分が天皇になったら、自分が祟られる番ですね。どうしたら祟りが已むのか、それは相手の思いを叶えるしかないということです。

大伴家持は早良親王の侍従で、死後遺骨を島流しにされたので怨霊と恐れられていました。彼は生前にたくさんの和歌を蒐集しまして、早良皇太子が即位されたら『万葉集』として発表しようと念願していたのです。平城天皇は家持の思いに憐れみを覚えました。彼の集めた歌を読んでいるうちに、和歌の世界に魅了されました。特に人麿にあこがれたのです。家持の思いを通して人麿の思いにも共感し、人麿の思いも叶えたいということですね。それで夢か現か人麿が現れるようになり、平城天皇と和歌を論じ合うようになったということです。」

「それだったら人麿は平城天皇には恨みはなくて、むしろ自分の願いをかなえてくれるので応援しようと出てきたのですね。」坂本加奈は無邪気に微笑んだ。

山田茂樹は呆れて言った。「だからお化けなんていないから、人麿が出てくるわけはないんだよ。平城天皇の心の中で、人麿の魂と語り合っているつもりになっていたということだろう、ハ、ハ、ハ、ハ」

「山田君の言うとおりだな。その証拠にもし本物の人麿なら『春のあした吉野の山のさくらは人麿が心には雲かとのみなむおぼえける』と言う筈がないんだ。なぜなら、人麿の頃はまだ吉野のさくらはそれほど多くなくて、雲かと見紛うことはなかったのからなのだ。平安時代初めはすでに吉野の桜は有名だったらしい、だからこの会話は平城天皇の心の中だけで起こっていることになるだろう。」

「では人麿が吉野の桜を雲と表現したように後世から誤解される歌があったということですね。」三輪智子は論理必然的にそう推理した。

「ええ、そうなんです。人麿は、**『み吉野の御船の山に立つ雲の常にあらむとわが思はなくに』**と雲をうたっているのですが、いつまでも桜が散らないで欲しいという気持ちを詠ったように誤解されやすい歌でしょう。」

「雲がずうっとかかっていてほしいというのはあまり雅じゃないですね」坂本加奈はつぶやいた。榊先生は微笑んで「まあそうなのですが、昔の人々は雲を霊ととらえていたので、吉野山が雲

に包まれているというのはいかにも霊山にふさわしいと思っていたらしいのです。」と応えた。

山田は不機嫌になって発言した。「それで結局何が言いたいのですか？先生の授業は討論になってしまって前に進まないから、何を覚えていいのか分かりません。要するに、古今和歌集かな序には、百年前に死んだ筈の人麿と平城天皇が出てきて歌論を交わしていたと書いてある。これは平城天皇が家持の怨霊鎮魂のためにはじめた万葉集編纂の過程で、人麿の歌に深く触れて、心の中で対話したということが伺えるということですね。なかなか雅なお話でした。では次に進みましょう。ぼくたちは受験生で忙しいのですから。」

「とても要領よくまとめていただいてありがとう。」榊は一応感謝の言葉を述べておいた。でもいちいちつっかかってこられるようなのでやりにくいなと感じざるを得なかった。

「山田君、榊先生のお話を日本史の受験にだけ直結させるからいらつくんだよ。」滝川隆介は物静かに口を開いた。彼は古文が得意で文学青年のようだった。「実は、『かな序』の解釈を怨霊説でいくというのはすごく勇気のいることで、梅原猛先生だからこそできたことなんだ。怨霊説で説いてこそ、『万葉集』がなぜ平城天皇の時代に完成したのか説明がつく。それになりよりその時代に生きた人々の魂が見えてくるんだ、先生はそのことをとても分かりやすく説明してくださっている。それを通して、人の心を深くとらえるものの見方が学べるわけで、僕たちが自分の人生や生きる意味を考える際の大きな示唆を与えてくださっているんだ。それが結局は、ものを考える力になるので、総合的な受験力にもなっているんだよ。」

ベルが鳴ってしまった。榊も正直、ついディスカッションになってしまってなかなか進めないことにあせりを感じていたので、山田の指摘を無視するわけにはいかないのである。

校長先生に校長室に招かれた。「いやあさすがに梅原古代学に造詣が深いだけあって、惹きこまれるお話でした。生徒たちがワクワクして聞いているのがよく分かりましたよ。」と早速、校長はヨイショしてきた。「野々上くん、どうだった榊先生のお話は？」野々上笙子はお茶を煎れようとしていたが、呼ばれたので、茶壺ごと持ってきて、側で煎れながら話そうとした。その茶壺には御木本校長専用と貼紙があった。

榊はその貼紙が気になり、「校長先生、お茶にはこだわりがあるのですね。」と尋ねると、笙子は「ええ、これでないと飲まれないのです。宇治の産地直送です。榊先生のお話、おもしろかった。怨霊の話があって、それで密教文化が分かるし、最澄と空海の確執とかもすっと理解できますものね。私も高校生の時に先生に教わりたかったわ。ああ、あの本読まれました？三木一郎さんの『薬子繚乱』」

「読みましたよ、薬子は長岡京で殺された藤原種継の娘だったのですね、あれをＮＨＫの大河ドラマにして欲しいですね。最澄や空海なんかも絡ませて膨らませたら、もっとおもしろくなるでしょうし。」

「そうですよね、ＮＨＫは戦国武将や明治維新の志士、あるいはその奥さんばかりで、マンネリですね、まだ『チャングムの誓い』だとか『イ・サン』のような韓流の時代劇の方がよくできて

いますよ。先生また聴講させてもらっていいですか？」

「私はいいのですが、このごろ生徒の中に受験で頭がいっぱいで、歴女が趣味で聴講に来ているということで、気が散ると怒り出したりしないとも限りませんからね」とぼやいた。

御木本校長は頷いて、「いや一番校というのも正直やりにくいですな、のびのび教えられないところがありますからね。」と相槌を打った。笙子はつまらなそうな表情をしたあと、少し艶めかしい微笑を洩らして、上品に煎茶を注いだのである。

**問　柿本人麿の霊と平城天皇が語らった事情をまとめなさい。**

## 二、『ヤマトタケルの大冒険』の報告

**現世にそらごとの世に通じたる穴ありとせばなべてそらごと**

放課後、陽一と智子から重大な報告があるというので、阪急天満橋駅の地下の喫茶店で『ヤマトタケルの大冒険』の体験を聞き取ることになっている。

その中身は『ヤマトタケルの大冒険』を読んでいただくしか、読者に報告しようがないが、もしこの世界が景行天皇陵で古代世界やバーチャル・リアルティの電脳空間とつながっているのなら、そのようなことをする装置が何百年も先にしかできないのだから、バーチャル・リアリティの世界ももちろんフィクションだが、それとつながっている陽一や智子そして榊周次も含めてみんなフィクションだということになってしまう。

榊自身がこれまでファンタジーを書こうとしてきたわけで、作家という立場から、自分がそういう作家の役目をやらされている物語の登場人物でしかないのではないかという、「ソフィーの不安」を感じている。だから身近にいる陽一君や智子ちゃんは自分の物語の登場人物のように感じることがある。しかし、たとえ実は榊先生も陽一君も智子ちゃんもこの物語の登場人物であり、虚構の人格であったとしても、その当の本人はあくまで、リアルな現実を生きていると思い込んでいるわけである。

そう思い込ますには、ファンタジーの仕掛けがしっかりしていて、うっかり虚構性がばれないように仕組まれていなければならない。それがヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』ではわざとぼろが出るようにして、その結果登場人物が自らの虚構性

を知ってしまうという仕掛けなのである。そういう世界もまたファンタジーの幻想の世界の一種だということなのだろう。

しかし、一度や二度夢みたいな嘘みたいな体験をしたとしても、それ以外のリアルな榊の六十六年間の人生や、陽一君や智子ちゃんの十七年間の人生もみんな虚構だったことになるのか、それだけじゃない陽一や智子が虚構ならその家族も虚構になるはずだし、大手門高校も学友たちも、彼らと通勤・通学で一緒だった人々もみんな虚構だったことになってしまう理屈である。それだけは認めることができない、だとしたら、榊は二人の話を夢想とみなすしかないし、ほんとうにバーチャル・リアリティを体験したと思い込んでいる陽一と智子の記憶をその分消去しなければならないということである。

だが榊は他人の記憶を何かの合図で消去できるテクニックを持っているわけがない。彼らの報告を聞き終わってからだが、いよいよ陽一と智子の体験からこの世界全体が虚構ではないかという疑問が次に出てきそうになってきたと榊は感じたのである。これはなんとかしなければと切羽詰まった刹那、榊は何かに衝き動かされるように「羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆訶」と『般若心経』のタントラの部分を唱え始めた。陽一と智子はあっけにとられて聞いていた。

「さあもう一度私がこれを唱えると、君たちは一瞬気を失い、今日の報告の内容の記憶をすべて消去されてしまうんだ。」「ええ、そんな、やめてくださいよ。」陽一は止めようとしたが、榊は大声で、「羯諦羯諦　波羅羯諦　波羅僧羯諦　菩提薩婆訶、喝！」と言った瞬間二人は椅子にもたれて、失神していた。十分ほどしてから榊に揺り起こされた時には、二人は喫茶店に来ていたこともすっかり忘れていた。そして三時間ほどかけて話し込んだはずなのに、その分の時計の針はまた元に戻っていたのである。

「君たち、受験勉強頑張りすぎで疲れているのじゃないか、十分ほど前に居眠りを始めたら、なかなか起きなかったよ。今日は何か重大な報告があるというので来たのに、今日の人麿はならの帝と身を合わせの話の続きしかまだ聞いてないよ。遠足はどうだったんだ、そこで盛り上がったのだろう？」

智子は少しはにかんで、「とても素晴らしい体験をしました、もう信じられないようなすごい体験です。でも、あら、思い出せないわ。」陽一も「ええ、一緒にすごい体験をしたのです。ぜひ先生に聞いてもらいたくて、でもどうしても思い出せません。」

「いいよ、無理に思い出さなくても、君たちは若いのだから、これからいくらでももっと素晴らしい体験をしたらいい、過去は消去で明日からまた人生を自分たちで作り出していくんだ。」

たとえ今は隠せてもやがて『ヤマトタケルの大冒険』はファンタジーとして発表されるから、その時に陽一と智子は思い出すことになるかもしれない。でもその時は、もしリアルな現実に真摯に立ち向かっていれば、榊のただの作り話としか受け取らないかもしれないし、その時はその時で対処すればよいとしたのである。

ところで榊はどうして『般若心経』のタントラを唱えたのか、自分でもわからなかった。「さあ、いくぞいくぞ、さとりのせかいだ」というような意味らしい。つまり現実から超越して、彼岸に、自我を脱していくのである。だから脱自状態、英語で言えばエクスタシーである。失神させて記憶を消去するのにちょうどいいと

直感したのかもしれない。榊は自分自身が咄嗟にそういうとんでもない力を発揮できるということの不思議を感じ、やはり「ソフィーの不安」を感じざるを得なかった。しかし考えようによっては、自分の年齢はどんどん高齢になり、死が近づいているのだから、かえって虚構の世界の住人であると思い込む方が死の恐怖を感じなくても済むかもしれないという気もしたのである。

**問　榊周次はどうして陽一と智子の『ヤマトタケルの大冒険』の報告を聴いて、彼らの記憶を消去しなければならなかったのですか？**

## 三、恋敵との再会

**遠き日のたぎる想いの恋なりきいまさらかえせと言わざるものの**

「文化講演会　倉吉良造『すりかえられたキリスト』」というポスターがあった。六月一日水曜日五時限、六時限を使ってするらしい。倉吉は大手門高校出身の人気作家で、宗教を題材にした小説で売れている。特に最新作『すりかえられたキリスト』は、復活のイエスを演じた弟ヤコブの苦悩に焦点を合わせ、ベストセラーになり、英訳されて海外でも評判をとっている。

水曜日、五時限目、六時限は日本史の授業があるので、榊も学校に来ていた、どうも急遽予定が繰り上がったようで、電話連絡したが留守だったので、留守電に入れたらしい。それを聞いていなかったのである。

それにしても急ごしらえのポスターにある倉吉良造の顔が気になった。一応人気作家なので、顔写真も見たことはあったが、随分学生時代とは風貌が変わっているし、名前もペンネームなので気づかなかったのだが、学生時代の恋敵だった友人倉田正俊にどことなく似ているのである。

榊にとって、畑中瑠璃子との恋、それは命がけの恋だった気がする。哀しみを秘めながら何か訴えるような瞳だった。要するに若かったということだろうか、燃え滾るような思いで恋をしていたのである。ふたりで同じ言葉が同じ意味を持っていたら、それだけで晴れやかな気持ちになれたし、言葉が通じないもどかしさで胸が張り裂けそうになったものだ。

榊は、観念的に精神的に二人がしっかり結びつく恋愛を求めていた、その思いが純粋なのに魅かれて瑠璃子も応じていたが、それでは満足できなかったのだ。その点、倉田は経験豊富で女性を精神的にも肉体的にも満足させるものをもっていたのだ。

昼休みに社会科の教員も校長室に呼ばれて、倉吉良造に挨拶することになった。一通り、校長から紹介された。校長はどうも「歴史教育を正す会」つながりで面識があり、それで本学の出身者でもあるということで、お願いしたところ、この日しか都合がつかないということになったらしい。もし榊の元恋敵倉田正俊と同一人物なら、学生時代には正真正銘の共産党員だった筈である。

「倉吉さん、ちょっとお尋ねしますが、倉吉良造というのはペンネームですね、もし差支えなければ本名をお教え願えませんでしょうか？」榊は、どうにも気になったので、思い切って尋ねた。

「何かわけでもあるのですか、私は作家ですから、ペンネームで通していまして、本名は公開していません。」

「いや失礼しました。大学時代の友人とどことなく面影が似ているものでして。」榊はまざまざと倉田を見た。倉田も榊をじっと見て、「そういえば、昔お目にかかったような、どなたでしたかな」

「榊周次ですよ、倉田正俊さんじゃないですか？」

「え、榊周次さん、すっかり様子が変わっているので、気づきませんでした。これは失礼、昔の左翼時代の人とは全く切れていますからね。」

御木本校長も驚いて「お知り合いでしたか、ほうこれは奇遇ですな。倉吉先生も昔は左翼だったのですか？」倉吉は頭をかいて、「若気の至りですな。私は大手門高校生の頃からの活動家でして、政治の勉強が忙しくて、受験勉強どころじゃなかったのです。それで党から同立館をフロント（統社同）から奪還する使命を与えられまして、同立館に入ったのです。もっとも同立館では元気のいいのはたいてい左翼でしたな。卒業後、共産党関係の労組専従もしたことがありますが、赤旗記者に応募したら、これが採用されまして、小説なども書いていたので、文化部配属で活躍していたのですが、路線対立も絡んで、除名されてしまったのです。それからなんとか文筆の方で食っていけるようになりましたが。まあ波乱万丈ですな。」

校長は驚いた様子だった。「へえーそうでしたか、先生は歴史教育を正す会でも、講演されていて、日教組批判なども急先鋒なので、元左翼とは存じませんでした。」

榊は笑って言った。「元共産党、元民青、元赤旗読者を集めれば、多数派になるのではないですか？私も学生時代は民青に入ったことがありますが、当時は拡大路線の時代で、することといったら、拡大ばかりなので、あまりにも幼稚というか、これじゃあ矛盾論とか実践論、弁証法や唯物論もへったくれもないじゃないかと腹が立って、方針に反対したことがあります。結局三回生の途中で辞めてしまいました。」

「そういうこともありましたね。あのころは大衆路線で、あらゆる要求とか言って、身近な要求を取り上げて交渉して、成果を上げて支持を広げようという方針です。それと歌って、踊って、恋をしてみたいな仲間づくりでやってましたね。」

榊はなつかしそうに「ところで畑中瑠璃子さんとは、その後どうなったのですか？」と微笑を保ちながら尋ねた。

「そういやあ榊さんとも彼女を巡ってもつれたことがありましたね。彼女は東京で高校の教員になりまして、同僚の先生とも関係ができて、別れました。元々彼女は飽き性ですからね、同じ相手とは続かないのですよ。その同僚の先生とも結婚したけど一年ほどで別れたという噂でしたよ。」

校長は面白がって「ほう、お二人は恋敵だったということですか、まあ青春を共有されたということですね。」と口を挟んだ。

教頭が校長に声をかけた、「そろそろ開演ですので、会場にお願いします。」

**問　榊周次と倉田正俊との学生時代の因縁について簡単にまとめなさい。**

## 四、『すりかえられたキリスト』

### クロスにてこと切れし人三日目によみがえりしは弟ヤコブか

倉吉良造の『すりかえられたキリスト』の講演が始まった。

「イエスの弟ヤコブはイエスとそっくりだった。それでイエス死後のイエス教団では、イエスの後継者として教団のトップになっているのです。それで私は、復活したイエスというのは実は弟ヤコブのことではなかったのか、兄イエスから、自分は捕われて十字架にかけられてしまうが、後のことはお前が教団をまとめてくれるようにと頼まれたのではないかと思ったのです。

なにしろそっくりでしたから、イエスは十字架にかけられて死んだけれど、復活したとなれば、イエス教団は勢いを盛り返すだろうとイエスは説得したわけですね。弟にしたら、命がけの兄の頼みを断れなかったということです。

ただこういう解釈もあり得ますね。本物のイエスは生き残って、弟が身代わりに十字架にかけられたという解釈です。どっちでいくか迷ったのですが、それは頼まれた場合、はい分かりました、承知しましたということはまずないですね。土壇場で、自分はイエスではないと泣き喚くのではないでしょか？もちろん、兄貴のために喜んで犠牲になろうという弟がいた可能性も皆無ではありません。でもそういう話を小説にするのは、無理があり、不自然になってしまいます。

ただ弟ヤコブを復活のキリストとした場合に、最初のうちは弟子たちは本当にイエスが復活したと思ったかもしれませんが、いつまでもイエス役を演じ続けるのは難しいので、結局弟ヤコブに

戻って、教会長に収まっています。そのあたりを弟子たちが騙されたと感じさせないようにしなければならない、これが難しいですね。

つまりイエスは一人しかいません。ヤコブはイエスではない。でもヤコブはイエスの教えと教会を守るためにイエスに成り切ることが求められました。その事情を知っていたのはだれかが大問題ですね。イエスとヤコブだけの秘密だったのか、復活したイエスに最初に会ったマグダラのマリアも知っていたのではないか、一番弟子のペトロにも相談していたのではないか、小説にするのはそこが難しいところです。いちおうだれにも内緒にしていたが、この二人には感づかれていた、しかしイエスとヤコブの思いを理解して、うまく合わせてくれたことにしたのです。

そのあたりの心理描写次第で、彼らの宗教的心情を純粋とも不純ともうけとめられることになりますね。

小説ですから、歴史的事実ではありません。キリスト教徒は今まで通り神様がイエスを復活させたと信じていていいわけです。それが真実かもしれませんね。

しかし、それではキリスト教徒にしか信じてもらえないし、共感も呼びません。それが兄イエスが自分の教えを広げることができずに、偽メシアとして処刑されてしまう。その悔しい思いを引き継いで、愛の教えを広げようと弟が復活のイエスを演じ、みごとに教団をまとめて発展させたという人間ドラマにしようとしたわけです。これなら小説になるのではないかということですね。

でもこれは大変危険なことですね、弟ヤコブが演じているとばれるとどうなったでしょう？信じ込んでいた弟子たちに殺されたかもしれないし、ユダヤ教からもインチキとして弾劾されたでしょう。」

二時間近い講演だったので、要約的に紹介したが、なかなか生徒たちの反応もよく、榊も興味深く聞いた。ただ榊はイエスは食べられて復活したという「聖餐による復活仮説」を立てているので、へーこれでベストセラーならどうして自分の書いた『イエスの聖餐による復活』はベストセラーにならなかったのだろう、と不思議に思った。

とはいえ『ダ・ヴィンチコード』などは世界的にベストセラーで映画でも画期的な興業成績だったようだが、中身はマグダラのマリアはイエスの妻であって、その娘がいたということが、衝撃的だということらしい。神であるイエスをあまりに人間的に描いているというので、カトリック教会の顰蹙を、それが話題作りにもなって、よく売れたということだ。

しかしイエスに妻子があっても、『新約聖書』の「イエス言行録」である「福音書」には全く抵触しないし、イエスは聖霊を宿していたという意味で神であったかもしれないが、人間でもあることは、バイブルでは否定されていないのだから、大した問題ではないはずである。それに比べたら、弟ヤコブが復活のイエスを演じたとか、聖餐によって弟子たちがイエスの復活を共同体験したという方が、はるかにショックなはずである。

**問　倉吉良造の『すりかえられたキリスト』を要約しなさい。**

## 五、校長室殺人事件発生

故知らず煎じし茶なれど人死なばかかる濡れ衣いかで晴らさむ

講演が終わって、校長室に引き返した。榊は遠慮しようと思ったが、御木本校長に誘われて、校長室に行った。あいにくお茶を入れる筈の野々上笙子は用事でいなかったようなので、「私がお茶をいれましょう。得意な方なので」といって湯を沸かして、例の校長専用の茶壺から三人分濃い煎茶を入れて出した。すると校長に電話がかかった。

榊は「いやあ面白かった、まだ読んでなかったもので、勉強になりました。実は、私もイエス関係の本を書いているのですよ。たいして売れてないから、お読みじゃないでしょうが」と話しかけた。

「そうですか、それは知らなかったなあ、お互いに随分昔とは違う方向にいったものですね」と倉吉良造は感慨深げに語った。

その思いは榊周次の方が強かっただろう。自分はあの時は己の存在の全てを賭けて愛していた女をこの男に、奪われてしまった。アーあの時は倉田も瑠璃子も殺して、自分も死んでやりたいとさえ思ったのではないか、ほんの刹那だが、榊周次は、四十数年前と今とが接続して、世界が歪み、濃い煎茶の薫りに痺れたような気がしたのである。

倉吉良造は、いわくある男に出会って、少しバツが悪そうな表情をし、照れ隠しにニヤと微笑して、そしておもむろにお茶を飲んだが、急に苦しみだして倒れたのである。

「流行作家校長室で毒殺される」早速、テレビや新聞のトップを飾る大ニュースになってしまった。もちろん、お茶を入れたのは榊だし、動機も昔の恋敵ということで、皆無というわけではない。警察はまず榊周次が最も容疑が濃いと見て重点的に取り調べられたのである。

「榊さん、あなたもイエス関係の本を書いているじゃありませんか。それが大して売れなかったのに、昔の恋敵のイエス本がベストセラーだということで、腹の虫が治まらなかったのじゃないですか。」

榊は弱った顔して、「でもその日に知ったことですよ。講演を聞いてすぐに校長室に行き、毒薬を仕込む余裕も時間もないでしょう。」

取り調べの刑事は納得しなかった。「その日に初めて知ったというのはあなたの説明であって、イエス本を書いている以上、イエス本には当たっておられるでしょう。特に日本人で流行作家がイエス本を書いたとなると知らなかったという言い訳は通りません。」

榊は手を振って否定した。「遠藤周作は読んでいるのですが、倉

吉良造は新聞広告で見た程度です。まさか彼が倉田さんだったとはね、ペンネームだったし、人相も随分学生時代とは違うので、当日まで気づかなかったのです。それに毒は三人のお茶に入っていたのでしょう。もし倉吉さんに殺意を抱いたのなら、倉吉さんにだけ入れたはずですね。」

「その言い訳は通りません。そういう言い逃れのためにどの茶碗にも入れたとも考えられますからね。」と応えた。

「じゃあ毒の入手経路は？私は毒薬の知識も入手の方法も全く持っていませんよ。」榊はきっぱりとした調子で無実を主張した。

「それを今調べているところです。」と担当の田代常雄刑事は目算ありげに言った。

「任意で引っ張っておいていつまで取り調べるのですか、私は超忙しおじさんですから、即帰してください。逮捕令状もなしの長時間の取り調べは人権蹂躙です。あっそうだ、パソコン貸してください。ミクシィに書き込みます。今大阪府警で取り調べ受けてるって、つぶやきに書き込みますから。」

田代刑事はあきれた顔をして「あんたね、殺人容疑で取り調べられてるのだよ、よくまあそんなのんきなこと言ってられますね。」

榊はさらに調子に乗って言った。「あの私の『イエスの聖餐による復活』と、倉吉の『すりかえられたキリスト』を比較して読んでいただいた刑事さんの感想お聞かせ願いたいですね、ぜひ。」

掲示はあっけにとられたような顔をしていたので、榊は説明した。「いやね、警察の方にもご意見伺いたいというのは、私の著作に対する批評が毎朝新聞に出たのはいいのですが、これは予め犯人と目星をつけて、それにそった状況証拠を集めていく捜査のやり方があるでしょう、それ」

「見込み捜査ですか？」

「そう、見込み捜査といっしょで、一見筋が通っているようでも、真理に迫っているとは言えないというのですよ。何言ってんだと思いましたね、これが怪しいと目星がついているのに、それの状況証拠や決定的な物証を探さずにどうするということです。そうでしょう。私が確かにお茶を汲んだ、それを倉吉氏に飲ませた、二人は元恋敵だった。これは怪しいわけで、徹底的に証拠調べをしないとね。聖餐による復活というのも同じことです。」

と榊は自著について刑事にまでその内容の意義を説明しようとしたが、その時、急にあわただしくなった。

上役の安藤光信部長刑事が入ってきて、「榊周次、毒物劇物取締法違反、毒物不法所持の容疑で逮捕する」と宣言し、逮捕令状を見せたのだ。榊は驚いて「ギェー、何の証拠があって逮捕するんだ！」と叫んだ。

「午後七時〇分、大阪市住吉区の榊周次の自宅を家宅捜索した結果、殺害で使用されたと同じヒ素が含まれた薬剤が靴箱より発見された。」と安藤刑事はその理由を説明した。

「そんなの真犯人が私を冤罪に陥れるために仕組んだことですよ。私がいつどうやってヒ素を入手したのですか？」

「バカ、それはこっちが訊くことだ」取調べ担当の平の田代刑事が榊に自供を迫った。「榊さん、あなたのおっしゃるとおり、怪しいと目星がついた相手は徹底的に調べて決定的な証拠を上げるというのが捜査の常道です。その方法でヒ素を発見したわけです。それにしても玄関入ってすぐの靴箱にしまっておくというのは杜撰な管理ですね。」

「そんな、すぐ発見されるような場所に隠すわけがないでしょう。きっと犯人は、私が出頭したと知って、濡れ衣を着せるために二階建て五軒長屋の私の自宅に忍び込み、警察のガサ入れのある前に、急いで靴箱に入れて帰ったのでしょう。」

「そういう判断はこちらでおこないます。第一警察やマスコミがすぐに自宅周辺の聞き込みに入っていますし、怪しい動きをすればすぐばれてしまいますよ。」田代刑事は落ち着き払って言った。

事件発生の時、榊の妻千恵子はもう三十年以上主宰している書道教室にいて留守で、出戻りの娘絵美は近くのコンビニのバイトをしていて、家は留守だったのである。警察からすぐに出頭したという知らせがあり、二人とも動転してしまった。娘絵美はすぐに家に戻り、自分と娘の着替えなどをかばんに詰め、小学校で急用ができたといって、孫娘早苗を引き取り、姉つまり周次の長女蘭のところへ身を寄せたのである。取材陣が押し寄せてくるのを恐れたのだ。

千恵子は書道教室を締めて、すぐに取り調べ中の大阪府警に向かった。そこで千恵子も二時間ぐらい最近の周次の様子から、半世紀近い夫婦の歴史について事情聴取を受けた。「うちの人はゴキブリ殺すのだって震えているぐらいですから、絶対にだれかを攻撃するようなことはあり得ません、まして殺すなんて、天地がひっくりかえってもないですから。」と言い切った。

千恵子はいくら待っても周次を返してもらえないので不安になっていた。そして面会もさせてもらえず、家に帰ればマスコミの取材攻勢だろうから、長女蘭のところへ身を寄せたのである。

**問　どうして榊周次は、倉田良造毒殺の嫌疑をかけられ、逮捕されることになったのですか、そのいきさつを要約しなさい。**

## 六、ベーコンの「四つのイドラ」

**靴箱に隠しもちたるヒ素出でぬ太刀打ちできぬか知の力では**

その夜のテレビニュース、翌朝の新聞、ワイドショーなどマスコミが総出でこのセンセーショナルな大手門高校の流行作家倉吉良造殺人事件を追っかけたのである。自宅の靴箱からヒ素が出て、逮捕された以上、榊周次が犯人と決め付けたような内容の報道ばかりである。

翌朝、事件現場となった大手門高校は始業時間になり、生徒を校庭に集め、事件の当事者でもある御木本校長が説明した。「みなさん、ご心配をおかけして申し訳ありません。もしあの時に電話がかかっていなかったら、私もヒ素入りのお茶を飲んでいたところです。事件の真相解明は司直に任せますが、神聖な教育の場で凄惨な毒殺事件を惹き起こすなど到底許すことはできません。私はあの温厚で研究熱心な、みなさんの信頼を集めていた榊周次先生が真犯人であるとはとても信じ難いところです。それはみなさんも同じ気持ちでしょう。

こんなことで動揺して勉学に集中できなくなったら、それこそ大変です。それが狙いで騒ぎを起こしているのかもしれませんね。一日も早く榊先生の無実が証明されて授業に戻られるように期待していますが、長引くことも考えられ、早急に手を打つことも考えています。ともかく私も命が助かってほっとしているような状態で、理路整然と話せなくなっていますが、一日一日が勝負のみなさんですから、くじけないで頑張ってください。」

校長自身、恐怖で食事がのどを通らないで、神経がイライラしている状態である。というのは、あの時電話がかからなくて、校長が先に飲んでいたら、倉吉は飲まず、校長毒殺事件になっていたからである。大胆な学校改革で、教職員の大部分は校長に反撥しており、転校を迫られた生徒にも相当恨まれているので、その線で事件が起こっていても不思議はないからである。

生徒たちは駅売り朝刊を買ってきて、見せ合っている。

なんと畑中瑠璃子の談話を掲載しているのもある。彼女は旧姓に戻っている。離婚経験は三度もあったらしい。教師としては評判がよく、校長を三期務めて、今は女子大で、日本史及び女性史の教授に収まっているらしい。

「榊さんと別れて、倉田さんとくっついたんだけど、榊さんは純粋だったので、荒れたわね、でももう四十五年も前よ、それほど根に持つかしら、私なんか榊さんの顔もはっきりとは覚えてないわ、若い時のまま現れれば別だけど、今の顔写真見ても見当つかないもの。倉田さんは楽しい人だったけど、我が強かったわね、それで作家として成功したわけだけど、組織人としては伸びないわね。男としては浮気性よ、いい女だと思ったら声をかけないではいられないタイプだったわね。

ええ？榊さんがどんな風に荒れたかって、倉田も瑠璃子も殺して、俺も死ぬって言ったわよ、でもそんなことよく言うセリフでしょう。榊さんが犯人だなんて、信じられないわ、私の知ってる榊さんなら絶対に犯人ではない、うん、断定していいわよ。」

これが見出しでは「倉田も瑠璃子も殺して、俺も死ぬ」となる。中には少数ながら、毒薬を巡って「謎の入手経路」とあり、玄関

の靴箱にあったのは不自然だと指摘し、松本サリン事件の河野義行さんのような冤罪事件の可能性を指摘するものもあった。

昼休みに、「どうしよう、絶対無実だよ、先生を助けなくっちゃ」上村陽一は三輪智子と新聞を見ながら言った。智子も憤って言った。「標的が校長か倉吉良造かまだはっきりしていないわけでしょう。ひょっとして榊周次だったかもしれないわ。」

二人の話を側で聞いていた橋田譲治は「それはないよ。だれも榊先生と倉吉良造の昔の関係は知らなかったのだから、校長室で三人がお茶を飲むことになることまで想定できないだろう。だから榊先生を殺すために校長室の茶に毒を盛ることはあり得なかったということだ。」ときっぱり言った。

「倉吉良造が狙われたとしたら、榊先生以外に動機を持つ者はいないということね。」智子は頭をひねった。

「イギリス経験論の実験観察の結果確かめられたもののみを根拠に語るというので、整理してみよう。イギリス経験論は地理上の発見でアフリカや新大陸、東アジアとの交易や植民活動が飛躍的に発達して、国内でもどんどん新しい産業や製品が生み出され、それに伴って実用的な科学技術が発達しつつあった時代に生まれた。自然の原理を極めようとする形而上学的なギリシア哲学の権威に囚われず、実用に役立つ科学を作り出そうとした思想運動だと言っていい。」上村陽一は急に哲学を持ち出した。三輪智子は頷いて「そりゃあ榊先生の事件だから、先生から教わった哲学で謎を解けば、先生もきっと喜ばれるわ。」

「じゃあ『四つのイドラ』からいかなくっちゃ」と坂本加奈が得意げに言った。「種族のイドラ・洞窟のイドラ・市場のイドラ・劇場のイドラね。」

三輪智子はきょとんとして「それで種族のイドラとどうかかわるの、坂本さん？」と尋ねた。

坂本は「種族のイドラは、人間というのはなんでも割り切ってとらえようとする。それから自分の都合よく解釈してしまう傾向があるということね。だからこの場合、毒が茶壺に入っていたことと、殺人事件が起こったことをすぐに結び付けてしまっているけれど、真犯人が別にいるとすると、標的は校長先生か、あるいはもっと別の目的で、先生方不特定多数を狙ったものかもしれないということね。」

上村陽一は感心した。「坂本さん、なかなかやるね、そういう可能性もあるわけだ。じゃあ事件は、まだまだ続く可能性ありだね。」

加奈は得意になって〈洞窟のイドラ〉に移った。「〈洞窟のイドラ〉は個人の狭い体験から身についてしまった固定観念にとらわれるということでしょう。倉吉良造の講演会があり、倉吉良造が死んだのでつい倉吉が標的だったという固定観念になりがちだということかな。うーむこれじゃあ〈種族のイドラ〉と変わりないな。」

三輪智子が言った。「動機が恋敵だったということすごくありそうなことと思ってしまうけれど、それって固定観念でしょう。何しろ四十五年も前の話だから、殺意を抱き続けてきたというのはほとんどあり得ない話じゃない。それに比べて、倉吉さんや榊先生が問題にしていたキリスト教のことね、復活のイエスが実は弟

ヤコブだったとか、イエスは実は弟子たちに食べられて、それで神と合一したと感じた弟子たちの全能幻想からイエスの復活を弟子が体験したと思い込んだという説明ね、こういうのって熱心なキリスト教徒が聞いたら、何か攻撃されていると思ったり、神を冒涜されたと思って殺意を抱くこともあるんじゃない。その方がうんと可能性が高いんじゃないかしら。その点が榊先生の恋敵の話が分かりやすいので、ぼやけちゃってるみたいでしょう。」

陽一は頷いた。「そういえば、榊先生も『イエスの聖餐による復活仮説』を出版されるときは、キリスト教原理主義者に、冒涜だと誤解されて殺されるかもしれないと、ビビッていたそうだよ。でもせっかく思いついたし、宗教の相互理解に役立つはずだということで、勇気を出して出版したのだけれど、思ったほどは反応がなかったと言われていたよ。」

「次は市場のイドラ）ね」坂本加奈が続けた。「市場では言語を使って取引するでしょう。言語を使用していると、言語になっている概念に対応する事象が本当にあると思ってしまうということね。たとえばアトムという概念があると見たこともない、実験観察もしていないのにアトムによって世界が構成されていると思い込んでしまうというわけ。それをこの事件に適用すると、よく分からないわ。」

山田茂樹がいつの間にか会話に入ってきた。「イエス・キリストが存在したことが倉吉さんでも榊先生でも大前提だけれど、実はそれがかなり疑わしいらしいよ。トム・ハーパーの『キリスト神話』によると福音書のイエス説話の八割はエジプト神話からのパクリで、イエスは神話に過ぎないということだ。これは典型的な市場のイドラだろう。」

橋田譲治が口を開いた。「聖徳太子だって実在が疑われていますね。確かに名前が歴史書に残っていると、その人が実在したように思われますが、歴史書以外の記録に出てこないと、実在したとは言い切れない。ただ実在しなかったとも言い切れないので、実在した証拠がないことで、非実在を証明した気になっているのも独断的ですね。」

「次が劇場のイドラよ」と坂本は続けた。「劇場ではよくできた台本に従ってドラマが演じられますと、まるで本当のように思われて観客を沸かせます。そのようにしっかりした論理で展開された理論は、実験観察で確かめられたものでなくても、つい真実だと思われてしまいます。特にプラトンやアリストテレスのような絶対的な権威がある学者の言ったことは、そのまま真理だと思われてきたわけです。しかし実験観察で確かめられたものでなければ、全く役に立ちません。そこから権威を信じ込むことによる偏見を劇場のイドラというわけです。」

「だから、逮捕状がでただとか、新聞に報道されたとか、ワイドショーでだれかがこういったなんてみんな劇場のイドラだということですね。自分で実験観察して、しっかり確かめたもののみを信じなさいということですね。」三輪智子はうなずいた。「だから私たちは、榊先生をずっと観察してきたので、どういう人が確かめているわけです。その結果、彼が人殺しをするとはどうしても思えないのです。」

山田茂樹は「それは甘いな。我々が見ているのは日常の榊先生でしかないだろう。彼がどんな仮面を被っていないとも限らない。日頃家庭で子供に接している親が子供が問題行動を起こした時に

うちの子に限って』と言って庇うのと同レベルじゃないか。」と冷ややかに言った。

陽一はベーコンの「単純枚挙でない帰納法」を見習おうと提案した。肯定的な事例だけ列挙して法則が確かめられたつもりになっているのが、単純枚挙の帰納法だ。それでは不十分で〈三つの表〉を作成する必要があるのだ。

「それじゃあ榊周次について『三つの表』を作成してみよう。最初は『存在の表』だ、肯定的事例をすべてあげる。次に『欠如の表』だ、否定的事例をすべてあげる。そして最後に『程度の表』だ、ある条件では肯定的事例だが、条件次第で否定的事例になるという事例をすべてあげるというものだ。」

存在の表
① 榊が注いだ煎茶にヒ素が入っていた。
② 榊の家の玄関の靴箱から犯行と同じヒ素が発見された。
③ 動機として四十五年前に恋人を奪われた恨みがあった。
④ 動機として同じイエス本でも倉吉のはベストセラーになったが、榊のは増刷されなかったので妬んでいたかもしれない。

欠如の表
① 榊が倉吉が昔の恋敵倉田と同一人物であったと知ったのは、事件の直前で、短時間でヒ素を用意するのは無理。
② 榊が殺したいほど恨み続けていたとしたら、直前まで倉吉が倉田だと知らなかったのは不自然。
③ 本の売れ行きが動機になるほどであれば、榊は倉吉の本を読んでいたはずでその形跡がない。

程度の表
① もし御木本校長が電話に出ずに先に飲んでいれば、校長殺害事件になり、榊に動機がなくなる。
② 校長殺害目的なら動機を持つ者は教職員や転校を迫られた生徒及びその父母などに広がる。
③ 宗教的動機なら、標的は榊であった可能性もある。

山田茂樹は苦笑した。「榊先生が犯人でない可能性をいろいろあげているだけで、要するに事件で使われたヒ素がでたのだから、それを偽装した人物を特定してはかせない限り、榊先生の潔白は証明されないよ。要するにベーコンの単純枚挙でない帰納法は、決定的な証拠には勝てないし、法則化できるほどたくさんの事例があげられないとだめなんだ。」と冷ややかに言った。

**問　イギリス経験論の父ベーコンについて、「四つのイドラ」、「三つの表」を要約し、特色を論じなさい。**

## 七、デカルトの方法的懐疑

唯円の虫も殺せぬ人なれど故あるならば幾千殺せり

坂本加奈が手を挙げて発言を求めた、何んだか楽しんいるように微笑んだ。に微笑んだ。「じゃあさあ、フランス人で〈近代哲学の父〉と呼ばれ、大陸合理論を始めたデカルト(一五九六年～一六五〇年)の出番ね。彼は、ベーコンの〈三つの表〉では真理の体系は無理だとみたようね。だって存在の表で、肯定的事例をすべて挙げると言っても、すべてあげているうちに日が暮れてしまうでしょう。三つの表を完成させるのは一生かかっても無理なのよ。だから感覚的現実にもとづいて真理の体系を作るのは無理っていうことなの。そこで方法的懐疑で疑っても疑っても疑いきれない絶対確実な真理を見出して、それから真理の体系を演繹しようということになったわけ。その方法で真犯人に迫ってみたら。」

上村陽一は「何か見当違いな感はあるけれど、デカルトの場合、彼が疑えるとした感覚的現実には、目撃証言や物的証拠もみんな入るだろう、疑えないものは、疑っている我しか残らないわけだ。そうすると感覚的現実に過ぎない殺人事件には適用できないということになる。」

三輪智子は驚いて言った。「倉吉良造が殺された事実まで疑えるわけ？死体解剖でヒ素中毒死という結果は出たし、お茶からはヒ素が出たから、殺人事件は否定できないでしょう。上村君のいうのは考える我を見出すまでは、殺人事件も疑えるということで、疑っている我に到達すれば、デカルトによれば、考える我にとって明晰判明なら感覚的現実は事実と受け止めてもいいということでしょう。」

橋田譲治も苦笑した。「三輪さんの言う通りだよ。デカルトの近代的な自我の自覚というのは、考える主体の確立ということだろう。デカルトは感覚的現実や数学的推理もすべて疑えるし、目覚めているときに思い浮かぶことは、すべて夢でも思い浮かぶので、どれも確実な真理ではないとした。その上で、疑っても疑っても疑いきれないものとして疑っている我の存在だけは疑っている以上疑えないとして、〈我思うゆえに我あり〉という哲学の第一原理に到達したんだ。その上で絶対確実である己の思惟にとって明晰判明なものだけを真理と認めようということだ。

ただ己の自我というのも疑っている不完全な存在だから、不完全なのに絶対確実に存在しているのは神という完全者に支えられているからだと信じて、真理を積み上げていこうという態度だな。」

陽一は苦笑いして「そうだな、全く。とすると我々が知っている榊先生からは、倉吉良造殺害は演繹できないということだな。」

山田茂樹は呆れた。「おいおい、そりゃあ駄目だよ、懐疑的精神が全く働いていないじゃないか、榊先生は優しくて温厚で虫も殺せないように見えるけれど、ひょっとしてずっと心の奥底に昔の恋敵に対する殺意を温め続けてきたのではないかと一応疑ってみないといけないだろう。疑った上で、やった証拠が間違っていたり、やっていない証拠を見つけて初めて疑いを解くべきなんだ、そうでないと科学とは言えないよ。上村君や三輪さんは榊先生と深く関わっているので、感情が邪魔して理性的に考えられなくなっているみたいだな。」

確かに言われてみるとその通りである。主観である考える我は、あくまでも自己自身が考えることにのみ依拠すべきで、衣食住や大切な人への思いなどによって理性を曇らせてはならないのである。

榊先生は温厚で優しいから人殺しなどするはずがないというのも、必ずしも真理ではない。もしかしたら、何か秘密の使命を帯びていて、倉吉良造を殺したのかもしれない。

| 主観 | 客観 |
|---|---|
| 精神的<br>実体<br>理性 | 延長的<br>実体<br>物質 |
| 神（完全者） | |

戦争や革命という非常時には、その人の平和時の性格や気質からは考えられないことでもやってのけるのである。今は非常時ではないので、そういう可能性はほとんどないが、榊先生は我々の知らないところで追い詰められていて、殺人行為をせざるを得ないところまで追いつめられていた可能性も皆無ではない。

これは『歎異抄』「第十三条」の世界ではないか、「これにてしるべし。なにごともこころにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし。しかれども、一人にてもかなひぬべき業縁なきによりて、害せざるなり。わがこころのよくてころさぬにはあらず。また、害せじとおもふとも、百人千人をころすこともあるべし」と、親鸞は唯円に告げたのである。

**問　デカルトの「方法的懐疑」について論じなさい。**

## 八、留置場の悪夢

**熱かればかの人冷めよと碗を置き吾かまわじとそを飲みしかは**

榊に対する取り調べは深夜三時まで続いた。主にヒ素の入手経路を追及するものである。病歴を質問し、どこかの病院から密かに持ち出したのではないかとか、友人・知人に病院関係者がいないかとか、農薬との関連で農家の知り合いとかも聞かれたが、ここ十年間にかかった医療機関の名前を思い出すだけでも相当時間がかかってしまった。

大阪府警の留置所では、たった一つ残っている奥歯がぐらついて痛みはじめ気になって寝付けない。榊は倉吉毒殺で自分が起訴されることはないだろうと考えていた。動機がどれも薄弱だ。半世紀前の恋の恨みとか、イエス本での妬みでは殺人動機までいかないだろう。動機が分からずに起訴できるだろうか。たしかに家の靴箱からヒ素が出たのは決定的証拠とも言えるが、それは真犯人の偽装工作の可能性も皆無ではない。

それより問題は倉吉殺害の動機がイエス本にあるとしたら、キリスト教関係者が本の中身に宗教的な冒涜を感じたからということになり、それなら狙われていたのは自分だった可能性も大いにあるのだ。あるいは二人とも殺そうとしたのかもしれない。

弟ヤコブが復活のイエスだった可能性は榊の本にも書いてあることである。ただ倉吉の『すりかえられたイエス・キリスト』では意図的に弟ヤコブが復活のイエスを演じているが、榊の『イエスの聖餐による復活』では、弟ヤコブもイエスの遺体の聖餐に加わったために、イエスの聖霊が自らの身体に入ったと思い込み、全能幻想が異常に高まって、イエスによって人格ジャックされてしまったのである。それで二重人格症状で、復活のイエスを演じてしまったのである。だから元の弟ヤコブに戻れば、自分がイエスになっていたことは忘れていたことになる。

ともかくイエスが神によって死者から復活させられたということは否定されている。両方ともキリスト教の教義を認めていないのである。しかしそれはキリスト教徒でない限り、イエスの復活を認めないのは仕方ないことで、いちいちそれに対して著者を殺していたら、これまでのイエス本の著者はあらかた殺されていることになる。

だとしたら、倉吉が狙われたのは不自然だ。榊の方が狙われるリスクは大きいはずである。榊の本では、イエスは最後の晩餐で処刑された後に、過ぎ越しの食事でイエスの聖餐を行うリハーサルを行ったという解釈がなされている。

つまりパンをイエスの肉に見立てて食べさせ、赤ワインをイエスの血に見立てて飲ませ、イエスの肉を食べ、血を飲んだ者を終わりの日に甦らせるという、ガリラヤ湖畔での約束に従って、いよいよメシアの時が来たと告げたのである。要するに明日の晩餐には私の遺体を聖餐しなさいと指示したという解釈である。

なんと猟奇的なえげつない解釈だと誤解しないでいただきたい。イエスは自分には聖霊が宿っていると確信していたのだ。それはイエス実在説をとる限りだれも否定できまい。その聖霊の力で悪霊を退散させるパフォーマンスを行っていた。

ところがいよいよイエスは十字架に架けられて人類の贖罪をし

なければならなくなった。要するに偽メシアと告発されて、それに十分に反駁することができなくなったのである。これも神の計画の内なのだとイエスは解釈し、自分にだけ宿っている聖霊を弟子たちに与え、じり貧だったイエス教団が捲土重来を遂げ、飛躍するチャンスだと捉えたのである。

どうすれば聖霊を弟子たちに分けられるのか、イエスの信仰に従えば、それはイエスを聖餐することによってである。なぜなら、聖霊はつきものとして捉えられていたので、イエスの肉を食べ、血を飲めば、肉や血は消化され、排泄されるが、聖霊だけは弟子の体に残って、見事に聖霊が移転するからである。

しかし、イエスも人間である。イエスを食べることは人肉嗜食、英語で言えばカニバリズムであり、タブー破りではないか、そんなことをすればイエス教団はカニバリストのつまり人食いの集団とされ、皆殺しにされてしまう危険が大である。だからそんなことをイエスが考える筈がないというのが常識であろう。

だからこそイエスは、聖餐を命じたのである。イエスは聖霊を宿した聖なる身体であり、獣の肉やただの人肉を食べるのとは違うのである。イエスを聖霊を宿した聖なる存在と信仰しなければ、イエスを食べることは最も重い罪である。しかしイエスの聖霊を信仰していれば、イエスの聖餐は、神との合一であり、自らに聖霊を宿す聖なる行為なのである。

こうしてイエスに対する信仰は命がけとなった。イエスを聖霊を宿した肉体として信仰しきっていなければ、ついてゆけなくなったのである。イエスを聖餐する者の集団として十二使徒およびマグダラのマリア、弟ヤコブ、親類クレオパなどがいたのである。

榊によると、イエスの聖餐によって聖霊が弟子たちに宿ったと弟子たちは思い込んだのだ。そうすると神との合一感から全能幻想が無限大に増幅することになる。その結果、イエスを思い出させる行為を見ればその人がイエスに見えるという復活幻想が弟子たちに生じたのである。

その最初がマグダラのマリアに園丁がイエスに変身した事件である。次にエマオでクレオパとおそらく弟ヤコブに旅人がイエスに変身した事件である。そして第三がエルサレムのアジトの密室で突然イエスが現れた。これが弟ヤコブがイエスに人格ジャックされ、みんなが復活のイエスと見た事件である。つまりどれも聖餐による全能感の増幅として説明可能であり、それ以外に説明の方法がない。もちろん神が実際にイエスを死から復活させたとしたら別であるが。

だから榊はこれをタブー破りとして、一般のカニバリズムと同一視し、キリスト教を人食い宗教のごとく非難しているのでは全くないのである。むしろ聖餐によって聖霊を引き継がせ、世界宗教にまでしたイエスの奇跡的な献身を賛美しているのである。その意味では、復活をみせかけたというこれまでのキリスト教をインチキ宗教のようにいう解釈とは本質的に異なっている。

それでもイエスの肉を食べ、血を飲んだという解釈は、カニバリズムを絶対的タブーにしてきたキリスト教徒にとっては、キリスト教をはなはだしく冒涜する解釈のごとく受け止められるかもしれない。しかしそれはとんでもない自己矛盾に陥る反応である。なぜならキリスト教会では、いまだにイエスの肉を食べ、血を飲むことを最も重要な儀礼としているのである。キリスト教会では

礼拝のことを聖餐式あるいはミサ（聖なる食事）と呼んでいるのである。パンをイエスの肉として食べ、ワインをイエスの血として飲むことが聖なるイエスとの合一であるのに、本物のイエスの肉を食べ、血を飲んだとしたら、それこそ神聖な儀礼であり、本物の合一であることになるだろう。イエスが地上にいないので、パンやワインをイエスに見立てているのだから。

しかしそういう榊の真意をキリスト教徒が理解せず、キリスト教に対する攻撃のごとく受け止められるとしたら、極めて遺憾としか言いようがない。そして倉吉毒殺事件が、真の標的が榊でなかったことを祈るほかないのである。もしも榊が標的だったら、警察から出たら殺されることになるかもしれないではないか。

いつのまにか榊は眠っていたのだろう。時は戻って、校長室でお茶を飲む場面になっていた。校長が事務員を呼んだがだれもこない、どうも出かけているみたいだ。教頭がいそいそとお茶を煎れて運んできた。そこに電話が鳴って校長が電話に出た。榊と倉吉がお茶を飲みかける、熱そうなので、倉吉は冷まそうと置いた。榊は構わずに飲んでしまった。喉や胃が突き破られるような苦しみが襲って、榊はのた打ち回った。心なしか校長と倉吉は驚いたというよりニンマリしているように見えたのである。

**問　聖餐による復活仮説を要約しなさい。**

## 九、誰もがメディア

### 誰でもが情報集め発信す光はなてよメディア人間

新聞やテレビは、榊の自宅でヒ素が出たことを決定的と考えて、自供は時間の問題で、自供がなくても殺人容疑での逮捕に切り替わるだろうと報道していた。そして倉吉の『すりかえられたキリスト』の内容を詳しく紹介し、弟ヤコブの苦悩を見事に描いた名作だと褒めちぎった反面、榊のイエス本は猟奇的なトンデモ本であるとし、いかにもつまらない本だから売れなかったかのように報道した。

六月三日金曜日、上村陽一はあまりに報道が一面的で、どんど

ん榊が不利になっていくのに焦燥感を感じていたが、どうしたらいいか分からなかった。朝のホームルームで発言した。「榊先生が犯人みたいに決め付けている報道ばかりで、このまま起訴されたりしたら大変です、みんなも榊先生が犯人とは思っていないでしょう。なんとかできないでしょうか？」

みんな静まって何も言わない、考えてもなかなか名案がないからだ。「そんなの警察や裁判所があるのだから、信頼して任せるしかないでしょう。」と早田遥は吐き捨てるように言った。混乱を惹き起こされたら困るという反応だ。

橋田譲治が挙手した。「榊先生確かにピンチですね。なんとかできるのなら僕も協力します。ちょっと考えたんだけれど、問題はマスコミ報道でしょう。こちらもメディアで対抗するんです。二チャンネルとか、ミクシィを使って、こちらから情報を流し、榊先生がどんな先生か、事件の情報を分析して、とても起訴できるようなものではないことをアピールしたらいいと思います。」

「そうね、ミニコミ新聞みたいなのも刷って、学校周辺で配ってもいいかもしれないわ。」と三輪智子も発言した。担任の薮田俊夫先生が「ちょっと待った、それは学校が許可しないだろう。なにしろ君たちは受験生だから、成績に響いたら大変だからね。」

山田茂樹は冷たく言った。「先生、やりたい奴にはやらしておけば、成績より大好きな先生の身が大切だと判断して、自己責任でやっているのでしょう。いわば良心からやっているわけで、それを自分の私的利益の方が大切だろうという言い方は、教育的ではないですよ、でしょう。」

「そうか、分かった。あくまで個人的にやってくれたまえ。私も榊先生には同情しているので、正直なところ、あまり干渉したくない。あくまでも受験生だということを忘れずに、ほどほどにすることだ。ホームルームでは取り上げなかったということにしておいてくれ。学校ぐるみで警察に圧力をかけるようなことはできないからね。」薮田先生はたどたどしく緊張して語った。

昼休みに有志が相談した。「この前のさ、坂本加奈の提案の哲学史にひっかけてこの事件の謎を解くというのは、ミクシィのコミュニティでやろうよ。二チャンネルでもこの事件のコーナーを作って、どんどん意見を書き込むことだな。」橋田譲治は乗り気だった。

三輪智子が発言を求めた。「この事件はさ、きっと遠からず転回すると思うの。だって榊先生が犯人にしては動機があまりに不自然だし、すると、犯人は別にいるってことでしょう。つまり真犯人は校長室に毒薬を仕掛けたわけだから、標的は倉吉さんじゃなかったってことよ。校長が標的という可能性大ね。ということは犯人は失敗したったことよ。それで次の準備期間をとるために捜査を榊先生の方に向けたと考えられるでしょう。」

上村陽一は頷いた。「さすが三輪さん頭いいね。それじゃあ榊先生は遠からず釈放されるってことか？」

橋田譲治は言った。「理屈通りにいかないのが事件だ。とりあえず、油断せずにメディア活動をやっていこう。お互いに無理のないように、各メディアにそう長くないのを一つずつでも毎日、勉強の合間に書き込むことだ。二チャンネルはぼくがコーナーを作るから、ミクシィの管理人は上村君がやって、三輪さんは隔日に

でも、三日に一度でもいいからミニコミ新聞を作ってくれる？その費用はみんなでカンパだ。」

「材料はミクシィやニチャンネルからとったり、私が雑文を書いたり、投稿してもらったのにするわ、Ａ４かＢ４裏表一枚程度ね。それから榊先生が管理人をしているミクシィがあるでしょう。そこにも投稿して私たちの活動に参加を呼び掛けたらどうかしら。」三輪智子は弾んでいった。

上村陽一は「よーし」と気合を入れ、「古文のさ、古谷一哉先生なら相談に乗ってくれるかもしれないね。印刷ぐらい手伝ってくれるかも、紙はカンパでいくとしても輪転機がないとね。」

**問　「誰もがメディア」の時代について論じなさい。**

## 十、魂の置き入れと聖霊のつきもの信仰

### 主イエスの聖霊のごと置き入れぬ人の魂つきものならずや

三日金曜日、その日の内に、つまり午後九時に、上村陽一は「大手門高校毒殺事件―榊周次は冤罪だ」というコミュニティをミクシィに立ち上げた。冤罪と決め付けたのは、投稿者が有罪と書き込むのが多くなったり、冤罪説を揶揄したり、ののしったりされた場合に、せっかくのキャンペーンが著しく妨害されることになりかねないので、目に余るものはカットできるようにするためである。

そして「哲学史で謎を解く」というトピックを設けた。ただし哲学で謎を解くと言っても、直接犯人がだれかを推理するのを哲学に期待するのも無理があるので、各哲学を初心者にも無理なく理解できるようにした上で、できればこの事件にも触れて、それぞれの哲学と関連させてこの事件をどうとらえるべきか論じていただきたいと記しておいた。

五、六での議論を紹介した後で、続きの投稿をお願いしますとトップのところに書き込んだら、すぐに坂本加奈から書き込みがあった。午後十一時だ。

「カナカナです。榊周次先生の『イエスの聖餐による復活』は読みました。とってもワクワクしました。事件と直接は結びつかないのですが、先生はとてもイエスを尊敬し、愛されていることがよくわかりました。そんな人が殺人事件を起こすなんてあり得ないと思います。

それはともかく、哲学史でデカルトの途中でしたね。デカルトといえば心身二元論ですね。動物の身体も人間の身体もあまり変わらないというのが、ベサリウスの『人体構造論』ではっきりしたのですね。それで動物は神が作った精巧な機械だという動物機械論をデカルトは唱えています。じゃあどうして体の中身は同じなのに、人間だけが言語を自由に操って文明を切り開くことができたのかが問題です。

それで人間の魂だけは神様が特別に誂えて、先天的に置き入れたに違いないとされたのです。つまり魂は人間の体に置き入れられる身体とは別の精神的実体だということですね。身体はあくまでも物質的な延長的実体だとされるので、心身二元論なのです。これは精神と物質の二元論で世界を捉える物心二元論の一部分を構成しています。

榊周次『イエスの聖餐による復活』との関連ですが、イエスも榊先生によれば魂の置き入れ論に近い立場なのです。魂ではなく、聖霊の置き入れ論ですね。それを聖霊信仰はつきもの信仰だという形で榊先生は表現されています。聖霊といえば神の一種で、悪霊を追い出したりするわけですが、イエスが語った聖霊も、デカルトのいう人の魂もつきものということでは共通しています。ただデカルトが聖霊信仰から魂の置き入れ論を考え付いたのかどうかはわかりませんね。

事件の謎解きとは関連しないでしょうが、一所懸命考えて書きました。」

陽一はうれしかった。「ヨウヨウです。カナカナさんありがとう。直接事件の謎を解くというのは無理でしょう。でも榊先生の思想史、哲学史に新しい光を当てた素晴らしい解釈です。確かに聖霊と魂とはつきものということで共通していますし、両方とも精神的実体でしょうね。福音書の聖霊をつきものとして捉える捉え方があって、初めて魂の置き入れという発想がデカルトに浮かんだとしたら、福音書の再解釈が近代的な主観・客観認識図式を生んだことになり、北方ルネッサンスの発展としてデカルトを位置づけられるかもしれません。」

午後十一時半だ、立て続けに書き込みがある。

「ノリリンです。大手門高校生のみなさん、榊先生救出のため頑張っていただいてありがとう。私は東京に住んでいる哲学愛好家です。榊先生の文章が好きで勉強させてもらっています。先生が突然犯人扱いされてしまって、本当にびっくりしました。私たちも榊先生が管理人をされている『人間論の集い』や『倫理大好き』『宗教を見直そう』『マルクス再読』などのコミュニティで、大いに榊先生のお仕事を見直し、その意義を訴えることにします。そうすることが結局は先生の信用を回復することになり、無実の証明につながるということになるからです。その意味でもこのトピックは素晴らしい。

聖霊がつきものとして捉えられていたので、聖餐による聖霊移転という発想が生まれ、復活幻想が可能になってキリスト教が成立した。それと対比的にデカルトは霊魂をつきものとすることで、純粋な主観として確立し、それと対立させることで物質を非精神的な機械的存在として客観的な実在とすることができたわけで、これが近代的な主観・客観認識図式の成立です。

ただ霊魂を精神的実体として物質一般から区別する発想は、文化人類学的な検討も必要で、霊が体を抜け出すという発想はシャ

ーマニズムという伝統を生みました。パプア・ニューギニアなどでは死後霊は森に入って守護霊になるとされていますし、ポリネシアなどのマナ信仰もあります。

初めはこの脱け出す霊魂も肉体の一部として物質的に捉えられていたと思いますが、それがどういう契機で物質一般から峻別されて精神的実体になったのかが大問題です。新プラトン派のプロティノス（二〇五年？～二七〇年）に至って明確になったという議論があるようですね。

デカルトの心身二元論に対して、ホッブズ（一五八八年～一六七九年）とロック（一六三二年～一七〇四年）が違った観点から徹底的に批判していますね。時間がないので、この続きは大手門高校生にお願いします。」

六月四日土曜日午前零時である。

三輪智子が続けた。「トモぴょんです。ノリリンさんありがとうございます。私は先生にずいぶん救っていただいているのです。だからどうしても救いたいのです。いやもちろん私が救うまでもなく、無実は証明されるに決まっています。なぜなら、真犯人は倉吉さんを狙ったのではないので、新たな動きをするはずで、その時点で先生の無実は自動的に証明されるでしょう。でも代用監獄にいる先生を一日も早く出してあげたいと思います。

ホッブズは、実験と観察によって確かめられないものを根拠にしてはならないという経験論の立場ですから、霊魂の置き入れというデカルトの発想は全くダメと考えていました。霊魂を延長のない精神的実体として実験も観察もできないものにしてしまいますと、これは認識できないものになってしまいます。つまりデカルトの考えでは、主観である霊魂は認識する側であってされる側ではない、だからどのような仕組で認識するのかは問えないことになってしまいます。これでは科学的な認識論はできません。まったく宗教的にしか語れないわけです。

それではどうして人間だけが言語を自由に話せ、文明を切り開いたのか、音声のイマジネーションを他のイマジネーションの記号にしたからだと言います。この場合のイマジネーションは『薄れゆくメモリィ』という意味ですよ。つまり外界からの刺激は五官で捉えられメモリィという微粒子になりますが、それが次第に不鮮明になっていきます。でもやはり体内の中枢に残っていて動き回っています。それを参考にして身体は自己保存機能を働かせてきたということです。

やがて音声のイマジネーションが他のイマジネーションの記号になりますと、情報を音に変えてコミュニケーションができるようになり、言語が発生したというのです。ただしそれがどうしてできるようになったのか、分からなかったので、神がアダムにその方法を教えたとしていますが、これは経験論から外れていますから、ホッブズの真意ではなく、分からないということを婉曲に表現したのだと思います。

ですからホッブズによれば、霊魂は身体機械自身の自己保存のための調節機能だと捉えていたのです。だから身体と別に霊魂があるのではなく、霊魂は身体の機能であるということですね。」

「ではロックのことは僕が述べましょう。大手門高校の先生の現在の教え子のジョージです。

ロックは霊魂置き入れ説を真っ向から批判しました。特に霊魂が身体に置き入れられる前に、完全者である神の観念を神から与えられていたというデカルトの生得観念説を徹底批判したのです。

デカルトは、方法的懐疑で徹底的に疑いましたね、そういう疑っている存在は、不完全な存在だというのです。不完全だから自分の力だけでは存在できない、完全者である神に支えられて初めて存在できるのだというのです。だから不完全な考える我が、絶対確実に存在できるということは、それを完全者である神が支えているからだというのです。それで神が存在証明されたわけです。そして人間は不完全者だから不完全にしか考えられないから、完全者の観念を自ら作り出すことはできないとしたのです。それで完全者である神が、完全者である神の観念を作って人間に予め置き入れておいたという理屈です。

このデカルトの神は生得観念だという説で考えれば、人間は生まれつき誰でも神の生得観念を持っているはずなので、ロックは調査したのです。その結果東洋人だとか子供たちは神の観念は持っていないことが分かりました。だったら神の観念も教会などのお話やしつけを通して後天的に神の観念が植えつけられているのだとロックは主張したのです。これを『あらゆる観念は経験から、生まれつきは白紙』という言葉にまとめたのです。この言葉でイギリス経験論は確立したと言われます。」

**問　デカルトの「魂の置き入れ」説とその問題点について論じなさい。**

## 十一、スピノザの汎神論

**はてしなく宇宙続かばいずこにぞそを作りたる神のいますや**

四日土曜日零時35分だ、また社会人からだ。

「サトリンです。私は社会人ですが、スピノザ（一六三二年～一六七七年）が好きでスピノザ主義者を名乗っています。スピノザの主著は『エチカ（倫理学）』ですが、徹底した演繹論で、倫理学というより哲学的です。

スピノザによれば、デカルトは「われ思う」を原因にして、「ゆえにわれ有り」としましたが、「思うから有る」のではなく、「思う」というのは「ある」の一つの姿なのです。ですから無条件に「あるもの」つまり唯一存在である神のあり方の一つが精神的な「思う」というあり方と延長的な事物というあり方をしていることになります。これはおそらく古代ギリシアのエレア派の開祖パルメニデスの「あるものは一者である。」という結論を受けているのでしょう。その一者は完全ですから、完全者を神と考えていた当時の西欧の神観念から、神こそ唯一存在だということになったと思われます。

自然にしても精神にしても唯一存在の現れであるという意味で神の属性であるということになります。特に自然の生む働きは創造主としての神の属性ですから、神として捉えられます。これを能産的自然と呼びます。能産的自然によって生み出された自然は所産的自然です。しかしこれは固定しているわけではありませんね。生み出された自然が新たに自然を生むのですから、所産的自然が能産的自然になります。このように自然は連関し合って、自然を生むわけです。

スピノザは、宇宙の外に存在する超越的な人格神を認めません。精神と言っても自然のロゴス（論理）なのです。ですからそこには恣意が働かないので、すべては機械的な必然的連関だということになります。

トモぴょんさん、あなたは『永遠の相の下』にこの事件を捉えているので、榊先生が代用監獄で今一番酷い状態にあっても、全体の状況を見て、遠からず釈放になるという必然的連関をきちんと見据えておられる。

おそらく榊先生はＷＥＢを見ることは許されていないと思います。ＷＥＢを使った工作がなされるかもしれないので、警戒しているからです。もしＷＥＢを見られたら、あなたの言葉に勇気づけられると思います。きっといま榊先生は最大の試練の時を迎えておられるのですが、それはこの試練で、飛躍するためです。その意味で、この試練こそビッグ・チャンスなのです。

校長が電話がかかってきてお茶を飲ませんでした。これを全くの偶然のごとく言いますが、それも全くの偶然かどうか疑う必要があります。スピノザに言わせれば、電話した者はその時校長に電話をせざるを得ない何らかの用件があったから、電話したわけですね。その意味ではお茶を飲まなかった必然性に校長は救われたということです。

その用件というのが実は事件の謎を解く鍵かもしれません。つまり校長にお茶を飲ませないために電話した可能性だってありえないことはないのです。校長室に毒薬があったということは校長周辺の人が疑われるべきですね。そのあたりの情報が警察からは漏れてきません、当然教職員の全てにわたって、校長室周辺の指紋の調査などはしていると思いますが、きっと何かあるはずです。現場に戻れというのが捜査の常道です。

ともかく固定観念に囚われずに因果の範囲を広げていけば、全貌が見えてくるわけで、永遠の相の下にみるスピノザ主義に立てば、いいのです。

今度の事件は偶然イエス本を書いた著者が殺され、被疑者もイエス本の著者だということで、宗教が話題になっていますが、スピノザはそれまでの神観念を超越神論から汎神論にまさしく革命的に転換したわけで、改めてその偉大さが注目されるべきでしょう。スピノザのように神は唯一実在で、自然も精神も神の属性で

あるという汎神論に立てば、イエスのつきもの信仰による悪霊追放のパフォーマンスも、十字架の死も、復活騒ぎもなかったわけですね。

当時は、ジョルダーノ・ブルーノ（一五四八年～一六〇〇年）の無限宇宙論が衝撃を与えました。それでは超越神論で言えば神の居場所がないということになります。それでブルーノは次のように言っています。

「私に言わせれば、宇宙は全体の無限です。なぜならば宇宙には縁も終わりもありませんし、これを取り囲む表面もないからです。が宇宙は全的に無限なのではありません。宇宙から採り出すことのその各部分は有限なものであって、宇宙のなかに包まれている無数の諸世界もその一つ一つは有限のものですから。また神は全体の無限です。なぜなら神はいかなる制限も属性も帰されることを拒絶する一にして無限なるものだからです。そしてまた神は全的に無限なるものとも言われます。神は全世界にくまなく遍在し、そのそれぞれの部分のなかで無限かつ全的に存在しているからです。」『無限、宇宙および諸世界について』（岩波文庫）64頁。

「サトリン続き、このブルーノの神観念は、神は属性を持たないということは神は全てであるので、規定されないという意味で解釈できるでしょう。それですべての自然物も人間の心も神で満たされていながら、神はそういう有限者を超越した無限者だということです。だから神は自然や人間と絶対的に断絶していながら、同時にすべての自然や人間の中で存在しているということです。」

**問　スピノザの汎神論について論じなさい。**

## 十二、警察での面会

### 還暦を過ぎていまなお人頼みいつになったら頼られる人

警察の留置所は、拘置所に留置する代わりに取り調べやすい警察内に留置しておくもので俗に代用監獄と呼ばれている。留置期間は三日間ということになっているが、延長が可能で、最大二十三日間留置できる。しかも罪名を変えればそれでまた留置できるので、最初は、殺人罪では逮捕しないで毒物劇物取締法違反とかの別件で逮捕しておく、期間内に自供が得られなければ、殺人罪

に切り替えて、再逮捕すればいくらでも延長できるわけである。これでは無実の人も根負けして冤罪になりかねないと言われている。先進諸国の中ではこれほど被疑者の人権が無視されているのは例外的だ。

榊は官選弁護人をつけてもらい、妻との面会が一度だけ許された。「いやあびっくりしたよ。心配かけて申し訳ない。」と榊は妻千恵子に言った。「あなたしっかりしなさいよ。絶対に、怖がったり、へなへなした態度をとったら駄目よ。あなたは文章ではまともなこと言えても、尋問などされたら、元々が気が小さいのだから、すぐびびってしまうのじゃないの？弱味をみせたら付け込まれるからね、私の夫なのだから、警察で堂々としていたって、誇れるような態度を取ってね。」まるで説教されているようだった。

「そりゃあ堂々たるものさ、接見は時間制限あるから、関西哲学学校の仲間に、全く潔白だから心配しないように、大学の方に迷惑かけるけれど、首がつながるようによろしくお願いしておいてくれないか。それから梅原先生にも手紙を書いてご心配かけて申し訳ありませんと事情を簡単に書いておいてくれないか。ここでは書けないみたいだし、書いても読まれちゃうだろう。」

「そうね、もし殺人罪で裁判になってご支援をお願いしないといけないようになった場合、そういうつながりは社会的には威力を発揮するかもしれないしね。」

「まさか殺人事件の被告になるなんて想定外だな、これだけは。」

「まだ殺人罪では逮捕されてないのよ。ただマスコミの反応が全く犯人扱いのが多いのが気がかりね。あなたの友人の先生方に働きかけてみるわ、まだ早いかしら、蘭の家に居るからまだだれにも連絡つけてないのよ。」

「まあ、絶体絶命のピンチみたいなものだから、親戚も友人も頼れる人には頼るしかないだろう。」

「そうね、あなたはいつも頼ってばかりね、早く頼られるような人になって欲しい、もう還暦も過ぎてしまって未だに心配ばかりかけているんだから。」

「ごめん、ごめんしかし今度の場合は真犯人がいて、そいつのせいなんだから、あまり責めないで欲しいな。」と言って、小声で笑って見せた。

「ほんとに世渡りが下手なんだから、女房泣かせね、でも今度のは怖いけれど、すごくミステリーでしょう。ドキドキワクワクだわ。ついでにあなたのイエス本の中身をもっとマスコミで取り上げてくれればいいのに、トンデモ本みたいにしか書かないのよ、失礼ね、全く。」と明るく微笑んだ。

「落ち込んでなさそうで安心したよ。こちらはいくらでも頑張るから、長引いたら生活が大変になるので、そうならないように祈ってるよ。」

「本当ね、でもこれがきっかけにいいこともあるかもしれないと思って、前向きになってね。」とけなげに言ってくれた。

「そうだね、このまま年ばかり取って、忘れられるより、ここで疑いを晴らして、どんどん世間にアピールできるように頑張る

よ。」

官選弁護人とも面会して、本人があくまで無実を主張していること、ヒ素が自宅で発見されたというのは、真犯人か、榊を真犯人しようとしている者の工作としか考えられないこと、当日初めて講演があることを知ったのにどうして自宅にあったと警察が主張するヒ素を間に合わせることができたのかが説明がないこと。もし当日の講演を榊が前日までに知っていたとするなら、どうして知りえたのかの説明がないのはおかしい、だから全く不当逮捕にあたるので、即刻釈放すべきことを榊本人と弁護人森下仁志の連名で記者団に発表した。

**問　榊周次の妻との面会から窺がえる榊の境遇について説明しなさい。**

## 十三、キリスト教聖戦団声明文

### 主イエスの聖餐復活汚したる罪軽からず天罰下りぬ

事態に急変があったのは六日月曜日の朝刊だった。各新聞社にキリスト教聖戦団と名乗る謎の団体から声明文が届いたのである。

「倉吉良造は『すりかえられたキリスト』で主イエス・キリストの復活を弟ヤコブの偽装であると、キリスト教を冒涜したので、天罰を受けた。榊周次もパンとワインの聖餐という最後の晩餐の主イエスの指示をリハーサルと決め付け、あたかも主イエスの肉を食べ、血を飲んだかに主イエスおよびイエスの聖なる弟子たちを冒涜したので天罰をうけるべきである。―キリスト教聖戦団」という文面だった。活字の切り抜きを張り合わせた文面になっていた。

警察はキリスト教聖戦団なる組織は実在しない、おそらくいたずらか、榊の犯行でないと見せかけるための偽装工作であろうと声明した。差出が大阪駅の梅田郵便局になっているところから、榊の関係者の仕業の可能性が強いと考えているようだった。

新聞にはキリスト教関係者は宗教評論家などのコメントが集められていた。日本基督教団の幹部を兼ねている芳川晴海牧師は「キリスト教が聖戦を唱えることはしていません。おそらく個人のいたずらでしょう。あるいはキリスト教に打撃を与えるための策謀でしょう。イエス本については読者が良識で判断すべきで、イエスの復活をめぐって諸説を発表されることは言論の自由であり、我々はそれをいちいちキリスト教への攻撃と受け止めるようなことはしません。中身が良識を欠いたトンデモ本なら、それなりに

しか評価されないのは当然でしょう。」

カトリック教会の泊博則神父は「聖戦団なんてキリスト教徒じゃない証拠ですよ。キリスト教はテロとは無縁です。悪質ないたずらですな。良識を欠いたイエス本もあれば、まじめなイエス本もあり、日本はそんなことでテロが起きる国ではありません、それはみなさんご存知でしょう。」

日本聖公会の林田良賢牧師は「ともかくキリスト教徒の団体ではありません。神が罰を下されることがあっても、神の代わりに罰を下すことはありません。いたずらか、キリスト教に対するイメージ低下を狙った悪宣伝です。あるいは被疑者を庇ってやっているつもりかもしれません。もちろん弟ヤコブが身代わりなんてのは小説です。そういう設定は表現の自由です。でも真実はイエス様は復活されたということです。イエスが食べられた？お話になりません。」

聖書学者で、イエスは犬儒派の哲学者であり、悪霊追放も十字架刑も従って復活というのも神話にすぎないとする高橋清秀は、聖戦団がキリスト教原理主義の中に出現する可能性は韓国ではあるかもしれないが、日本にはないだろうとし、「倉吉も榊も福音書を信用して書いていて、まったく聖書学の成果を無視している、学問的には素人議論ですと切って捨てた。だいたいエジプトの神話を切り集めた福音書を精神分析しても、いい加減な結論しかでない、その見本です」と榊をあっさり否定した。

**問　倉吉のすり替えられたキリスト説、榊の聖餐による復活仮説に対してキリスト教徒の受け止め方はどうか論じなさい。**

## 十四、『闇の十字架』発刊さる

### 学舎に毒をもりにし人いずこクロスの光闇を照らせや

三輪智子は、『闇の十字架―大手門高校事件ニュース』という私製の新聞原稿をパソコンで作成した。

「事件は終わっていない」という見出しだ。榊先生の倉吉殺害動機は極めて希薄なうえ、毒薬の入手経路が全く不明、標的が倉吉の可能性が低いとすると、狙いは校長あるいは大手門高校自体

である。ならば今回の事件は失敗であり、事件は再発する可能性大であると指摘している。

「学校改革への不満が鬱積」という見出しがあり、民間出身校長による改革は、数字上は難関校への合格率二割アップなど目覚ましい成果をみせているが、成績不良で転校を迫られたり、教育内容に干渉されて不満を抱く教師も少なくないなどの実例をあげて、数字で業績を示そうとする安易な姿勢が問題の根にあるのではないかという指摘を加えていた。編集責任三輪智子と堂々と明記していたが、これでは個人的に学校側から圧力をかけられるということで、編集委員会の名前で刷ろうということになった。

古田一哉先生に相談したところ、これは危険な行為で、処分問題に発展するかもしれないと警告した。三輪は榊先生を見殺しにできない、どんな処分を受けてもいいと涙を溜めて覚悟を示した。それじゃあ、こっそり印刷してあげるよ、配布にあたっては、できるだけ極秘裏にするようにと指示した。それで百部ほどにして机の中に入れていき、何箇所かの廊下に七日火曜日の早朝に貼り出した。

学校中が『闇の十字架』の話題で持ちきりになった。一時限目の授業は自習になり、職員会議が開催された。校長は興奮した調子で言った。「このミニコミ誌は大変不穏当な内容で、あたかも学校改革に不満な教職員や生徒が事件を惹き起こし、再犯を計画しているかの印象を与えています。これは学校全体を不安に陥れ、教育を麻痺させるもので、断じて許せません。現在捜査中の殺人事件に高校生が巻き込まれ、事件に深入りしていくのはなんとしても阻止しなければなりません、これは教育者として生徒を守る義務でしょう。」

教頭が続いて発言した。「これは読み方次第で、犯行声明とも読め、事件を起こした真犯人が再犯を臭わせているとも読めますね。あるいは榊先生を庇っているのかもしれませんが、捜査に協力する必要から、このミニコミ誌の編集者を見つけ出す必要があります。早速全校集会を開きましょう。」

社会科の担当で労組の分会長もしている作山庄次が発言した。「私はこれを読んで、当たり前のことを書いているように読みましたね。確かにマスコミ報道は、榊先生を犯人扱いしていますが、彼が真犯人だなんて、彼を知る人はだれも思っていません。とすると、事件は終わっていないということですね。だから我々は十分警戒すべきです。こんなビラが出たぐらいで大騒ぎしますと、生徒に動揺が広がって、学校を混乱させようとしている犯人の思うつぼです。ここはひとつ冷静に対処すべきです。学校改革への反発については、行き過ぎがあったのなら改めることにして、転校させる指導はやめて、本校での親身の指導で成果をあげるようにするとか、打つ手はありますよ。」

古文の古谷先生が発言を求め、「作山先生のおっしゃることもわかりますが、臨時職員会議を開いてしまっていますから、生徒たちはもう動揺しているでしょう。全校集会を開いて落ち着かせるお話をすることも大切です。校長先生からだと大げさになるので、生活指導の先生にお話ししていただいたらいいのじゃないでしょうか。ここはひとつ穏便に願えませんか、いちいち策謀だなんだというのじゃなく、榊先生のことが心配なあまりの行動でしょうから、かえって混乱を煽ることになるので、ここは慎重にしよう、きっと無実は証明されるからというようなことで、説得していただけませんか？」

元々大部分の教職員は校長の性急な改革に反撥していただけに、古谷提案に賛成を表明する者が多く、校長も内心、次は自分が標的になるのではないかと心配していたので、古谷案をのみ、改革は断固として推進するけれど、不安を取り除くために転校勧奨などは当面控えようと発言した。ミニコミ誌への反応などは次号もでるようなら、また対応を考えようということになった。

二時限目全校集会が開かれ、生活指導部長の播磨浩二先生が、殺人事件に関わってミニコミ誌を出したり、ビラを配ったりするのは控えるように諭した。榊先生を心配する気持ちは尊いけれど、民間人は司直に任せている以上、捜査に異論を唱えたり、方向性を与えようとすべきではないというのだ。しかも学校改革への不満が原因のようにいうと、不満に感じている人たちが、刺激されて問題行動に出る可能性もあり、そうなったらどう責任をとるのかと言った。ことが殺人事件だけに、ミニコミ誌がでるとその編集者が事件に関わっていて、次の犯行を予告しているようにも警察に受け取られる可能性もあり、今回のミニコミ誌配布は、はっきり言って軽率だと忠告した。

ついでにＷＥＢを使って事件についてキャンペーンを張る動きもあるようだが、それも場合によっては事件を鎮めるのではなく、次の事件を惹き起こす原因ともなりかねないし、学校にも混乱を長引かせることにもつながるので、自粛するように求めた。

生徒たちは大人しく聞いていたが、生活指導部長が話し終わると、ざわつき始めた。「事件は終わってないぞ、犠牲者が出たらだれが責任を取るんだ！」二年生の山下透が突然叫んだ。

生活指導部長は慌てて「だから事件を拡大させないためにも刺激しないようにと言っているんだ。」

「だったら無実の榊先生を逮捕させといて、犯人を放置していれば次の犯罪が惹き起こされるのじゃないですか？校長先生が殺されたらどうするのですか？また誰か別の人がとばっちりを受けるかもしれないし。」山下はさらに追及した。

「だから捜査は司直まかせているのだから、警察を信じるのが市民の義務なんだ。一般市民が勝手に捜査に口出ししたり、混乱させたりすると治安が保てなくなる。特に榊先生とつながりのある諸君は心配で何とかしたいという気持ちはわかるが、ここは警察を信じて待つというのが国民の義務なんだ。」播磨先生は説得した。

上村陽一は我慢しきれなくなって発言した。「そりゃあ警察がきちんと捜査して、真犯人を捕まえてくれれば文句はないのです。榊先生のようなあんなにやさしくて温厚な人を捕まえて、犯人に仕立てあげられようとしているのですよ。警察や国家が我々の人権を守ってくれないのだったら、自分たちには自己保存権があるのだから、自分たちを守らなくてはならないわけです。確かにできることは小さいかもしれないけれど、榊先生を有罪にされたり、また誰かを殺されたりしてからでは間に合いません。」

橋田譲治が宣言した。「今や大手門高校が崩れつつあるのです。これは日本の教育全体が崩壊しつつあることの現れかもしれません。大人しく手を拱いていたら、取り返しがつかなくなる。その責任は、先生たちにも、そして我々生徒にもあるはずです。」

生徒たちの中から拍手が起こった。と言っても万雷の拍手ではなく、十名程度だったか、生徒たちもどう行動してよいか、大人しくした方がいいのか戸惑っているようだった。

七日火曜日の午後七時のニュースで、住吉区の坂本病院という大きい目の病院からヒ素が紛失していたことが露見した。榊周次が糖尿病や皮膚の湿疹の治療などに通院していた病院であるということで、事件と関係があるのではという報道がなされたのである。それでなかなか自供しなかった榊周次の自供も時間の問題のような解説がなされていた、

すでにキリスト教聖戦団というのはいたずらだろうということで、報道も影を潜め、ＷＥＢや校内での『闇の十字架』というミニコミもマスコミからはシカトされてしまっていた。二チャンネルの書き込みも榊冤罪の可能性を指摘し、次の犯行を危惧する声が十名ほどから書き込みがあるものの、内容的には重複していた。

**問　三輪智子の『闇の十字架』とその学校での反応について要約しなさい。**

## 十五、ホッブズの社会契約論

**国家なるリヴァイアサンは人なりや人がつくりしロボならざるや**

上村陽一は、「哲学で謎を解く」のトピックを根気よく続けようと考えた。午後十時である。

「ヨウヨウです。坂本病院でのヒ素紛失報告が事件と関連しているかに報道されていますが、それを榊先生が盗んだとか、だれかが榊先生に横流ししたとかが事実として確認されたわけではありません。どの時期になくなったかも明確になっていないのです。まだひょっとしたらという推測段階なのです。

さて事件と関連させて哲学史を論じるというのは、相当哲学の実力が必要なのでしょうか？簡単ではありませんね。今日は社会契約論に入りましょう。

社会契約論は近代市民社会の形成期に作られた社会理論です。植民地の富を本国にもたらすためには、世界を駆け巡る巨大な海軍力が必要で、絶対専制の近代主権国家が一六世紀から形成されていきます。それで重税や圧政で苦しめられた市民たちは、国家はそもそも近代市民社会の諸個人が自らの生きていく権利つまり生存権を守るために作ったものであるから、その国家によって生存権などの人権が蹂躙されるようなら、市民たちが社会契約をやり直して、新しい国家を作ってもよいはずだという考え方で専制国家に対抗したわけです。

社会契約といっても、社会は国家権力を意味していて、社会を作る契約というより、共同の権力をつくろうという契約なのです。その場合、あくまで個人が社会や国家に先立っているわけですね。個人が自分たちの生きていく権利、これを自己保存権と言いますが、自己保存権を中心にさまざまな人権を、個人の力では守りきれないので、国家権力に守ってもらうという契約です。その代り国家権力の支配には従うということです。

その際、諸個人は自分たちの権利を国家権力に託すわけです。ですから、国家権力ができてしまいますと、国家権力の意志である法には従わなければなりません。問題は人権を守ってもらうために作った国家の権力が、強大になりすぎて、個人の権利が侵害されることになったらどうするのかということですね。国家によって治安維持してもらって命を守られていても、重税で死ぬほど収奪されたらなんにもならないわけです。

今度の事件でも、警察に犯人を捕まえてもらいたいのだけれど、善良な榊先生を捕まえて、真犯人は野放しで、いつ次の犯罪を起すかわからない。我々の自己保存権はピンチになっているのです。それでこのコミュニティをつくりました。ミニコミ誌も別の人が出したのですが、警察に任せて市民は司法活動をしない方がいいのだと学校から圧力がかかっているのです。社会契約説の趣旨から考えて、市民は共同権力を作ったら、自分たちの身を守る活動から身を引いて司法権力にまかせたほうがいいのでしょうか？」

午後10時40分

早速ノリリンから反応があった。「それは社会契約説の趣旨とは関係ないと思いますね。一応国家権力が有効に機能するために、国民の司法活動にも制約が設けられることがあります。例えば裁判所が許可した逮捕令状なしでは現行犯を除いて逮捕できないか、裁判所の許可した捜索令状なしでは家宅捜査できないわけです。でも現行犯はだれでも逮捕できますし、危害に遭いそうな場合は正当防衛権を行使できます。犯人捜しをすることは、警察でなくても市民もしてもよいわけで、報道機関や私立探偵や被害者の家族、友人などもしています。むしろそういうことは生命財産、自由を守る基本的人権に含まれています。

ご承知のように個人の力ではとても時間もお金もかかってできないので、警察がやってくれているわけですね。警察がやるから民間人はしてはいけないなんてことは全くありません。警察の捜査を著しく妨害するような形での捜査活動を規制するには警察官職務執行法などで具体的に法律を定めて規制すべきで、法律で禁じられていないことを、第三者がやめさせようとするのは人権侵害です。」

午後11時ちょうど

「トモぴょんです。ノリリンさん、とっても分かり易いご説明で納得がいきました。榊先生の無実を訴え、事件が続く危険性を訴えれば、それが犯人を刺激して次の犯行を招くということを生活指導の先生が危惧されていまして、忠告していただいたのですが、そのご心配はもっともだとしても、このまま手をこまねいているのが、国家に司法権力を任せた市民の義務というような論法は確かに納得できないものでした。

犯人は私たちが刺激すれば犯行を行い、しなければ犯行を思いとどまるわけでもありません。そして私たちの啓発活動が、犯人の犯行の責任を負うべきものでもないことは明らかですよね。今は一日も早く榊先生の冤罪を証明し、真犯人を追い詰めるべき時

で、榊先生から大きな学恩を受けていながら、先生が不当な縄目を受けているのにそれを傍観しているというのは、とても道徳的にも外れているのではないでしょうか？

それはさておき、社会契約論のホッブズ、ロック、ルソーで随分違っていて、榊先生はこの区別がしっかりつけられることが理論家として最低限の資格みたいに言っておられました。一流の学者のように思われている人でもとんでもない誤解をしているということですが、どなたか、ご説明お願いします。」

午後11時20分

「ノムノムです。私は北津高校で榊先生に倫理と世界史を教わりました。榊先生の講義は、懐が深くて本当にいろんな勉強になり、政治のこと経済のこと、生き方のこと考えるヒントとコツを教えていただいたと思います。

私は現在大学を出まして法律事務所に勤め、司法試験の勉強をしていますが、ホッブズ、ロック、ルソーの区別は懐かしいので挑戦したいと思います。間違っていたら直してください。

共通点は、社会つまり国家以前に独立した諸個人がいたということ、自然権を守るために共通権力を樹立したということです。そして社会契約によって社会状態に入ったとし、それ以前を自然状態と呼ぶことも共通しています。

ホッブズは人間を欲望を充足することによって動く機械つまり欲望機械として捉えていましたから、理性は欲望機械の自己調節機能にすぎないわけです。自然状態では、富はみんなの欲望を満たせるほどはないので、どうしても足らない富を奪い合う「万人の万人に対する戦争状態」になってしまっていたといいます。

それでは共倒れですから、社会契約で、共同の権力つまりコモンウェルスを作ったのです。ホッブズによればその方法は覇権や征服による場合と話し合いによる場合がありますが、出来上がってしまえば同じことだというのです。

ではロックは自然状態の人間をどう見ていたでしょうか？

ロックは自然状態の人間も理性的に捉えていました。ホッブズでは人間は欲望を充足させて働く欲望機械であって、理性は欲望機械の自動調節作用でしかないのです。ですから理性は欲望の原理の枠内でしか働かないので、欲望が十分に抑制できません。それで万人に対する万人の戦争状態になるので、戦争をやめさせることができるだけの強大な権力を国家は持たなくてはならないというわけでした。しかしあまりに強大な権力を国家が持ちますと、個人の人権は保障されなくなり、なんのために社会契約を結ぶか分からなくなります。

それでロックは自然状態でも人間たちは理性的だったので互いの人格と自己労働による財産を互いに尊重しあい、平和に暮らしていたと考えたのです。それで社会契約によって生まれる国家権力もそれほど強大なものでなくても済むということです。

残念ですが、仕事の関係で、ここまでにします。どなたか後を引き継いでください。」

もう真夜中八日水曜日午前零時である。受験勉強は事件発生以来進んでいない。やっとこのところ気持ちが落ち着いてきて、受験勉強にも気が入りかけていただけに、突然の殺人事件に榊先生

の逮捕という悪夢のような有様である。春休みに「上村陽一は十七歳で死ぬ」という天の声を聴いて、死の恐怖にさいなまれていたが、三輪智子と心の友を確認して以来、死の恐怖は消えないものの、一日一日に充実を感じて心が平穏になり、後数か月の命でも、勉強できるということも幸せなことに思えてきた。

ほかならぬ榊先生のことだから、受験勉強を犠牲にしてでも頑張ろうと思うが、何も考えずに受験に打ち込める高校生をうらやましいと思う気持ちもあり、そんな感情を不純だと自己嫌悪に陥った。

「ヨウヨウが続けます。ルソーの自然状態は棚に上げときますね。ホッブズは強大な権力を生むための社会契約を考えていたので、その強大な権力が人民を虐げて、人民の自己保存権も危うくなれば、人民は、主権者の首を挿げ替えて、社会契約をし直してもいいと考えていたでしょうか？ではないですね。

ホッブズはそのような社会契約論を批判するために、社会契約論の土俵に入って、社会契約論の立場にたてば、かえって人民の革命権は否定されるとしたのです。

だからホッブズが社会契約論の代表者みたいな捉え方は、榊先生に言わせれば間違っているのです。ホッブズ以前に、独立した諸個人が社会契約を結んで国家を作ったのだから、国家が諸個人の人権を耐えがたく抑圧するようになれば、社会契約が破棄されたと考えて、国家をひっくり返して、社会契約を結び直してよいという考え方があったというわけです。

ホッブズも社会契約説に乗る以上、近代市民社会が発達してきて、諸個人の自由な経済活動が近代社会の富の源泉だと捉える近代的な人間観、社会観にたっています。しかし近代的であるということが、必ずしも個人の自由を重んじ、専制を退けるとは限りません。十六世紀、十七世紀は近代主権国家が確立していく時期であり、それは強力な中央集権的な専制権力が台頭する時期でもあったのです。

それは国王を中心にした専制権力を発展させ、強力な海軍力を背景に植民地支配を拡大し、世界の富を本国に集め、工業製品などを世界に売りさばこうとしたわけです。これを国家権力が専制的に行いますと、重税で苦しめられたり、農民が土地から追放されたりしたので、人民の反発を招いたので、その動きを抑えようとして余計に専制的になっていったのです。

ホッブズは強力な国家でないと、他国に侵略されかねないし、人民から租税で強力な軍隊を形成することもできないと考えたわけです。それでせっかく強大な国家権力を作ろうとしても、社会契約説で、人民の権利を守るためには革命してもよいという論理でひっくり返されたらたまらないので、既成の社会契約論を打ち破ろうとしたのです。

それで国家は活きた人工機械人間であり、地上最強の怪獣リヴァイアサンであるとしたのです。これを比喩的に解釈する学者が多いようですが、榊先生はホッブズの「国家=人工機械人間」を画期的な人間論として評価されています。榊先生のネオヒューマニズムの中に組織体も人間だという人間観があるのですが、その先駆だというのです。

国家が生きた人工機械人間だとしますと、国家は人民が自己の

自然権を守るために便宜的に作られただけの存在ではなくなり、それ自体、国家意志を持ち、価値観を持ち、感情を持って、自己保存しようとする人格的存在であり、利害や人権の主体でもあるわけです。ですから、人民は自分の都合だけで国家を扱っていいのではなく、国家と人格的に関係し、付き合っていかなければならないことになります。この論理は国家だけでなく、もっと小さな組織体、自治体や企業、学校や教会、組合、政党などにも通用することになります。

これまでは人権が個人単位にしか語られていなかったのが、組織体も人格主体とすることで、人間関係がかなり豊かで具体的に語れることになります。ただ個人の人権は、組織体に比べ弱小なだけに、組織体を人間として認知してしまうと、個人の人権感覚が希薄にならないか心配ですね。

実際ホッブズが国家を人間として認めることで、個人の人格だけを目的とする既成の社会契約論を批判して、国家に対する革命権を否認する論理に使っています。つまり、国家の主権者である首の挿げ替えは、国家の死であり、それは「万人の万人に対する戦争状態」への逆戻りで、人類の共倒れだということです。つまり国家も人間なのだから首を挿げ替えたら死んでしまうという脅かしです。

実際は国家の場合は、首を挿げ替えることでリフレッシュして発展する場合もありますからそうは断定できないのですが、国家人間論で短絡的にそう語っているのです。

それからホッブズの議論を民主主義の発展史の中で高く評価する傾向に対して、榊先生は猛反発されています。特に『国家意志の本人は人民だ』という表現を人民主権の先駆と解釈するのはとんでもない誤解だそうです。ホッブズは、次のように考えます。人体の比喩で、人体の場合に頭が意志を決定する際、手足や内臓の調子を参考にすることはあっても、それらに決定権を認めてしまえば、統一した身体の意志ができず、人間として生きていけません。それと同様に国家でも主権者があくまで意志決定すべきで、人民は頭の決定を手足が自己の意志として働くように、主権者の意志を自己の意志とみなして行動しなければならないとしたのです。

この発想は国家意志の永久代理契約として社会契約説を捉えていることからはっきりしています。つまり人民は国家意志の決定権を主権者に永久に代理してもらう契約を結んでいるというのです。ですから主権者の決定に異議申し立ての権利は原理的にないということですね。ですから専制権力の論理で、民主主義とは真っ向から対立しているのです。

ただホッブズは主権者の数で国家の類別をします。一人なら王政、少数なら貴族政、多数なら民主制で、どれを選ぶかは民族によって異なるとし、無条件に絶対王政が一番いいと決め付けているわけではありません。ただイギリスやフランスのような大国は、民主政よりも王政の方が合っていると考え、古代ギリシアのポリスのまねをして民主政を選んでもうまくいかないとしています。

もう息切れがしてきましたから、ロックは譲ります。一眠りします。」

**問　ホッブズの社会契約論の特色を論じなさい。**

績不良者に対する転校勧告を控えることが職員会議で決まったという書き込みがあったので、この三月末に無理やり転校させられた生徒の父兄が復学を要求したのである。そして受験ノイローゼで昨年秋自殺した生徒の父兄が、校長の強引な非人道的改革によって、中学生の時は天童と呼ばれた息子が劣等感の塊になり、死に追いやれたとしてその謝罪文を書き、補償するよう求めたのである。

当然毒殺事件直後一週間以内であるから、警備も厳重なはずだが、校門の前に登校時間が終わり校門の閉まる直前に車で乗り付け灯油缶を軽量の手押し車に乗せ、一気に駆け込んでいったのだ。警備員はあっけにとられて見ていた。

それがまさに電光石火だった。五人の中高年が黒ヘルを被り、応援団のような学ラン風のいでたちで、幟に『革命は電撃的に到来する』と書いて駆け込んだ。そして　校長室に校長を椅子に縛り付けて監禁した。密室状態になった校長室に運んできた灯油缶の灯油をまき、要求が容れられないか、警官隊が突入しそうになったら点火すると脅かした。

校長室から校内放送にマイクを接続させて、自称「アナキスト革命団」のリーダー三好六郎がしゃべり始めた。

「大手門高校生諸君、並びに教職員のみなさん。革命は電撃的にやってきます。

諸君が目先の利益、自己一身の立身出世や蓄財のための勉強にばかりに心を奪われ、世界の危機や日本の現実から目をそらしている間に、ほらこの学校の中でさえ、校長室で毒殺事件が起きたじゃありませんか。そして今日は校長室が占拠されています。や

## 十六、アナキスト革命団の決起

### 逃げ惑へ安逸むさぼる虫けらよ電撃的に革命の来る

六月８日水曜日の昼休みに事件が勃発した。どうも数名の男が校長を校長室に監禁したらしい。７日の二チャンネルに学校が成

がてこの校舎が炎上するかもしれません。あるいは爆弾が破裂しないともかぎりません。

革命は思いもしないところから、電撃的にやってきて、あなた方の日常を粉々に打ち砕くのです。」

この「革命は電撃的にやってくる」というフレーズは、平田慎二という元アナキストの革命評論家が最近頻りに使っている用語である。彼は既に左翼には革命を惹き起こすエネルギーがなくなったとみているのか、最近は第二次世界大戦を枢軸側に立って見直し、大東亜戦争を反米帝国主義の解放戦争と位置づけで、大東亜戦争を継続すべきだと言い出した。つまりウルトラ右翼に革命を惹き起こさせようとしているのである。

平田の思想は、徹底的な平和主義者で、憲法第九条を宗教的に信奉している榊とは対極的なのだが、物事を根本から考え直し、意表をつくような新しい発想を打ち出してくるところが共通性がある。彼は榊より五歳年下だが、東京での活動に見切りをつけ、大阪に戻って、母親と一緒に家の資産のアパートを管理して暮らしていた。

彼は浪人中に破天荒な革命評論で新左翼の論壇に波瀾を起こした。それで革命評論家になったので大学に行ってなかったのである。大阪に戻ってから、落ち着いたし、時間もできたので、45歳過ぎから大学生活を経験してやろうと同立館大学Ⅱ部に入学したのである。それで十年ほど前に榊の同立館大学Ⅱ部の講義をとっていたのである。どうも「アナキスト革命団」は平田の思想的影響があるらしいのである。

ところで平田の住んでいるアパートというのは榊の自宅がある五軒長屋からは徒歩で二十分程しか離れていない。榊は五年ほど前まで自宅で開いていた月一回の現代哲学研究会に平田を誘った。同立館大学の大学院の研究仲間だった四人が中心にそれぞれの知人を誘って開いていた、多い時で二十名程、少ない時は五人から六人といったところであった。

その研究会は二十数年続いたが、この四、五年は休会状態である。そのつながりがあって、平田とはミクシィでマイミクになっていた。平田はＷＥＢで極左と極右をまたにかけたような言論で話題をふりまき、共感者もいるようで、平田つながりで、平田の共感者が榊のマイミクにもなっていた、榊は自分の管理しているコミュニティに入っていれば、すべてマイミク承認することにしていたので、榊のマイミクの中に「アナキスト革命団」のメンバーがいてもおかしくないのである。

「虚飾や見栄、己一身の保身に身をやつしている人たちは突然の災難がわが身を襲うのに驚愕して逃げ惑うしかありません。私は『日本アナキスト革命団』の三好六郎です。我々は四十年間大人しくしてきましたが、もはや我慢できません。権力の横暴に正義の鉄槌を下し、教育の腐敗を正して、諸君を正しい学問の道に立ち返らせるために、我々の命を賭して起ちあがる決断を下したのです。

そのきっかけは昨日の朝の臨時職員会議にあります。ご存知と思いますが、成績不良の烙印を押された生徒たち十数名が、自主転校及び自主退学に追い込まれています。その他に隠蔽されてきましたが、校長主導の学校改革に伴うストレスで自信を喪失し、自殺した犠牲者もいるのです。ところが今回の毒殺事件の真の原

因がそこにあり、校長が真の標的ではないかという可能性をミニコミ誌『闇の十字架』で指摘されたことが議論になり、なんと怖気づいた校長は、転校勧奨を自粛すると言い出したのです。

校長先生、自らの信念で行ってきたことではなかったのでしょうか、それなら己の生命をかけてやり抜くべきでしょう、そんないい加減なことなら、今まで無理に転校させられて、精神的に追い詰められて苦しんでいる生徒たちの復学も認めてください。

校長先生はこの改革で難関校合格が二割アップしたと狂喜されたそうですが、その陰で何人の生徒が自信を失くし、学問が嫌になり、落ちこぼれさせられたか、彼らはみんな中学生の時は神童のごとく思われていたはずではなかったのでしょうか。

イリイチというアメリカの社会学者がいみじくもこう喝破しています。諸君もその例に漏れないのではないでしょうか。いわく『歯を磨いたら虫歯になる。病院に行ったら病気になる。学校に通ったら馬鹿になる。』実際大手門高校の生徒のみなさんの中には中学校でトップクラスでなかった生徒はいませんね。それが大手門高校では三十点未満の欠点の生徒がざらにいるのです。彼らはそのあまりの落差に打ちのめされ、やる気をなくしたのではないでしょうか。難関校合格率を高めようと焦る学校の見栄のために、無理に難問をテストにだし、基本を疎かにしたせいではないのですか。

いかなる秀才も基本から標準さらに発展というプロセスを踏まえてこそ育つのであって、そのプロセスを無視した教育は才能を破壊するのです。もちろん諸君は元々聡いので、それぐらいの常識はもっていて、大手門高校の教育の欠陥は見抜いていて、内心は怒っていたのではないでしょうか？

その怒りを結集して戦えなかったのは、浅ましい諸君の根性にあるのではないですか？諸君はこの才能をダメにする教育の中でサバイバルすることで、エリートの栄冠が勝ち取れると勘違いして、それで団結することができなかったのではないでしょうか？つまり仲間の才能が腐っていくのを己のチャンスと勘違いしていたのです。自分たちの醜い姿を鏡に映してようく見てください。

諸君は本来地球の危機、日本の危機に団結して立ち向かい、共に未来を担うべき青年ではないのですか？諸君がそんなにバラバラで、互いの脚を引っ張り合ってどうするのですか。そんなことでじり貧になりつつある日本を救えるのですか？命の星地球の危機に立ち向かえるのですか？未来は青年のものであり、未来に君たちは責任をもたなければなりません。心を合わせ、知恵を合わせ、力を合わせて諸君たちをダメにしているこの受験体制に立ち向かう勇気を見せてください。

なぜ我々、半世紀前の全共闘の亡霊が再び起ち上がったか分かりますか？それは諸君の代わりに死ぬためです。これから諸君が生ける屍になって、真の愛も友情も団結も知らずに年老いていくのは耐えられません。そして自らの才能を自然の再生と人類の未来のために捧げる喜びを知らず、地位や見栄や保身に身をやつし、みじめな人生を送ることがないようにするためなのです。

我々は若い頃、団塊の世代と呼ばれ、矛盾のしわ寄せを受けてきました。一九六〇年代末にはこの腐った社会や学校を解体しようとして起ち上がったのですが、挫折し、ぼろぼろになって社会の底辺を這いつくばってきました。そして何とか小さな自分たち

の企業を立ち上げて這い上がろうとしたのですが、今度はバブルがはじけてまたどん底まで突き落とされたのです。そうした中で心も荒れ、家庭も崩壊しました。私は妻子を捨てて、なんとか自分の生きる道を探ってきたのです。元女房はなんとか女手ひとつで息子を一人前にしようと何人分も働いたようです。

その息子は負けん気が強くて、スポーツでも勉強でも頭角を現しました。見事に一番校に合格して母親はどんなに頼もしいと思ったことでしょう？ところが高校ではスポーツと勉強は両立しません。また授業は不親切で、何が根本か原理をきっちり教え込んでくれないのです。それでいて試験は難問ばかり多いので、三十点未満の欠点をとってしまったのです。

この屈辱が相当堪えたのでしょう。すっかり自信を失くし、勉強が重荷になってしまったのです。その上民間の銀行員上がりの校長になって、補講で改善がみられなかったら転校だと脅かされました。息子はいじけてしまって、補講も気が乗らなかったようで、やむなく転校したのですが、プライドが高すぎたのか転校先になじめず、学校にいかなくなってしまったのです。

それがなんと毒殺事件で怖気づいた校長は転校勧奨を控えるのだという、それならうちの息子の転校も取り消してくださいというのも当然でしょう。元々優秀だった生徒たちをデキナイ子にして切り捨てて、難関校の合格率を上げるのを立派な教育だとおっしゃるのなら、毒薬ぐらいに怖がるなといいたいのです。自分が殺されるのがそれほど怖いのなら、どうして生徒を切り捨てる教育方針をたてたのですか？そのために生徒たちは人生を狂わされ、人格も崩壊し、自殺者まで出しているじゃないですか、己が平気で人殺しをしておきながら、殺されるのが嫌だとはよく言えたものですね。

今からでは遅いけれど、転校させた生徒たちを復学させて、遅れを取り戻す体制を作ってください。それができないというのなら、一緒に死んでもらいます。私は、ダメな父親でこれまで息子のために何一つしてやれなかったふがいない父親です。せめてもの罪滅ぼしに、息子が生きるために父親が死ぬことだってできるのだということを示してやりたいのです。」

これは名演説である。さぞかし生徒たちの胸に響いただろうと思うが、なかなかそうはいかない。校長室から校内放送が始まったが、「革命は電撃的に到来する」という言葉で、校長室での激変を知らず、何かの間違いだと思った放送担当の教師がちょうど放送室で用事をしていて、放送室から音源を切ったのである。そして事件以来頻繁に学校に来ていた刑事が、指示して生徒たちの安全のためにただちに音を立てずに下校させるように、教師に手分けして連絡させた。その際事件の内容は伏せておくようにいったのである。また生徒たちにも捜査と安全に関わるので口外してはならないと連絡させた。

校長室をジャックした革命団は、封鎖した室内にいたので、音を立てずに下校した生徒たちには気づかなかったのだ。次に自殺した生徒の父親がマイクを握ろうとした時には、かけつけた警察官の突入態勢が出来ていた。元々事件直後だけに学校周辺には警官がたくさんいて、十五名ほどが喚声をあげて突入してきたのである。その喚声に圧倒され、為すすべもなく、ジュラルミンの盾や棍棒で散々叩かれ五人とも血まみれになって倒れてしまったのである。

早速警察と校長は示し合せ、マスコミ各社にこの校長室占拠事件の報道を自粛するよう連名で申し入れた。学校内に混乱を招き、次の不測の事態を引き起こしかねず、生徒たちの生命の安全と人権に配慮して、自粛願いたいという内容であった。マスコミ各社には「アナキスト革命団」の名で「闘争宣言」のメールが届いていて、その内容がセンセーションを惹き起こすと思われたので、報道したい気持ちも強かったのだが、ことが高校生たちの命の安全にもかかわるかもしれないということで、この自粛申し入れを受け入れたのである。

革命団の突入は校門から校長室まで一分もかかっておらず、放送で「革命は電撃的にやってくる」という言葉もざわついていてはっきり聞こえたのは全校生徒の三分の一程度だった。しかもとたんに途切れて下校命令である。

学校を追い出された生徒たちは小声で、何があったのか、「革命は電撃的にやってくる」というので何が起こったか語り合っていた。「ひょっとして校長先生が殺されたのかも?」と不吉な推理をする者も少なからずいた。陽一たちは生徒集会を大阪城公園で開こうという声も出たが、事態の推移も確かめずに軽率に動くのは危険だということで、十名程度で大阪城公園のベンチを取り囲んで相談した。

携帯からＷＥＢ情報も確かめたが、まだ二チャンネルやミクシィにそのことの書き込みはなかった。ともかく正確な情報が欲しい、明日の朝学校側から説明がなければ生徒会から申し入れて、事態の説明を要求しようということになった。二チャンネルやミクシィに書き込みがあるかもしれないので注意しようと申し合わせた。生徒たちは榊先生が捕まっている最中に何か重大事件が起こったので、これで当然榊先生の無実ははっきりし、すぐにでも釈放になるだろうと思ったのである。しかしそんなことよりも何かとんでもない事態が起こってしまったらしいと感じ、不安な思いで一杯だったのである。

**問　アナキスト革命団の代表三好六郎の演説から彼らの主張を要約しなさい。**

## 十七、ロックの社会契約説と革命理論

### 革命に起ち上がるのもむべなりや人が建てたる国にあらずや

六月8日水曜日夕刊にも夜のニュースにも一切大手門高校が何者かに襲われて、臨時休校になったという報道がなかった。学校から出ていた箝口令（かんこうれい）で生徒たちの口は塞げるものではない。生徒たちが、「校内放送で『革命は電撃的にやってくる』という声がしたと思ったら、放送がすぐに途切れ、すぐに音を立てずに帰宅せよと連絡があり、箝口令まで言い渡された。」という書き込みをしたので、それに対して、市民から「ひどい報道管制だ、それが事実なら当然一面トップの記事のはずだ、国民に真実を知らせないのはファッショ的だ。北朝鮮や中国でもあるまいし、あまりにもひどすぎる。」という趣旨の書き込みが続いた。

午後9時である。「警察や学校が混乱を恐れて報道の自粛を要請したのだろうが、アナクロニズム（時代錯誤）もはなはだしい。すでに〈誰でもメディア〉というWEB文化の時代なのだから、隠し通すことはできないので、問題が起きればすぐに国民に知れ渡ってしまう。警察や学校内部からでも情報は洩れるということだ。隠すよりありのままを公開して、国民みんなで一緒に問題について考え、解決していくようにするしかないのである。」という良識的な書き込みがあった。もちろんマスコミ各社や警察に抗議電話が鳴り響いたのである。

「哲学史で謎を解く」というトピックには続きの書き込みがある。これをやらないと哲学のテキストにならないのだ。

やはり午後9時だ。「はじめまして、ワンネスです。大手門高校のみなさん、大変な事態ですね、これで榊先生の無実の罪は晴れるとしても、校長先生の安否が気遣われます。無事でおられることを祈るばかりです。『革命は電撃的にやってくる』というフレーズは、平田慎二という元アナキストの革命評論家が最近WEBでさかんに使っている言葉でして、その影響を受けた元全共闘のノンセクトラジカルか、アナキストの亡霊みたいな人たちが決起した可能性がありますね。　おそらく明日早朝にでも校長先生の記者会見があり、説明があると思います。もっとも彼が無事だとしたらですが。

でも高校に入って来ていきなり『革命』なんて言われたらショックですね。ちょうど社会契約論のところで、ロックとルソーですから、革命権について考えるのに好都合です。

ホッブズは王党派でして、一六四二～一六四九年ピューリタン革命が起こり、パリに亡命し、皇太子の数学の家庭教師をしていたわけです。だから革命には原則的に反対なのです。それに対してロックは、一六六九年の名誉革命の指導者の一人だったのです。だから革命の正当性を彼の社会契約説で説いています。

ロックは、『統治論二論』（一六八九年）で国家を利害調節の道具として捉えているわけです。ホッブズのように生きた人工機械人間だとしているのではありません。あくまで、利害調節のための道具なので、その道具が人権を損なって、人民が国家によって生きていけないようになれば、その道具を取り換えるのは当然だということになります。

つまりホッブズでは人民が自分たちの自然権を主権者に預けて、国家意志の決定権を永久に代理する契約を結んだということです

が、ロックは財産や人格を尊重してもらえる秩序を保ってくれる権力をみんなで樹立したわけで、統治者に権利を信託したわけですが、それはあくまで利害を調整し、治安を維持する権限を信託しただけでして、圧政を行って、人民の自由を著しく損なう権利まで預けた覚えはないのです。そこで人民は、圧政が受忍の限度を超えますと、留保していた革命権を行使してもよいということになります。

もちろん統治には軍隊警察をはじめとする行政機構が必要で、それを維持するには莫大な費用が必要です。それは税金でまかないますから、国民にすれば、それがどの程度が適当なのか判断に苦しみます。ただ言えることは、しょっちゅう革命を起こしていたのでは、かえって経済もなにも混乱しますので、最大限辛抱のぎりぎりまで辛抱すべきだということになります。辛抱しきれなくなったら革命に決起してもいいということですね。

ここで誤解を解いておく必要があります。何も革命で混乱を起こさなくても、選挙で野党に投票して、政権を交代させればいいのじゃないかという考えもできますね。なぜ議会制度があるのに革命権を認めるのかということです。当時は制限選挙でして、有権者は貴族・僧侶・高額納税者に限られていたわけです。ですから一般の下層人民は主権者ではなかったのです。そして統治権者や議会の議員を選ぶ権利がなかったわけで、主権者の決定する法に一方的に従わされていたのです。それで暴力的な革命に起ち上がる権利を人民にロックは認めたということです。

それなら暴力革命が起こるので、選挙権を認めたらいいのではないか、人間である限り平等の自然権を認めるのならと思いますね。ところがロックはその点保守的でした。当時は普通選挙権を要求する人民の運動が盛り上がっていたのです。でもロックに言わせれば時期尚早ですね。だからロックの立場は議会貴族政（パーラメンタリアリストクラシィ）だったのであり、代議制民主主義者ではないということです。

人民はまだまだ文字が読めない者も多く、財産や教養がないので、政治的に冷静な判断ができないと思われたのです。財産や教養がある人々が選挙権を持ち、政治をおこなう名望家政治がいいという立場ですね。これは古代ギリシアのアリストテレスと同じ考えです。

それでは現代の日本は国民主権の憲法の下で普通選挙の民主主義国家ですから、もちろん暴力革命は認められません。国民が選挙で選んだ政権は、選挙でひっくりかえせばいいので、暴力で転覆させるなんてそれは不法です。

では何故、いまだに暴力革命を唱える人々がいるのでしょう。それはケースバイケースですね。形式的には選挙権があっても、不正選挙で選挙結果がいい加減な場合は暴動で決着がつく場合があります。また野党が選挙に勝った場合もクーデターで軍事政権ができてしまう場合も、ゼネストや必要とあらば内戦覚悟の暴力革命でクーデターに対抗するしかないだろうというのです。

たとえ政権は交代しても、行政官僚組織の様々な抵抗で円滑に行政が機能しなくなる場合があります。そうなりますと、既成の行政組織を粉砕するための超法規的な暴力革命が必要になるとも考えられます。やはり選挙で勝って内閣を組織するだけでは行政組織を思い通りに動かすことは難しいですね。菅内閣ができて、震災対応や原発事故に対する対応で、菅首相が行政組織や東電を

思うように動かすことができず、それを菅首相の資質がないことに結び付けて菅降ろしに遭ったわけですが、官僚組織が新政権に好意的でなければ、機能を麻痺させることによって新政権をつぶしたり、変質させようとすることはおおいにあるわけです。

古い権力構造、利権構造が出来上がっていて、改革はほとんど骨抜きされてしまうことになりかねず、その結果新政権の能力が疑われ、国民から信頼を失うことになり、革命が流産してしまいがちなのです。それで暴力革命が必要だという議論が絶えないわけです。

しかし実際に暴力で政権を取ったりしますと、それに対抗して、暴力的な権力の奪い合いが続いて、大虐殺や内戦、隣国の干渉に対抗した対外戦争となり、ますます悲惨な事態を惹き起こすことにもつながりかねないのです。暴力ではなく、世論を活性化し、国民的な討議によって問題解決を図っていくことが求められるわけです。

ただ議会選挙で政権交代というルールを作っても、それが有効に機能するためには官僚組織や軍事機構そして広く国民の協力が必要なわけでして、それらへの対策も考えて進めていかなければ政策遂行は成功しないということは承知しておかなければなりません。しかしその遂行が暴力革命論によって可能になると考えるのは、アナクロニズムです。」

**問　ロックの社会契約論と革命権の関連を論じなさい。**

## 十八、ルソーの『社会契約論』とフランス革命

**己が欲、己が得をばさておきて、皆の幸福めざし語れや**

午後10時「ワンネスさん、私も同感ですね。ノムノムです。ロックの場合、名誉革命の正当化に社会契約説を使ったわけです。ルソー（一七一二年～一七七八年）の『社会契約論』（一七六二年）は、国家のあるべき姿を社会契約論として示したわけで、フランス革命はルソーの理論を実現しようとしたわけです。

ルソーの自然状態は『人間不平等起源論』（一七五五年）も参照すべきでしょう。ルソーによれば、人類は、はじめは孤立状態でつまり一人ずつ別々に暮らしていたというのです。ですから言語も所

有もなかったわけです。

ところが困っている人を見つけると、自分がそうなっていることを連想するので、共感から助けるのです。そして助け合っている方が、安全で生きやすいことを発見し、一緒に住むようになります。それで樹の上の住居などができ、家産が生まれます。何家族かが集まって助け合って暮らすようになりますと、言語も生じます。ここまでは神の予定通りだったのですが、農耕・牧畜と冶金によって不平等が始まったということです。

農耕牧畜は土地を区切って、占有しようとしますね、そこから土地の奪い合いが始まりました。しかも冶金の発明によって金属製の武器が作られますと、獣たちが群れのボスの地位やメスを奪い合う際には手加減が働いたのですが、それがなくなります。互いに殺し合うようになり、共倒れの危機になります。

そこで人類の滅亡を防ぐためには、みんなで集まって共存の道を話し合うことになります。その時に「立法権は代理できない」とルソーは考えたのです。皆で話し合って納得した法だから皆で守れるので、代理人に決めてもらった法には自分の知らないところで勝手に決められたので納得いかなくなるということですね。全人民集会を開いてみんなで話し合ってみんなで決めるべきだということです。

実際代表者は選挙民より政治的経済的に優位な立場にあるので、その権威で選ばれる場合があり、選挙民の利害を正確に代弁することがない場合が多いですね。

もちろん人口の少ない古代ギリシアのポリスなら全員参加の人民集会も開催できるのですが、18世紀のフランスでは現実的ではありませんね。ルソー自身は古代ローマの各町内ごとの人民集会を念頭に置いていたようです。すべての町内会が反対したら元老院を可決していても法律にはならなかったというのです。しかしフランス各地で全員参加の人民集会は無理なので、これは実現できませんでした。

ルソーは人民集会での会議の原理を一般意思で説明しています。一般意思というのは総意という言葉で『日本国憲法』では示されています。『天皇の地位は主権の存する日本国民の総意に基づく』ということです。

一般意思も全体意思も多数決で決定されるのですが、全体意思はそれぞれが自己の特殊利害に基づいて発言し、その妥協の産物として決定された意思です。それに対して一般意思は、自己の特殊利害は棚上げにして、全体の幸福・福利を実現するにはどうすべきかの意見しか発言してはいけないのです。そのための情報や知恵を出し合って話し合った結果の多数決なら、国民の総意である一般意思が形成されると考えたのです。そして真の法律は、一般意思であるとし、特殊利害での話し合いの結果とか、代表者の会議での決定とかは一般意思ではなく、真の法律ではないと断じたわけです。

この一般意思によって、国家がうまれ、人民全体の総意が形成されますので、共倒れが防げるわけですね。そうしないといつまでも戦争やもめごとはなくならないということです。

その理屈でいきますと、現代の議会制民主主義国家も真の国家とは言えず、その法律も真の法律ではないということになります。

ただしルソーはだからと言って当時のルイ王朝を暴力革命で転覆せよと言ったわけではありません。あくまでも立法権は代理できないから全人民が参加する人民集会で一般意思を決定すべきだと主張しただけです。

それに議会に関しては確かに直接民主主義の立場に立っていますが、行政に関してまた別で、民主主義ではまとまらないとしています。フランスのような大国では一人が統治する王政でいいという考えです。だからルイ王朝の打倒を呼びかけたのではなく、議会の廃止、全人民参加の人民集会を呼びかけたということですね。

ルソーの思想は『フランス人権宣言』だけでなく、『日本国憲法』でも重視されていまして、特殊利害ではなく、全国民の立場に立って発言すべきだというのは、国民代表の原理と呼ばれています。」

午後11時「ワンネスです。ルソーの一般意思の立場は、確かに大切ですね、私的利害は棚上げにして、みんなの幸福を考えて発言すべきであるというのは、誰もが心得ていなければならないことです。そしてみんなで決めた一般意思はみんなで守るべきだという社会的な道徳的義務とされたわけです。しかしこの論理は、政治の場では、自分たちの発言は全人民の立場に立って発言しているが、対立党派は、私的利害や一部の国民の利害のための発言のように思えるので、相手の発言を許せないように感じてしまい、議会では互いに罵声を飛ばし合い、演壇を奪い合う結果になります。

結局、もっとも急進的なジャコバン党の恐怖独裁になり、公開裁判で多くの人々がギロチンにかけられたのです。フランスの歴史は地上ではなく、地下を見ないと分からないといいますが、地下にはおびただしい革命と内戦の犠牲者のしゃれこうべが層を成しているそうです。

暴力革命の是非と関連させますと、議会制度は立法権は代理できないというルソーの考えと真っ向から対立していますから、議会制民主主義を否定するルソーの立場だと、選挙で野党に投票して政権交代させても、権力者の専制政治は変わらないということになりますね。ただ、直接民主主義を実現させようとしても、暴力的にできるのかどうかは疑問です。それに暴力革命で生まれた政権が恐怖独裁政治を行ったことは多いですね。それでは何にもなりません。」

午後11時30分「ヨウヨウです。榊先生も常々暴力革命はアナクロニズムだと仰っていました。そして平和革命にしても、国家権力が経済機構を管理運営していくのは、どうしても官僚主義に陥りやすく、非効率になって、国際競争力も減退するので、脱資本主義化を図るのは、企業が自ら民主化、公共化していくなかで、行われるのではないかと、下からの脱資本主義を考えておられるようでしたよ。それは国家権力によって、経済を国家権力が直接支配するは無理だということですね。」

**問　ルソーの社会契約論の特色を論じなさい。**

## 十九、観念論か唯物論か？

### 毒入れし犯人（ほし）の実在唯物論その筋書きは観念論かは

六月九日木曜日、学校は臨時休校になった、さすがに御木本校長は体調を崩し、入院した。アナキスト革命団を名乗った校長室占拠の父兄二人と、応援した三人の団員は厳しく取り調べられた。その結果、大阪府警は記者団に正午にやっとこれが事件の全貌というのを発表した。「アナキスト革命団」組織は前日、三好六郎が経営する小さな町工場で結成されたもので、メンバーはその企業の従業員だけである。「革命は電撃的に到来する」というフレーズは、三好がかつて全共闘の活動家だった時に二十歳で極左ジャーナリズムに登場して活躍していた平田慎二が、最近ウェブで盛んに使っているので、共鳴したらしい。

三好の十八年前に別れた妻が、どうも妊娠していたらしくて、その長男が昨年二年生の時に転校勧奨をうけ、転校したがなじめずに休学中らしい。そして平田の会社の従業員の五十歳の寺橋勉の息子がやはり昨年勉学不振からノイローゼになり、自殺したということである。二チャンネルで内部告発の、転校勧奨の中止決定を聞き、身勝手な校長の態度に腹を立てて、三好と寺橋が学校に談判に行こうと話していたが、他の従業員もそれなら応援するということなので、だんだん段取りを考えているうちに昔のアナキスト時代の革命的気分が高揚し、平田の言葉を使うこととか、校長を縛り上げて、校長室を占拠し、灯油をまこうという話になったらしい。そしてその場の高揚次第では、死んだっていい、息子のために死ねるのなら本望だと思ったと心境を語った。

そしてこの事件に関心をもったきっかけは、ミクシィでマイミクの榊周次が毒殺事件で別件逮捕されたことであると供述している。捜査本部としては、榊周次と平田慎二さらに三好六郎がマイミクであったことに注目し、毒殺事件に組織的背景がないかどうかよく捜査したいと発表した。

学校は機動隊が囲んでいて、教職員以外は入れなかった。上村陽一たちはメールやミクシィ、二チャンネルなどの動きを注視し、自分たちも書き込もうと連絡し合った。そして正午の警察発表で、榊を全く思想傾向の違う平田や三好との組織的つながりを調査すると言い出し、毒殺事件の嫌疑が余計に深まったかのように発表したことに、驚いた。

夕刊やテレビニュースでは、榊―平田―三好がマイミクつなが

りであることが、状況証拠でもあるかのような印象で報道した。これに対してミクシィの会員たちの間から、マイミクという意味が何も分かっていないという反発があちこちのサイトで見られた。

二チャンネルの書き込みである。九日木曜日午後7時

「ジョーです。ミクシィのマイミクが組織的つながりのように警察は言いますが、これは全くの誤解です。というより意図的ですね。榊先生はマイミクの申し込みについては、彼が運営しているコミュニティの会員に限定しているが、その他には制限がない。それだけのことで、以前平田さんが現代哲学研究会のメンバーだった以外に、組織的つながりは全くないのです。」

やはり二チャンネルの午後7時の書き込みだ。「はじめまして、シンジです。平田慎二です。例の『革命は電撃的に到来する』というセリフをはやらせています。現代哲学研究会というのは、榊周次先生の大学院時代の学友を中心に、開かれていた学習会でして、私は榊先生のご自宅の近所だったので、時々参加させていただいていました。メンバーに思想的統一もなにもありません。ですから組織的つながりで何か実践活動をするようなものではありません。私と三好六郎さんとは面識もありません。たしかにマイミクですが、マイミクだからといって何も組織的な活動をすることはありません。

私は若い頃から革命的評論を書いてきましたが、組織を作って動かしてきたわけではありません。評論家、思想家として活動してきたのであって、革命運動の組織的実践者ではないのです。我々のような思想家は、いわば表面にでているわけですから、組織的活動をしますと、かえって組織防衛上危ないわけですね。ですから私は組織のことは知らないし、そういう活動にはタッチしていないのです。警察にもそう説明しているのですが、信用してくれているのかどうかわかりません。

ちなみに榊さんも実践家ではありませんね。実に柔軟で固定観念に囚われません。性格はいたって温厚で争いは好まれませんね。人を憎んで毒を忍ばせるようことは絶対にありません。」

「哲学史で謎を解く」のサイトでは、いよいよドイツ観念論に入らなければならない。

9日午後9時「トモびょんです。さあ18世紀から19世紀にかけて、フランス革命勃発期からアンシャン・シジューム（旧体制期）の半世紀ほど有力だったドイツ観念論に入りますよ。榊先生の若い頃は唯物論か観念論かは、哲学の根本問題として考えられていて、しかもそれが労働者階級の立場に立つのか資本家階級の立場に立つのかという階級性の問題でもあるかのように言われていたようですね。ドイツ観念論に入る前に唯物論と観念論の対立について分かり易くどなたか説明願います。」

午後9時15分「はじめましてカンスケです。私は榊さんとは随分古い友人です。大阪大正区の池尾高校時代に社会研究部を一緒にやっていました。私の方が一年先輩です。ですから六十年安保のデモに生徒会ぐるみで参加した体験をもっています。彼はそれに乗り遅れたのが随分残念だと言っていましたね。

確かに、高校生の頃から『共産党宣言』とから『空想から科学への社会主義の発展』という科学的社会主義の古典は読んでいましたね。それで唯物論か観念論かということで、やかましく言ったものです。

唯物論は、物質的な関係が基礎にあるのだということを踏まえる見方です。観念論は、観念や精神が第一義的な存在で、事物などはその現れであると捉えます。物質は観念が現れるための材質に過ぎないと捉えるのも観念論でしょう。

マルクスやエンゲルスが唯物論を確立したきっかけは、一八四六年の『ドイツ・イデオロギー』の共同執筆だと思います。当時フォイエルバッハをはじめとするドイツの若手哲学者たちは、フォイエルバッハのヘーゲル批判を突破口にして、ドイツ観念論の枠を打ち壊して、新しい思潮を次々に打ち出しまして、活況を呈していたわけです。しかしそういう思いつきで議論しても、肝心のドイツの経済的土台を踏まえて、議論しなければ、現実に対して何の意味も持たないということですね。経済的土台の上に、政治や文化やイデオロギーができるので、ドイツでそういう思想面だけ先鋭的な議論が起きるのは、現実の経済的な矛盾が表面化していない、ドイツの後進性の表現にすぎないということですね、そのことを理解しないで議論しても、そういう思想は一時的に終わってしまうということです。」

「テルミーです。私は団塊の世代です。榊さんは、最近は『哲学の大樹』とか言われて、唯物論も観念論もそれぞれ有効な範囲があるから、相互補完的に捉えればいいという立場らしいですね。

榊さんの議論では、歴史を捉えるときに例えば聖徳太子は実在したかという議論では、客観的実在としての聖徳太子の実在性を議論せざるを得ないので、どうしても唯物論的な認識内容と実在との一致を実証せざるを得ない、だから唯物論を否定できないわけですね。しかし聖徳太子とは何かを論じるにあたっては、一定の歴史観に立って、聖徳太子を意義付けることになり、歴史的な観念論にならざるを得ないということです。

これを今回の大手門高校毒殺事件に適用すればどうでしょう。倉吉良造が毒殺されたのは確かですから、犯人の標的がだれだったのかは別にして、毒を茶に混入させた犯人が存在するのは確実ですね。唯物論的に真犯人の実在を前提に、その物的証拠を見出す必要があります。

しかしこの事件の謎を解くのは事件に至るストーリーが書けなければならないということです。そもそもだれがどういう動機で毒を入れたのかということをストーリーとして展開するのは、観念論ですね。この事件の理念の展開です。そこがまだ不十分なのです。警察は、半世紀前の恋敵としての恨みと、イエス本の嫉妬ですね。それを動機として展開されたストーリーを提示していますが、これはあまり説得力がない。でももっと説得力があるストーリーが提示できているのかという問題があります。それは校長先生主導による大手門高校の改革をめぐるトラブルです。これは確かに状況としてはありそうだけれど、容疑者の影すら浮かんでいません。」

**問　観念論対唯物論の対立図式について論じなさい。**

## 二十、観念論の三つのタイプ

### 存在と思惟はなにゆえ同一か感覚素材に物を構成

9日木曜日午後10時「ノリリンです、ドイツ観念論の観念論としての特徴を知るためには、他の観念論、古代ギリシアのプラトン（紀元前四二七年～紀元前三四七年）のイデア論、デカルトの物心二元論などとの比較が大切です。

プラトンのイデアというのは、英語でアイデアとすれば、思いつきですが、観念や理想や典型的な姿としての範型と翻訳されます。つまり頭の中にはっきりした概念が出来上がっていないと、物事に関して、それがなんであるか分からないというのです。ですから猫や犬やネズミのイデアを持っているので、教室に小動物が入ってきた場合に、それが何か認識できるというのです。先ず、イデアが頭にあることが先で、そのイデアが材質つまりマテリーを伴って現れた場合に、マテリーは第二義的な存在であるということになります。これはもっとも典型的な観念論ですね。

次にデカルトの物心二元論です。デカルトは認識する主観の側に、精神的実体を置き、認識される客観の側に延長的実体つまり物質を置きました。精神と物質から世界を構成したわけです。その場合、精神は認識はするけれど、認識されることはありません。なぜなら延長としての量的規定性がないので、どのような構造を成して、どのような仕掛けで認識するのか全く展開できないからです。それにもかかわらず、考える我が絶対確実に存在するのは、疑っている以上、疑っている我が存在することは疑えないという方法的懐疑によったからです。

ではデカルトは物質も精神も共に実体であるという二元論なのに、どうして観念論と言えるのでしょう。それは考える我を出発点にして、そこからすべて演繹しているからですね。

さあいよいよドイツ観念論ですよ。ドイツ観念論はどうして観念論だと言えるのでしょう？それは『思惟と存在の同一』という立場に立っているからです。思惟を頭の中で考えている思考とし、存在をデカルトのいう延長的実体つまり物質存在だとしますと、頭の中で思い浮かべられ、考えている内容が、体の外の事物と一致しているという意味でしょうか？それならデカルト的な反映説

の認識論になりますね。ところがそうではないのです。カント（一七二四年～一八〇四年）は、『純粋理性批判』（一七六八年）は反映説の認識論を脱却して構成説を採用しています。

構成説でいきますと、『事物は感覚の束である』としたバークリー（一六八五年～一七五三年）を継承しているということなのです。つまり感覚を素材にして感覚から高度な思考まで使って事物を構成しているというのです。つまりこれまでの事物の方から意識に向かう反映論から、意識が事物を構成する構成説は方向が百八十度逆なので、認識論におけるコペルニクス的転回だということなのです。

ここで誤解しないで下さいよ。事物をどこに構成しているかということです。目の前に薔薇の花がありますと、それを認識している人は薔薇の像を頭の中に構成しているという意味でしょうか？それならデカルトの反映説と同じですね。頭の中に薔薇を構成するのではなくて、目の前の薔薇の場所に薔薇を構成しているということです。つまり意識が薔薇を構成しているということですね。だから事物は感覚の束というバークリーと同じだということなのです。ですから事物は、感覚を素材にしてそれを思考を用いて主観が構成していることになります。なんと意識に現れている世界は意識自身が作り上げている、意識現象にすぎないのだということですね。

ですから事物などの存在はあくまで人間の意識であるというのが、『思惟と存在の同一』という意味なのです。この場合、『思惟』を頭の中でああでもない、こうでもないと考えをめぐらすことだと理解してはだめですよ、それなら、事物は思考であるということになり、どうして事物が思考なのか分からなくなります。

感覚、意識、意識現象、現象、思惟というような用語は、定義次第でまったく別の意味を持ちますが、『事物は感覚の束』とか、『思惟と存在の同一』という場合には全く同じ意味で使っていると受け止めてください。そうでないと、思惟と存在の同一という意味が分からなくなってしまいます。

ますます分からない、一体事物は思惟なのか、思惟でないのか、事物が思惟だとしたら、事物は事物でないのかと頭を掻き毟っている人はいませんか？この『思惟と存在の同一』を理解するためには、まず事物が存在して、それを主観が思惟するという図式を棚上げにしてください。だって、それでは事物は思惟と別だということが前提になってしまっていますから。

事物は色や形や大きさや匂いや音や硬さなどの触覚など五感によって構成されています。五感は主観の意識なのです。これらを構成するのに、思考を使っていますね。つまり分別して、どういう種類の存在かを判断しているわけです。そういう判断の総計、総括として事物が認知されています。そして事物には、それ以外のものは意識されていませんから、事物が意識現象である限りでは、事物は感覚から高度な思考まで含む思惟の塊だということになり、思惟と存在の同一が確認されるのです。それでも事物は事物でなくなるわけではないのです。事物が元々思惟の総計だったにすぎないわけです。

このようにドイツ観念論では意識現象である事物は思惟なのだという意味で、事物を観念に還元する観念論であると言えます。これは貫徹された観念論だと言えますね。しかし同時に世界が事物から構成されていることには変わりませんから、この観念論は唯物論と両立できるとも言えるのです。」

問　観念論の三つのタイプを整理しなさい。

## 二十一、『純粋理性批判』をめぐって

### 感覚に現れ出でざる物自体そを何故に物と呼びしや

9日木曜日午後11時「ヨウヨウです。やはり『カントの純粋理性批判』のところが最も難解ですね。反映説と構成説の違いです。反映説なら事物が先にあって、それを五感を通して意識に映し出すという図式です。ところが構成説の場合は、思惟と存在が同一だというのですから、先に事物があってそれを構成するのではないわけでしょう。意識が身体の外にある事物を構成するという図式です。しかし世界が自己の意識だけでできているのなら、自己の思い通りに意識が事物を構成してもいいはずだけれど、そうはいかない、そこで意識現象する世界には現れない物自体があって、それが意識現象を制約しているので、現実は主観の思い通りには現象しないということでしょう。この発想はバークリーとはどう違うのでしょう。」

午後11時30分「ノリリンです。さすがヨウヨウ君、鋭く迫りますね。イギリス経験論の伝統は、実験・観察によって確かめられたことだけを根拠に展開するということで、デカルトのような延長的実体と絶対的に区別された精神的実体としての魂という発想は、退けられています。

ホッブズの場合は、あくまで身体機械の働きとして意識活動を捉えるということです。バークリーとなると、経験の総括として事物を捉えることで、事物は意識の束となったのです。それと区別された精神的実体としての魂は仮定されておらず、むしろ意識経験の解釈として主観も客観的事物も意識に還元されます。物が意識に還元されるのですから、物自体という仮定は必要ないので

す。でも意識が主観の思い通りにならないので、意識の外部が神という形で想定されます。

カントは、不滅の魂を信じていますね、その点はデカルトを継承しています。しかし事物は意識現象に還元します。そこで意識現象を惹き起こすけれど、意識としては現象しない物自体を仮定したのではないでしょうか。でも現れない物自体は物と言えるかという疑問がどうしてもあって、この『物自体』については、様々に議論されています。カント自身が『物自体』の存在は仮定すべきでないという意味で使っているという解釈もあるようですね。それだとバークリーと変わらなくなり、デカルトとのつながりが切れてしまいます。カントは経験論と合理論、ルソーの啓蒙思想を総合したということなので、やはり従来の解釈でいいのではないでしょうか。」

六月10日金曜日午前零時「トモぴょんです。毒殺事件の真犯人の影がなかなか見えませんね。毒殺事件は現象として起こったのは確実ですが、この現象の本体が分かりません。この本体を『物自体』というのじゃないのですね。カントの物自体は原理的に現象しないものでしょう、それに対して、真犯人はだれだれという具体的な人物ですから、現象です。ようするに原理的に意識に現れないものを『物自体』と呼ぶことにそもそも問題がありそうですね。

恐ろしいのは事件が拡散して、毒殺事件が見えなくなることです。アナキスト革命団というのは学校改革への不満の爆発ですね。それがそのリーダーと榊先生がミクシィのマイミクということで、毒殺事件の組織的背景が問題になってくる。しかしマイミクというものの性格からいって、組織性が臭うようなものではないのです。今後も次々誘発されてますます毒殺事件から離れていき、結局状況的に怪しいということで、榊先生が殺人罪での起訴に追い込まれないか心配ですね。」

午前零時30分「ジョーです。理性批判というのは理性の限界づけということですね。つまりカントは意識現象しか意識できないのだから、意識に現れないものは認識の対象ではないとしたわけです。意識に現れないからといって存在しないとは言えないということですね。

世界があるから、世界を作った神は存在すると考えられるけれど、神は見えざる神であり、感覚に現れないから認識できません。考えている以上、考える我として魂は存在すると考えられるけれど、主観は対象とならないので、これも認識できない。物自体もそうです。つまり、理性では認識できない以上、認識できるとしてはならないのです。

この態度は参考になりますね。榊先生についてこの毒殺事件との関わりは、毒入りの茶を煎れたというそれだけです。毒が入っていると知っていなければ、犯人とは言えないわけで、その証拠は示されていません。毒を入手した証拠は、玄関の靴箱に同種類の毒物があったというだけです。近所の病院で同じ薬品がなくなっていた事件の犯人が榊先生だという証拠は何一つないのです。こういう現象の積み重ねから、理性が榊先生を犯人だと判定して良いのか、それはとても良いとは言えない、理性的な判断とは言えないということです。」

**問　カントの『純粋理性批判』について論じなさい。**

## 二十二、カントの道徳説

### 人格をただ手段としてのみみなすまじ心有らずや目的となす

10日金曜日午前1時、内容からいって、御木本校長らの策謀で、不倫に絡めて大手門の日本史教諭を無理やり休職させられた吉永妙子先生が書き込んだようだ。

「ミョウです。はじめまして、私は、日本史の高校教師をつい最近までしていました。体調を崩して休職中ですが、受験教育に付いて、カントの道徳説との絡みでどうしても言わせて欲しいことがあります。

『論語』憲問第十五に『子曰わく、古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす』という言葉がありますが、これは昔の学者は私利私欲のために学問をし、今の学者は世のため人のために学問をするという意味ではありません。全く正反対の意味なのです。つまり昔の学者は己の修養をし、立派な人間になるために学問をしたが、今の学者は、人に知識があるのを見てもらって取り立ててもらうために、私利私欲から学問をしているという意味なのです。

中国には科挙制度がありまして、官に就こうと思えば科挙でいい成績を上げなければならず、学校も塾も科挙合格のための予備校化していたのです。朱熹や王陽明などの一流の学者はそれを嘆いていました。

それはともかく、日本の受験体制も、最終的には公務員試験だとか入社試験だとかに受かって立身出世するための体制になって

しまっているわけですね。それで勉強しないといい大学に受からないぞとか、いい会社に就職できないぞといって、私利私欲のために勉強させようとします。

カントは『実践理性批判』（一七八八年）で何をなすべきかを判断する実践理性の限界を明らかにしました。カントの道徳説に基づきますと、そんなことは一切言う必要はありません。だって、自分の私利私欲に叶う事だったら、本人はそれを望んでいるのですから、勉強しろと言われなくてもするわけです。

私利私欲を充足しようとする傾向はだれでももっていて、傾向性に従って生きているわけです。お腹が空けば当然食事をしますし、眠たくなったら寝ますね。息をすることだって第一次欲求の充足であり、傾向性に従っているのです。

進学や就職は本人が望んでするものですから、親や教師に勧められたり、説教されなくても、そのメリットについてはだれでも知っています。ですから、親がやかましく言ったから、勉強をしたわけでもなければ、教師の説教で説得されて勉強したわけでもないのです。

カントは傾向性に従ってしていることには道徳性はないとします。ですから動機が自己の立身出世や経済的利益を目指すところにある受験勉強には一切道徳性はありませんし、それを勧めても効果はありません。かえって無理やりやりたくない勉強をやらされて、親や教師あるいは学校のために犠牲になったと反発されるだけです。

カントの道徳性というのは、傾向性を抑制して義務に従うことによって生じるのです。もちろん欲望を充足して、それを生きる力にして生きているのですから、傾向性を抑制しすぎてはいけませんよ。商品経済に基づく市民社会やその発展としての資本主義社会は、欲望を充足することによって生きる社会であり、私利私欲の追及の自由放任が原理なのです。でもいつも傾向性に従っているだけではだめなのです。時と場合によっては、傾向性を抑制しなければ、秩序が保てなくなり、世の中大混乱に陥り、みんな生きていけなくなるわけです。

信号を守るというのは道徳的ですね。渡りたいという傾向性を抑制して、赤信号で停止するから、交通がスムーズに流れ、交通事故も少なくて済むわけです。学校によっては授業中でもお腹が空いたら、平気で食事を始めたり、授業を無視して私語をしたり、ひどい場合はトランプを始める人もいるようです。これでは真面目に勉強したくても、集中できず、効果が上がらないので、大迷惑なのです。でも学校によっては、学校に来ているだけでも頑張っているという学校もあって、頭ごなしに叱りつけるとかえって余計に授業が荒れてしまうところもあるようです。

それが小学校や中学校の問題だけでなく、高校で深刻になり、そういう高校の経験を大学進学率が高くなって大学に持ち込まれ、今や大学が私語対策などに追われている現状です。

要するにおしゃべりをしたいとか、ちょっと何か食べたいという私利私欲は抑制して、せめて授業中は勉強に集中しましょう、それは最低限のマナー、道徳だということですね。これはカントの道徳説にピッタリです。

さて大手門高校の学校改革の方向は、傾向性を大いに刺激して

高校の難関校突破率を高めようという改革です。ですからこれは生徒の道徳性を高める効果はありません。では難関校突破率が高くなることで世間の評価が高まることはどうでしょう。これは学校の名誉のために、やりたい教育を犠牲にして行うことなので、道徳的でしょうか？

学校の名誉は、実は学校を法人として人格を持っていると見なしたら、それは私利私欲ではないでしょうか？そういう傾向性を抑制して、むしろ本当に人格を高めるための学問をした方か、世に有益な人材を生み出すことになって、道徳的にもいいのではないでしょうか？

第一、人格を高め、人間として大切な教養を身に着けさせることができれば、その人は大いに発奮して勉強するようになり、難関校突破率も単なる受験教育のための予備校化した高校よりもよほどよくなるのではないでしょうか？」

午前2時「ジョーです。私は大手門高校の生徒ですが、何か大手門高校が受験予備校化してしまっているかのように決め付けるのもどうかと思います。先生方はみなさん良識があり、受験一本槍というわけではないと、思います。もちろん受験という大きな壁があって、それと必死で取り組んでいる以上、それを無視した教育をするというのも非現実的です。私から見ますと、理数系や英語の授業も基礎、標準、発展を踏まえて行われ、定期試験も難問ばかりということはありません。

中には授業中ほとんど寝ている生徒とかいてそういう人が欠点を取っていますが、しっかり予習・復習をすれば欠点になるはずはありません。校長先生の改革も生徒に喝を入れるという趣旨で、転校勧奨されるのがいやで急に成績が伸びた生徒もいます。

確かに中学校でトップクラスが集まっていますが、中学では勉強しなくても、知的好奇心が強くて、新聞とかテレビとか読書で知識を仕入れていた人は、トップクラスだったわけです。そういう生徒は、きっちり予習・復習する習慣がないので、ついていけないということなのです。そういう人もやる気さえ出せば、自力でも追いつけるはずです。校長改革に否定的な評価ばかりするのはどうでしょう。私は同調しかねます。

蟻の集団を観察すると一生懸命働いている蟻は多くても二割程度で、後はなまけているそうです。たとえトップクラスが集まっても、その中で、頑張るのは二割程度で、それは学校の程度が高い低いとあまり関係ないといいます。つまり中学でトップクラスだったから、高校でも頑張って当然ではないのです。

だから転校させられたり、自殺した生徒の親が決起して校長を脅したようですが、統計をとったらどうでしょう。転校が多いのはどのレベルの学校か、自殺者が多いのはどうでるか、私は特に大手門高校が多いとは思いません。実に和やかで、明るいいい学校だと私は思っています。校長改革に行き過ぎがあったとしたら、修正すればいいと思いますが、偏見の目で見るのはやめて欲しいですね。」

午前2時30分「ヨウヨウです。大手門高校が和やかでいい高校だというのは、僕も同感です。そして先生方も優しくて、受験受験と締め付けるような雰囲気はありません。だから校長改革によって、微温的な状態に喝が入ったという積極的な面は否定できません。

しかし大阪府の場合は過度にランクづけがなされていて、そのために大きな歪みができていることも確かです。学力テストで大阪府が惨憺たる成績だったので、府知事がもっと学校の成績を公表して競争させようとして物議をかもしたのですが、一つの学区で十段階以上の学校格差があると言われるようなのはやはり異常です。どうしても一番校は難関校突破率にこだわらないと面子が保てないし、最低ランクとされた学校が学ぶ気力を殺がれるのも無理がありません。

中学校でトップクラス、高校で赤点というは、これはかなりショックですね。たしかにジョーさんの言われるように、中学校では自由な勉強でもいい成績を取れたのが、高校では全く歯が立たなくなり、落ち込んだ好例が私自身です。

基礎・標準・発展ときちんと段階を踏んだ授業をしてくれれば、こんなに落ち込まなかったと思っている張本人が僕です。落ち込んでいない人は、基礎・標準・発展がきちんと段階を踏んで行われていると感じているのかもしれません。元々地域によって中学校にも格差があり、予習復習がきちんとできる学習習慣がついていたかどうかも関係すると思います。その点は本人の責任も大いにあるわけですが、大手門に限らず一番校には三十点未満の欠点が少なからず出ているのも確かで、やはり教え方や出題に問題はあると思われます。そのことが与える精神的打撃が大きくて、それが余計に落ち込みを激しくしているのです。

いろいろ立場により言い訳などはできますが、過度な学区制の拡大や受験偏重教育に弊害があるのは他府県との比較においても確かで、その弊害は困難校、進学校の双方に出ていると思います。怠学、落ちこぼれ、不登校、ストレスによる精神的不安定から今後もさまざまな事件が起こりうるのではないでしょうか。それは教育効果からみてもマイナスで、受験にとってもプラスには働いていないと思います。」

午前3時「ミョウです。ヨウヨウさんのような人が多いのですが、一番校に来た以上は、そのレベルややり方に合わせていかなければならないということで、ついていけないのは、本人の覚悟が足りないということで、文句が言えない雰囲気なのです。一番校の中で、成績に開きができるようなら、もっと学校のランク付けを細かくしていったあまり方が効率的という発想になってしまうわけです。それで極端なことになってしまった。ここで受験偏重をやめて、完全地元校集中の小学区制とまでもいかないまでも、せめて3校から5校どまりの中学区制にすれば、一番校と困難校の双方の問題が改善されるのではないでしょうか。もちろんその場合に、勉強に取り組む姿勢そのものが、文化を継承し、教養を身に着けて人格を養うという原点に戻っていないと、私学に流れたり、予備校や塾で勉強して、学校では居眠りやお遊びみたいになりかねませんが。」

**資料　大阪府立高校学区制について―ウキペディアより**

**第二次世界大戦後の学制改革により、旧制中学校や高等女学校を新制高校へ移行する際、「小学区制」「男女共学」「総合制」の3点が重視された。後に高校三原則と呼ばれる基本原則である。**

**これを受け、各都道府県では一九五〇年前後に上記3点を踏まえた通学区域(学区)制度が定められたが、大阪府でも一九五〇年度、大阪市内を6つ、市外を7つ、府内あわせて13の学区に分ける学区制度**

が始まった(計50校)。翌一九五一年には「教育の機会均等」「男女共学の完全実施」「競争入学を避け、地域密接、通学時間を省く」との内容をうたった「大阪府公立高等学校通学区域に関する規則」も定められた。

その後、第一次ベビーブームを迎えて高校の新設も相次ぎ、学区による高校数の不均衡が生じたため、13学区制発足から13年後の一九六三年、学区の規模を拡大、逆に学区の数を減らす5学区制がスタートした(計60校)。

続く人口増と進学率の上昇で新たに11校が設置されたが、10年後の一九七三年、今度は学区の規模を縮小し、9つの学区に細分化する9学区制が発足した(計76校)。一九七〇年代には当時の大阪府知事黒田了一が高校新設を重視した施策を行い、ピーク時には147校と倍増する。

バブル経済も峠を越えた一九九〇年ごろから少子化が始まる。これを受け大阪府教育委員会は一九九九年から「特色ある高校づくり」に注力。普通科高校から国際教養科・総合学科などへの改編や、高校の統廃合を進めた。結果、9学区制スタート時の75校まで普通科高校を減らした上で、二〇〇七年から4学区制が導入された。

なお、学区の境に位置する学校を調整校とし、部分的な越境通学を公認した(9学区制の場合、調整校は初年度で36校)。また、普通科を除く各専門学科校は学区がない(府内全域を通学区域とする)。ただし、普通科総合選択制校には学区が適用される。

そのほか、府内唯一の国立高校である大阪教育大学附属高等学校は、3校舎(池田校舎、天王寺校舎、平野校舎)とも明確な学区を定めていないが、それぞれ「保護者と同居し、通学時間90分」などと定めている。

また、府内の私立高校は、ほとんどの学校で学区を定めていない。

午前3時30分「トモぴょんです。『自己及び他者の人格を決して単に手段としてだけ取り扱ってはならない、同時に目的として扱え』という言葉がありますね。交換に基づく市場によって成立する市民社会や、その発展として出現した資本主義社会では、互いを手段にし合っているのですが、カントは、そういう私的利害の社会に生きている以上手段にしあうのは仕方ないけれど、同時に互いに目的としあってこそ人格として尊重し合う社会ができると考えました。

榊先生は、こう仰っていました。教師は生徒に知識を教えて、それで給与をもらって生活を立てているから、生徒は教師にとって手段になっている。生徒は教師を知識を得る手段にしている。それはいいとしても、それで終わったら、同じ給与しかもらえないのだったら、沢山教えたり、大切なことを教えたら損というか、それだけ犠牲になってしまう。しかし教師にとったら生徒の人格は同時に目的なのだから、教養を身に着けて人格的に成長して欲しいと願っている。だから、どんなに安い給与でも、目いっぱい沢山教えたくてたまらないんだ。

榊先生はベテランだからさぞかし高い給与をもらっていると思っている生徒や父兄が多いけれど、彼は万年非常勤講師ですから、驚くべき低賃金だそうです。彼は私たちを目的として扱ってくれていたと思いますが、私たちはどうでしょう。私は榊先生の授業

が好きだったので、楽しみで聞いていましたが、やはりいてくれないと寂しい、一種の癒しの道具としてしか見ていなかったかもしれません。今先生が追いつめられて留置場にいると思うと、これまでのように道具としてだけではなく、目的としても捉えてあげないと、あまりに冷たすぎるのじゃないかと思うのです。たとえ倫理のセンターでカントの道徳説について正解しても、先生を目的として扱えなかったら、先生から何も大切なことは学ばなかったことになってしまいます。」

**問　カントの道徳説について論じなさい。**

## 二十三、野々上笙子の証言

先生を想う気持ちがけなげなり、ついホロリきて多く語りき

10日金曜日、ふたりとも受験勉強のかたわらＷＥＢへの書き込みをしていて、三時間ほどしか寝ていなかった。10日は臨時休校を解除して、普段通りの授業が再開されたのである。陽一と智子は嘱託事務員の野々上笙子に質問に行った。彼女が校長先生の秘書役だということは生徒にも知れ渡っていたからである。

「ああ、あなたが三輪智子さんね。そして上村陽一君、『ソフィーの世界』の輪読会を英語でしているというので有名ね。この前は榊先生の講演会大成功だったそうでおめでとう。榊先生まだ釈放されないのだそうですね。お気の毒に、で何か用、私でお役にたてるのだったら、なんでも訊ねてちょうだい。」

「そう言っていただけると助かります。」陽一はおもむろに訊ねはじめた。「少しでも榊先生の釈放につながる情報を集めて救出したいという思いですので、探偵のまねみたいで生意気と思われるでしょうが、ご勘弁願いますね。事件当日、お茶に毒が入っていたと報道されていますが、普段はあの茶壺は野々上さんがいつも給仕されるときに使われておられるのですか？」

「そのことは警察の人にも新聞記者にもしつこく訊かれていて、

まるで私が犯人みたいな言い方をする人もいたけど、私は御茶汲み役じゃないのよ。ただ秘書代わりだから日に一度は私が校長先生に煎れて差し上げていますね。仕事で手が離せない時は、校長先生がご自分で煎れられているようよ。たまに教頭先生が煎れられようとした時もあったけれど、煎れ方で薀蓄があって、教頭先生の煎れ方では駄目で、かなり教頭先生に煎れ方について教示されていたようね。それから教頭先生は校長専用の茶壺には近づかないみたい。」

智子は尋ねた。「その日の朝は、お茶は飲まれなかったのですか？」

野々上笙子は頷いた。「いい質問ね。それも訊かれた。だって朝飲んでいて、毒が入っていたら校長先生はとっくにお陀仏していたはずだものね。朝、校長は早いでしょう。七時半には登校されているわ。八時から校門に立つ習慣だから、朝六時には家を出られているそうよ。それで私七時半には登校して、校長室をととのえ、コーヒーを煎れて差し上げるのが日課なの。さあそれから午前中には煎茶は飲まれてないのじゃないかしら。もし飲まれていたら、毒はなかったことになるので、榊先生はますます嫌疑が深まることになるわね。」

陽一は「そうですか、再度確認のようで悪いですが、校長専用と書かれてあるので、校長先生がおられない時に、勝手に飲んだりする人はいないですよね。茶壺に触る可能性は野々上さんと校長先生だけということですか、教頭先生も触られないとすると。」

「それは断定できないわ、だれかがこっそりということはありえますね。校長室は鍵がかかっていませんし、職員室から校長室用の炊事場の横を通って校長室に入れるようになっていますので、こっそり茶壺に触って毒を入れていても校長室からも職員室からも気づきませんからね。」

智子は少し緊張気味に言った。「では教職員に限らず、外部の人や生徒がこっそり入って、茶壺に毒を仕込んだ可能性も皆無ではありませんね。」

笙子は頷いた。「皆無とは言えないわ。でも校長用の茶壺の棚は別になっているので、気づくかしらね。榊先生は御茶のことで会話があって、私が特別の棚にしまうのを見ていたので、何といっても特別のお客様だし、いい茶を煎れたくなって取り出したのでしょう。」

陽一は、「もう一つだけ尋ねさせてください。」ともったいぶって言った。「ところでその宇治茶は校長先生が自宅から持ってこられるのですか、それとも野々上さんが注文されて、学校に送られてくるのですか？」

「校長先生がご自宅から持参されるのが普通です。かなり上等な煎茶なので、改革を進められる立場上、追求されることを心配されているようです。」

「私も後二つ、質問があります。当日の野々上さんは出張だったそうですが、どこで何をされていたのか、それから校長先生にかかってきた電話の相手と用件ですね、ご存知でしたらお願いします。」

「府庁の教職員課に出かけていました。講師登録されている非

常勤講師名簿をコピーして、いい人材がいないか、校長先生が調べやすくするために書類を作成していたのです。校長先生が命拾いされた電話の相手と用件については、いくら私でも校長先生を取り調べるような質問はできません。あの先生はしょっちゅう電話されていますから、見当がつきませんね。警察では携帯の記録を調べているそうです。携帯電話だったようですから。」

陽一と智子は、野々上が大変協力的なのに感動した。「どうもありがとうございました。警察官でもないのに根掘り葉掘り伺って申し訳ありませんでした。大変参考になりました。」と陽一は深々と頭を下げた。智子も「本当に失礼しました。ごめんなさい」と続いて頭を下げた。

野々上は微笑んで「いいのよ、そんなこと、榊先生はいい先生だから私も協力したかったの。まあ高校生が探偵のまねをしても何もできないとは思うけど、先生を思う気持ちがけなげじゃないの」とついホロリとしそうになった。

**問　野々上笙子の証言を要約しなさい。**

## 二十四、古谷一哉先生に訊く

**偏向で戯にせむとてからませたプライベートで見殺しにけり**

昼休みに大手門高校の近くに府庁があって、そこの地階に食堂がある。大手門高校の食堂よりは品ぞろえもよく、値段も高くないので、そこを二人で利用することがよくあった。陽一は昂奮気味に言った。「勇気を出して、訊けてよかったよ、やはり校長に恨みがある人なら、やれないことではない、そういう動機のある人を見つければいいわけだ。」

智子は辛そうに言った。「私たちは、榊先生が逮捕されたので、なんとかしなくっちゃということで、こんなことしているけれど、仮によ、校長先生に恨みのある人が見つかって、その人が真犯人だと分かったら、私たちがその人を告発することになるわけでしょう。どんなさ、思いでやったか分からないでしょう。」

陽一は頷いた、「確かにそういう仕事は官憲に任せたいね。でも榊先生を助けるためには事件の真相を知るしかないんだ。だれか思い当たる人はいるかい？」

智子は言いにくそうに言った。「陽一君も、とっくに感づいていると思うけれど、吉永妙子先生がまず浮かんだわ。それから校長改革で被害にあった生徒・父兄まで含めるときりがないし、御木本先生が銀行員だったときにバブルがはじけて大変だったので、仕事関係でのトラブルだって考えられるでしょう。無理やり融資を受けさせられて、バブル崩壊後返済できなくなって倒産なんて

たくさんあったでしょうから。」

陽一は腕を組んで考え込む姿勢をした。「ウーム、やっぱり、吉永先生が校長に辞めさせられた事情は、古文の古谷一哉先生が榊先生に話しているかもしれないね。あの時はただの噂と思ったけれど、あのカリスマ教師の吉永先生が辞めさせられるというのは、よほどの事情があるだろうし、吉永先生にすれば、プライドが高いだけに許せないと思って、復讐ということもあるかもしれない。とてもそういう人柄には見えないけれど、ともかく事情を確かめておく必要はあるようだね。」

「ただ吉永先生が毒を入れるというはどうでしょう。皆に顔を知られているから、見つからずに入ってくるのは難しいのでは。だれか共犯がいれば別だけれど。今日の放課後にでも古谷先生にお話しをうかがいましょう。」と智子は応じた。

放課後、国語科の教員室に古谷先生を訪ねた。他の先生方はクラブ活動などの校務で、出払っていたので、そこで智子が切り出した。「先日は『闇の十字架』の印刷にご協力いただきありがとうございました。」

「ああ、あれね、あれは絶対内緒だよ。職員会議で作った生徒を見つけ出して処分すべきだと校長が、すごい剣幕だったんだが、かえって逆効果で学校が混乱するから、穏便にすますようにみんなでなだめすかしたんだから。第二号もうできたのかい？」とちょっと迷惑そうに言った。

智子は申し訳なさそうに「それはご迷惑かけて申し訳ありません」と困ったような泣き出しそうな表情になったので、陽一がフォローした。

「第二号については、また古谷先生にご相談してからということで、今はそれ以前の問題です。つまり、榊先生の疑いを晴らそうと思っても、ただ榊先生がいい人だったから絶対にあり得ないという理屈では弱いと思うのです。ほら親鸞だって、ハエ一匹殺せない人でも、因果のめぐり次第で百人、千人殺すこともあると『歎異抄』で唯円に語っているじゃないですか？」

「それで、君たちは、榊先生の無実を証明して見せようということですか、そんな今時捜査は科学捜査の時代だから、素人が警察に対抗するなんてことは、テレビドラマの世界でしかないんだ。まそれはそうとして、何か私に質問に来たのかい、今度の事件で私が何か知っているとでも？」

智子は、少し微笑んだ。「事件の経過を遡りますと、榊先生の再登場、そして吉永先生の休職ですね、吉永先生はご病気でと生徒には知らされていますが、真相はどうなんですか、校長先生とトラブって休職に追い込まれたのじゃあ。」

「どうしてそれを、ああ、あの時聞こえていたんだね。そんなプライベートな事情は、プライバシーだから語れないよ。」と断った。

陽一は、「そうですか、やはりプライベートな事情が絡んでいたのですね。でもオカシイな、プライベートな事情で校長先生とトラブりますか？吉永先生の授業のやり方に校長先生がクレームをつけたら、吉永先生と口論になって、それで校長先生が頭にきて、馘だってなったのじゃあ。」

智子は笑って、「子供の喧嘩じゃあるまいし、授業のやり方で議論があっても、それで馘なんてことはできないでしょう。それだったら、きちんと職員会議でどういう問題なのか議論されているはずですね、病気で休職ということになったのは、プライベートの事情を持ち出して、それで病気で休職てことにしたのでしょう。」

「三輪さん、すごい、名推理だね。なるほど吉永先生は校長先生に弱味を握られていて、それで辞めざるを得なくなったということですね？それならさぞかし悔しかったでしょうね。でもカリスマ教員が学校をやめなければならないプライベートな事情てなんですか？古谷先生見当がつきます？」

「さあねえ、我々教員にも病気で休職しか聞かされてないし、ただ先ほどもでたように、本当の理由は授業内容に対するクレームがあって、父兄から圧力があったらしい、歴史だから教科書問題に絡んで、偏向教育だって攻撃されたらしいね」と古谷先生は答えた。

「授業内容をボイスレコーダーにとって、それをネタに天皇を冒涜したなど、日本が一方的に侵略戦争をしてきたように教えたと偏向教育だと追及されたということですね、古谷先生が榊先生に言われていた内容がつい地声が大きかったので聞こえてしまいました」と陽一はその内容を確かめた。

「それだけだよ、でもそれだけなら一方的に休職ということにはならないはずなので、後はプライベートのことを絡ませて休職に追い込んだ云々は、噂ですよ、みんなそう思っているということですね」と古谷先生はとぼけて語った。「いや国語科の先生たちがこの部屋でおしゃべりしているときに、誰からともなくそういう話が出て、きっと何かプライベートが取引材料になったのだろうということです。その何かが何かという話は出てませんでしたね。」

智子は不思議そうな顔をして訊ねた、「ちょっと合点がいきませんね、もしそうなら、偏向教育だとして休職に追い込まれている吉永先生をみんな見殺しにできます？私たちは授業を受けていますから分かりますが、そんな辞めさせられるような授業じゃない、本当にまともな授業です。それで辞めさせられるとしたら、先生方みんなの人権問題でしょう。だってまともな授業すれば馘てことですから、絶対に放っておけないはずだわ。」

古谷先生の顔がこわばってきた。「その通りだ。でもその時は噂にはなったけれど、職員会議では問題にされなかった、それは事実だよ、みんなで見殺しにした。本当に申し訳ない。生徒たちにも申し訳ない。」

陽一は、頭に両手をやって力を込めた。「ということは、そのプライベートな事情というのは、もしばらされたらとんでもないことになる、そういう事情ですね、みんなばらされたら困ると思っていたのは、その中身をみんなが知っていたということですね、知らなかったら、不当解雇だってみんなではねつけるはずです。でもそうしなかったということは周知の事実で、しかも公になったら困ることなんだ。」

古谷先生は答えなかった。答えられなかったのである。だが、彼の目からは涙がこぼれていた。それが何より正直に吉永妙子先生の粛清事件の真相を語っていた。陽一と智子はそれ以上追及で

きなかったが、吉永先生と古谷先生のプライベートに問題ありということに感づいたのである。

教員がみんな知っていることだったら、古谷先生に告白させることはない、今問題なのは、吉永妙子先生粛清事件と毒殺事件のつながりである。それはまだ全く見えていない。

**問　古谷一哉先生の証言を要約しなさい。**

## 二十五、フィヒテの主意主義

**非我である毒殺事件を構成し、意志は貫く愛と正義を**

十日金曜日　午後９時　「哲学史で謎を解く」のトピックに書き込みがあった。「ワンネスです。警察は本来無関係な元アナキストの校長室占拠事件まで榊先生の容疑に結び付けるようなマスコミ操作で、国民の目を欺いて、殺人罪であくまでも榊先生を起訴したいようですね。ということは、なかなか真犯人を見つけ出す捜査が進んでいないということでしょう。私の警察に対する好意的な見方では、榊先生を抑留しているのは、真犯人に油断させるためだと思います。いかにも榊先生に容疑が絞られているように見せかけて、真犯人を泳がせぼろを出すのを待っているのです。

だって校長先生を恨んでいそうな教職員、転校させられた生徒とその父兄、元銀行員だったころの取引先や同僚など、捜査すべき対象はたくさんあります。それらを虱潰しに当たってはいると思いますが、そろそろ榊先生とは別の有力容疑者が浮かび上がってもよさそうですね。まあ時間がかかるのも無理ないでしょう。

哲学史の方はフィヒテ（一七六二年～一八一四年）に入らないとね。カントは、〈物自体〉という、矛盾した用語を作っていまだに困らしていますが、当時もこれはなんとかしないといけないと思っていたのでしょう。だって物というのは感覚の対象になって現れるからこそ物なのであって、その物自体が感覚の対象になりえないという言い方は、混乱をもたらすだけですからね。

それに理性の限界をはっきりさせるというのは、一見科学的ですが、やはり哲学者にとったら不満でしょう。人間理性に限界を設けてしまいますと、結局それは、神の理性や自然の摂理と人間の理性は別だということになり、存在とは何か、生命とは何か、人間とは何かを体系的に展開する形而上学を断念しなくてはならなくなります。

そこでカントでは純粋理性つまり理論理性と、実践理性が二元論的になっていたのを、フィヒテは、実践理性の優位の下に統合しようとしたのです。ということは理論理性と言っても、物事を認識するのは、自然的社会的実践の必要からですね。知識を整理して巨大な知識の蔵を作り上げますと、学問がそういう実践的必要から独立して捉えられますが、そのように知識が積み上げられてきたのも、実践経験の積み重ねによってです。一見、実践に関係ない知識でも体系の中に位置づけられることによって、世界認識の一環となりますから、世界認識の発展が科学技術を発展させるという意味で、理論理性を実践理性に包摂してもいいわけです。

ガリレオは、『二等辺三角形の両底角が等しいのは人間において真理であるだけでなく、神においても真理である』としました。確かに人間においてだけ真理と言っても、それは自然の中で試された真理でもなければ、人間は自然の中で実践して生きていけなくなります。その意味で古代ギリシアのストア派だけでなく、普遍妥当的真理というのは人間と神が共有し、自然に貫徹している理性によって獲得される真理なのです。

フィヒテはこの理性を実践的に捉えたので、その主体として絶対我を据えたのです。そして個々人の自我は、絶対我の現れとして存在するのです。

この絶対我は確かにキリスト教的な超越神とは違います。超越神論では、創造主である神と、被造物である自然物（そこには動植物や人間なども含まれますが）、は全くの他者なのです。ところがフィヒテの絶対我というのは人間の自我になって現れるし、自然も物質的な絶対我の現れであり、そこに精神が貫かれているわけですね。つまりフィヒテはスピノザ主義者を自認していたのです。

超越神の存在を否定したために、無神論者として非難され、無神論論争が起こりました。それでイエナ大学教授を辞めさせられました。

一人一人の自我は、それぞれ自らの課題を担って、現れ、それを実現するわけですが、その為に克服すべき障害が非我であり、それは絶対我から与えられた課題であるわけです。それは認識論的には構成説でいけば、自我が構成しているわけです。自我も非我も汎神論的には絶対我の現れに他ならないわけでして、絶対我である神は自我や非我と別個に存在しているわけではありません。

今大手門高校事件が起こり、大手門高校生は、榊先生を囚われて、なんとか救出しようという難しい課題に立ち向かっているわけですね。それは降ってわいた思いがけない事態で、全く皆さんの意志せざるもののように思われるかもしれませんが、そうではないのです。

榊先生は、名門進学校の三年生を担当されていたので、皆さんは受験生として大変な時期にあるわけで、事件が起こっても、それは榊先生の災難であって、自分の問題ではないわけです。特に社会科などは、別に先生が代っても、過去問をしっかり自分でやって、慣れていけば高得点はとれるので、それで得点が大幅に下がることもないわけですね。先生には気の毒だけれど、警察に任せておこうということになって、当たり前です。

でもみなさんはそうはならなかった。それは自分たちのために一生懸命授業に取り組んでくれていた先生が、とんでもない事件

に巻き込まれて、災難に遭っているので、それを助けなければという義務感が自分たちの意志の中に生じたということです。別に頼まれたわけでも、強制されたわけでもない、でも不条理な目に遭っている先生を見殺しにすることは、自分の良心が許さないということですね。だからこのサイトも立ち上げたし、二チャンネルでも取り組んでいるし『闇の十字架』というミニコミ誌も出している。こうやって非我である事件をそれぞれの意志で構成して、乗り越えようともがいているわけです。

榊先生との魂のつながりあったのでしょう。でないと、事件はただ迷惑なだけです。自分自身の行動に駆り立てられるようなものにはなりません。その意味で、これは単に個人的な自我の意志だけに由来するのではなくて、世界に愛と正義をもたろそうとする絶対我の意志でもあるわけですね。受験だからといって、われ関せずで済ませたら、ただ自分の目先の利害だけで行動する人間になってしまう。それはとても許されないと思われているのではないでしょうか？」

**問　フィヒテの主意主義の特色を論じなさい。**

## 二十六、フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』

### フランスの軍靴にありしベルリンで愛国教育熱く語りき

十日金曜日　午後10時「ノムノムです。フィヒテと言えば、一八〇七～〇八年の冬にベルリン学士院で行った『ドイツ国民に告ぐ』の演説が胸を打ちます。ナポレオン占領下のベルリンで、フランス文化に対するドイツ国民文化の優秀さを説き、ドイツ国民が民族意識に目覚めてドイツを再興するために、国民教育の意義を強調したものです。

先ず導入です。

『独立を失った国民は、同時に、時代の動きにはたらきかけ、その内容を自由に決定する能力をも失ってしまっています。もし

も、ドイツ国民がこのような状態から抜け出ようとしないなら、この時代と、この時代の国民みずからが、この国の運命を支配する外国の権力によって牛耳られることになるでしょう』。

次は松岡正剛さんの要約をお借りします。
http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya0390.html
『私がこれから始める講演は、3年前の冬に行った『現代の特質』の続きだ。

私は先の講演において我々の時代は世界史の第3期にあたり、たんなる官能的利己心がそのすべての生命的な活動、運動の原動力になっているということに向かって突き進んだことを述べた。しかし同時にこれがために、利己心は行くところまで進みすぎて、かえって自己を失うに至ったのだと語った。

これでは行方を失いつつあるドイツは救えない。私はこの講演をドイツ人のために、もっぱらドイツ人についての出来事に絞って語りたい。なぜドイツ人のためなのか。それ以外のどんな統一的名称も真理や意義をもたないからなのだ。

我々は、未来の生を現在の生に結びつけなければならない。そのためには我々は「拡大された自己」を獲得しなければならない。それにはドイツはドイツの教育を抜本的に変革する必要がある。その教育とは国民の教育であり、ドイツ人のための教育であり、ドイツのための教育である。

この講演の目的は、打ちひしがれた人々に勇気と希望を与え、深い悲しみのなかに喜びを予告し、最大の窮迫の時を乗り越えるようにすることである。ここにいる聴衆は少ないかもしれないが、私はこれを全ドイツの国民に告げている。』

フィヒテの教育改革のプランを次のように松岡さんは要約されています。

『（1）学校を、生徒が生み出す最初の社会秩序にするための「共同社会」にするべきだということ。
（2）教育は男女ともに同じ方法でおこなわれなければならないということ。
（3）学習と労働と身体が統一されるような教育こそが、とくに幼年期から必要であること。
（4）学校は「経済教育」をおこなう小さな「経済国家」のモデルであろうとするべきであること。
（5）真剣な宗教教育こそが「感性界」を可能世界にしていくはずだということ。
（6）すべての教育は国民教育でなければならず、したがってすべての教育はドイツ人に共通のドイツ語でなければならないということ。』

この民族愛に溢れた国民教育の構想は、ナポレオン占領下で自信喪失気味だったドイツ国民に祖国再興の意志と希望を与え、実際の指針を与えたのです。

榊先生は今日本が衰退の危機にあると大変心配しておられます。一九八〇年代後半に日本は技術大国化に成功し、二十一世紀は日本が世界をリードするのではないかと言われたものでした。しかしバブル崩壊後、深刻なデフレ不況も重なって、日本のイノベーションは停滞してきていると言われています。

この長期的なデフレ不況対策で財政支出を拡大しましたが、不況は収まらず、税収が伸び悩んだので、財政赤字がどんどん膨張し、今や千兆円を超える規模に達しています。それでも国家経済が破綻せず、円高が続いているのは、国民がため込んでいる資産が大きいからだと言われていますが、もちろん何とか手を打たないと、日本の方が危ないということになり、円売りの流れが起きると、急速に円安が進み、資産価値も減少して財政破綻に陥りかねないわけですね。

それでも一九八〇年代までの日本なら、絶えずイノベーションが進展し、世界を技術面でリードしていましたから、持ち直す地力があったわけですが、一九九〇年代からの長期不況で、長期安定雇用体制が崩壊し、研究開発投資もにぶり技術水準も相対的に低下してきました。ジャパン・アズ・ナンバーワンは昔日の夢となってしまったのです。それが二〇一一年の東日本大地震に伴う福島原発事故で、日本の技術の杜撰さと立ち遅れが露見しました。ソニーやパナソニックがサムソンに技術面で水をあけられるという国際競争力低下のシンボリックな事態も生じていたのです。

特に深刻なのが科学技術水準を支える学校教育の学力低下ですね。日本は戦後教育の面で世界に対してダントツトップの学力を誇っていました。それがオイルショック以降、学校が荒廃しだし、学級崩壊や校内暴力、いじめの増加などが深刻化し、勉学意欲も低下してきたわけです。これでは質の高い労働力を生み出すことも、高い研究水準を維持することもできません。日本が凋落するのも必然的なわけです。

安全神話をふりまいて安全対策を怠ってきた電力会社はもちろん、震災復興に機動性を発揮できない行政も問題です。おそらく行政機構は自らの権限拡大を求めて、国民の福祉や国の経済力を無視して肥大化し、重税国家を作り上げています。そして今や技術的先進性に疑問符を貼られた企業、深刻な学力低下を露呈している学校教育もそうですね。日本は自らを振り返り、隅々に至るまで総点検しなければいけないのです。

それはもちろん組織の問題であるとともに、同時に個々人の問題でもあるわけですね。己自身が見直され、点検されるべき対象なのです。榊先生が大学の講義でその話をされたら、それまで授業中におしゃべりしていた学生が、このままではいけないと思ったのか、最近は倫理学の授業中に資格試験のための勉強を始めたということです。

榊先生は、この十年間ほど大学での倫理学の教材のファンタジー化を試されています。同じ倫理学の話でも物語を通して語った方が、理論を概説するよりもよっぽど分かり易いわけですね。概論的な講義ではもはや学生の生きた知識には成り得ないということで、学力問題を踏まえた教材革命なのです。できれば哲学でも教材の文学化が図れないかと悪戦苦闘中ということです。

日本経済の落ち込みや地盤沈下を憂えるというのは愛国的な民族感情もあるでしょうが、榊先生は別に日本人が豊かになりすぎて、ハングリー精神を失くし、目標を持てずに衰退するのなら、それは仕方ないことで、生活水準が韓国や中国より低くなったところで、ハングリー精神がよみがえってくるのを待つしかないと言われています。これからはグローバル化の時代なので、世界全体が、グローバル・デモクラシーの原理で全体がよりよくなればそれでもいいわけです。

でも他方で榊先生は、やはり日本の落ち込みは防ぎたいようですね。次のようにも言われています。日本文化には普遍性があるから、これを守り発展させ、世界に広げていく必要があるので、そのためには日本経済が栄えていてあこがれられる方がいいわけです。

それは縄文時代からの森の文化、大いなる生命の循環と共生を大切にする文化です。そして聖徳太子の『憲法十七条』の和の精神です。力を合わせ知恵を合わせて、集団で問題に取り組み、話し合いでみんなが幸福になれる道を探って、トラブルを解決していこうとする精神です。そうした中で創意工夫が活発に行われて、問題を前向きに解決していこうとする姿勢です。

その意味では、日本人はもっと自国の文化的伝統から良いものを学び直し、誇りを持って世界にそれを広げていこうとすべきですね。フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』に触発されて、今こそ『日本国民に告ぐ』を打ち出すべきではないでしょうか。」

**問　フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』にならって、あなたの考える『日本国民に告ぐ』の骨子を書きなさい。**

## 二十七、陽一、智子の名探偵

**陽一も智子もいつしか名探偵、榊の無実極めるまでは**

六月11日土曜日、週休二日制でも、成績不良者や希望者を集めて補講がある。図書室も開いていて、結構登校生も多いのだ。その日は、野々上笙子も出勤していた。陽一と智子は笙子を呼び出して、大阪城公園で話した。学校と道路を隔ててすぐ大阪城公園なのである。

「なるほど、吉永妙子先生の休職問題がひっかかるってわけね。どうして休職に追い込まれたかでしょう。上村君のお調べ通り、彼女の教育内容に偏向があるのではないかということで、父兄から苦情があったのよ、特に物部氏の太陽神信仰を天皇家が簒奪し

て、天皇家の祖先神は北極星だったのに瓊瓊杵尊は天照の孫だったことにしたなんて、まあ発想としては面白いけれど、確かな証拠もないのに、天皇家の名誉を傷つけるということね、教育上不謹慎だったということで、始末書ですまそうということだったの。それが、まあ吉永先生も筋金が入っているので、退くわけないでしょう。それでトラぶって、結局、休職になったのよ。

プライベートを絡ませた？さあ私は校長先生に引き抜かれてきているから、古くからのことは知らないわ、校長先生も知らなかったと思いますよ。それに私は事務の方だからね。先生方は知っていたかも。教頭先生が機転を効かしたのじゃないかしら。プライベートに古谷先生が絡んでないかって、ええ？何それ？不倫ってこと。不倫をばらすって脅かして、引き下がらした？ウーム、そりゃ知らなかったけど、あの教頭先生のことだからやりそうなことね。いや、ここだけのオフレコよ。オフレコって意味分かる？口外無用ってこと。そんなことで引き下がるなんて、吉永先生も今時古風ね。」

「吉永先生の住所とか電話番号とか教えていただけますか？」一度直接お話を伺おうと思いまして。」と智子が訊ねた。

「それはね、最近個人情報に対するプライバシー管理が厳しくなって、教えられないの。でも名簿は社会科教員室にあるから社会科の先生に頼んで見せてもらいなさい。お見舞いのお手紙を差し上げたいからって言えば大丈夫でしょう。たしか奈良県ね、明日香村じゃなかったかしら、ほら石舞台の近所だって、そう言えば、この前の遠足あったでしょう。三輪山周辺の。その十日ほど前の日曜日だったかしら、穴師坐兵主神社で古谷先生をお見かけしたわ、その時女性が一緒にいたけど、すぐどこかに行ってしまったわ。若作りだったので、まさか吉永先生ではないと思ったけれど、サングラスしてたし、だれか分からなかったけれど、あの時の写真に彼女もちらっと写っているかもしれないね、上村君メールアドレス教えてくれたら、その写真送るわよ。」

陽一は勇んで言った。「善は急げだ、早速吉永先生のところへ会いに行ってくるよ。」智子は言った。「私も行っていいでしょう。ていうか、一人で行くといかにも探偵みたいじゃないの、相手も気分悪いでしょう。気晴らしにハイキングに来てついでに先生にも会いたくてということにしましょう。」

「それがいいわね。吉永先生も悶々とされていて、会ってもらえないかもしれないけれど、気分転換にいいかも。」と笙子も口を添えた。

補講は午前中に終えて、社会科教員室で住所・電話番号を調べて、午後三時ごろ吉永先生に会うことができた。石舞台を案内していただいたのである。

「せっかく、ふたりでデイトを楽しんでいるのに会いに来てくれてうれしいわ。」と明るく吉永先生は微笑んだ。別にそれほど事件の暗い影が差していたり、仕事を休んで気が滅入っているようにも見えなかった。

「今日はいい天気なので、気晴らしになると思いましてね。明日香に来たら、先生にお会いしたくなって、手帳にメモってあってよかったですよ」陽一はいいわけをした。

「それにしても二人は『ソフィーの世界』の輪読会でしょう。榊先生に随分お世話になったのじゃない。先生大変ね、えらい濡れ衣を着せられちゃって。」

「実はそのことで頭がいっぱいで、でもどうしたらよいかわからないでしょう。それでWEBなんかで発信はしているのですが、まるで見当がつかなくて」と言った。もし古谷先生とのプライベートなことがあるのなら、古谷先生から連絡が行っているかもしれない。

「私の方まで警察が調べに来たわよ。休職した事情まで根掘り葉掘り訊かれちゃったわ。」

「歴史教育の内容で、偏向があるって父兄から苦情があって、それで始末書云々でトラぶったということですね。」

「あら、探偵さん、ちゃんと調べがついてるじゃないの」とあきれた調子で言った。「それで私が校長先生を恨んで毒を盛ったんじゃないかって思っているの？」ととぼけた調子で突っ込んできた。

智子は少し慌てた調子で、「そんなことでは殺意までいかないでしょう」と応えた。

「じゃあ、プライベートを絡ませて、休職を迫られたら殺意までいくというわけ？」やっぱり古谷先生から聞いているみたいである。

「歴史教育の内容の是非についての問題なのに、プライベートをちらつかせて休職させるというは、やはりフェアーとは言えません。アンフェアーの極致ですね」と陽一は同情した。

「それで上村君は私を疑っているのでしょう、校長に毒を盛ったって」と少し語調がきつくなってきた。

智子は落ち着いて言った。「私たちは誰を疑うという立場ではないのです。事件が起こって、榊先生が殺人罪で起訴されようとしている。でも彼がそんなことはするはずはない、それで私たちが知りうることは何かと思いまして。」

「そりゃあ頭にきたわよ。でも、古谷さんとのことは、人間には理性だけで抑えられない部分があるってことね。」

智子は遠慮がちに訊ねた。「古谷先生とは日本史や日本文学で関心が近いので親しくなられたのですか？」

「趣味や関心が近いからって、そんな特別の関係なんかにならないわ。彼は昔一九九〇年代の初めごろまだ二十歳代に海外生活にあこがれて中東で米軍関係のワイルドな仕事に関わっていたこともあるそうよ、それでかえって日本的なものを求めるようになったんだって。だからただ雅なだけじゃないのよ、どうしようもない哀しみを抱えた野獣の魂のようなものを秘めていたのね、それでつい私の中の女の部分に火が付いちゃったわけなの。」

陽一は驚いた。「へェー、それは分かりませんでしたね。古谷先生は繊細で大人しい文学青年だったのかと思っていました。人って外見で判断したらだめってことですね。」

「まあ校長先生のお蔭で、いつまでもそういう関係を引きずっていくのも辛いし、彼も多感なので、独り占めできるわけでもないので、きっぱりそういう関係はやめにしたわ。未だにいろいろ

話はしてくれるけれど、もう男女関係じゃないのよ。

それに私だって、自分の人生があるのだから、これから生きていく道を切り開いていかなくてはならないわけ。早速大学の恩師と相談して、大学院は修士しか出てないので、博士課程に四月から入れてもらおうと相談しているの。これがなんとかなりそうなのよ。だから人殺しなんて考えている暇はないわけでしょう。なんとか今まで働いてきたので退職金だとかでるし、ここ数年は大丈夫、そのうちに大学の方でなんとかしようなんて思っているわけ。」

「そうですか、それは良かったじゃないですか。そりゃあいくら腹が立っても人殺しするわけはありませんよね。」陽一も智子も納得したようだ。

智子は微笑みながらたずねた。「吉永先生は5月15日の日曜日に穴師坐兵主神社に行かれましたか？遠足の下見の古谷先生と。」

「ええ、行ったわよ。元々私も遠足の係だったの、それで古谷先生に誘われて行ったのよ。そしたらそこで校長先生を見かけたので、さっといなくなったのよ、そんなことまで調べ上げてるのね、素人探偵にしたらなかなかのものね」と感心したように言った。

「ええ！じゃあ野々上さんと校長先生は一緒だったのですか？」と陽一は驚いた。「それじゃあ、まさか校長と野々上さんも関係があったりして」とつぶやいた。

「へー」と智子も驚いた。「自分も不倫しているくせに、人の不倫を休職の材料に使うなんて、ひどいじゃないですか！」

「そう思うでしょう」と吉永は言った。「でも私が毒を盛ったわけじゃないのよ」と言い訳をした。

「古谷先生も頭に来て、後で校長に追及したらしいのよ。自分だって不倫しているくせに、不倫を取引材料にするなんてひどいって、そしたら、校長笑って曰く、『もう還暦直前で、恋愛でも不倫でもないよ、彼女は歴女で詳しいものだから案内してもらっているだけだ。それに笙子はいまは独身だし、私は妻とはもう別居二年目だ』つまり、不倫ではないというんですよ。そういう人です、あの校長は」と険しい表情になった。

帰路の近鉄電車でふたりは少々疲れ気味になった。陽一は、「こんなこと、人を取り調べるなんて、初めてだろう、しかも相手は大人だし、一日に三人も訊いたので、精神的に疲れたね」と智子に同意を求めた。

「ええ、でも収穫は大きかったわ。吉永妙子先生が偏向問題で追及され、不倫を材料に休職に追い詰められたことははっきりしたわけよ。受験体制の問題とはまた別の問題も明確になって来たということでしょう。それから古谷―吉永不倫問題と共に御木本―野々上不倫疑惑も浮上してきたわ。これは不倫ではない可能性もあるけど、ますます校長をめぐる問題で毒殺事件の背景が見えてきたということでしょう。」と智子は説明した。

「やはり校長標的の可能性が大きいね。ただ今日の三人の聴取だけで見る限りではということだ。校長改革への反発という線での聞き取りもする必要はある。元アナキスト革命団からも事情を

聴かなくちゃあ。それにしてもヒ素の入手経路が知りたいね。榊先生が病院から盗んできたのじゃないかという嫌疑がかけられているけれど、ヒ素にしても青酸カリにしても、病院にはあるにしても、だから病院に行けばこっそり盗み出せるようなものじゃないらしいよ。」

「それで榊先生に対する取り調べの方もどうやら、ほとんど進んでいないようね。昔なら拷問で今頃榊先生殺されてしまっていたかもね。それからやっぱり警察でも捜査はなかなか難しそうなんだから、私たちもＷＥＢでの活動を重視して、榊先生のお仕事ぶりなどをアピールして無実だってことを世間に理解してもらうことが大切ね」と智子は言った。

「三輪さんの文章はそういう意味で胸に響くよ。哲学史を書いていくのも、事件解決に直結するわけではないけれど、確実に榊先生の無実の印象を強める働きはあると思うね。こういう難事件では決定的な証拠がなかなかなくて、それでも安易に送検したり、起訴したりして冤罪を惹き起こしたり、迷宮入りで、灰色解決になりがちだけれど、その際、我々の榊先生を救おうとする動きがあるのとないのとでは、全然違うと思うな。安易に送検や起訴ができなくなる効果はあると思うよ。」

**問　吉永妙子先生から得た新証言をまとめなさい。**

## 二十八、シェリング哲学の現代的意義

**超えられぬ深淵とてぞ恐れまじパッションあらばなせばなるなり**

6月11日土曜日午後9時「トモぴょんです。今日は先生や事務職員の方にも事情を伺いまして、事件の背景などをさぐってみましたが、まあどこからつついても榊先生が疑わしいということは出てきませんし、どなたも榊先生を疑っている様子は全くなかったですね。

一日も早く榊先生が釈放されることを願うばかりです。ただ事件はまだ終わっていないのですから、次の悪夢が待っているのではないか、それによって榊先生の無実が証明され、釈放されることになるというのでは困りますね。どなたかシェリング哲学の解

説よろしくお願いします。」

「ケイです。同立館大学で榊先生の後輩で、非常勤講師をしています。学部の学生時代に榊先生の特殊講義を受講したこともあります。もうあれから二十年も経ってしまいました。一応ドイツ観念論が専門なので、榊先生に代わって、説明させていただきます。

シェリング（一七七五～一八五四）は、一七九〇年早熟の天才だったので、15歳でテュービンゲン神学校に入学しました。寮では同室に五歳年上のヘーゲルやヘルダーリンがいまして、一緒にフランス革命に昂奮していたようです。

彼は、スピノザとフィヒテに傾倒したようです。フィヒテでも対象的自然は非我として自我にとって、やはり対立的な面を持っていました。フィヒテはどちらかというと意志の立場に立って、自然や社会は意志が自己を実現するためのハードルであり、取組むべき課題だったわけですね。

シェリングの方がその意味ではよりスピノザに近いと言えるかもしれません。自然も意識も絶対者の現れであり、元々同一だという立場ですから。もちろんそれを確信することで、主観の意志が客観に通じること。人間と神、人間と自然、男と女などの断絶が乗り越えられるという情熱的な意志の立場に立っているわけですが。

『先験的観念論の体系』で、対象的自然の中に絶対者を直観的に把握する知的な働きが最高の徳だとしたのです。この知的直観の立場に立てば、存在と思惟が同一であることになり、「同一哲学」が打ち出されます。シェリングのいう絶対者とは自我と非我，精神と自然、主観と客観も同じ絶対者の現れに過ぎないのです。だからこそ我々は知的直観や美的直観によって絶対者を感得できるのです。

シェリングによれば、自然は知覚の対象になりうる精神であり、精神は知覚の対象とならない自然です。自然と精神はポテンツの量的な差異に過ぎないのです。そこで絶対者の自己展開として自然の発展を捉えました。絶対者は先ず最も低いポテンツとしての力学的物質の段階から、磁気・電気・化学過程の段階を経て、有機的生命の段階へと姿をあらわし、自己意識をもつ人間の精神である最高段階に達するのです。つまり人間の意識は自然の自己意識なのです。

シェリング哲学の生ける有機的自然との美的・直接的な一体感は、当時のロマン思潮と深く結びついていました。18世紀は理性万能で、主観と客観の対立に固執し、自然は意志や感情をもたない無機的な力学的自然として捉えられて、数学的合理主義によって普遍的・法則的な傾向に還元されてしまっていたのです。

これに対する反動として18世紀後半から19世紀初頭にかけて直接的・個性的感情を取り戻し、芸術的・宗教的感情を大切にして、自由な創造精神を解放しようとするロマン主義文芸が盛んになったのです。

ロマン主義文芸では、情熱をかきたてるものとして恋愛が題材になります。命がけの恋ほど情熱的になるので、好んで貴婦人との不倫が小説に登場しました。このドイツロマン主義文学運動のリーダー格だったのがシュレーゲル兄弟です。シェリングは、そ

の兄アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲルの妻カロリーネと不倫して、結婚しています。

この影響で哲学でも主観・客観の合一を目指し、自然を人間をも包摂する生ける全体として捉える有機的自然観を再評価する傾向が強くなったのです。シェリングは晩年にはヘーゲルの否定（消極）の哲学を克服して、肯定的な積極哲学を展開しました。」

「ジョーです。ケイ先生、ありがとうございました。榊先生も『人間の意識は地殻の自己反省』であるという榊先生の恩師だった梯明秀先生の言葉を紹介されて、シェリングの『人間の意識は自然の自己意識』という立場と同じだと言われていました。結局、そのことを忘れて、自然のことを顧みないで、己一身のというか、社会的経済的な私的利害の獲得、あくなき富の追及などに追われ、互いに富を争奪したりした結果、恐慌や戦争、自然破壊が進み、人類的な危機を招いてしまっているわけですね。」

「ヨウヨウです。ぼくはシェリングたちのロマン主義に憧れます。情熱によって主観と客観の断絶を乗り越えようとするロマン主義は、ある意味狂っているかもしれません。

しかしいつの時代でも、若者たちが抱えている時代の課題は、乗り越えがたいような巨大な壁として立ちはだかっていたのではないでしょうか、その壁の強大さに恐れをなして、尻尾を巻いていたのでは、時代は前に進みません。それが課題である以上は、それに取り組むだけの時期が熟しているのであり、一人でどうにもならないのなら、連帯して立ち向かったり、さまざまな創意工夫をして取り組んでいけば、たとえ失敗に終わったとしても、次の世代に経験を引き継がせ、こうして歴史の進歩を勝ち取っていけるのではないでしょうか。

シェリングのいう人間を自然の主体として捉え返すという立場は、自然を人間の身体として捉え返す立場につながりますね。それが若きマルクスの非有機的身体としての自然という立場です。これは榊先生の環境的自然も含めて人間を捉え返すネオヒューマニズムの先駆けということですから、21世紀の人間観に連なっているということです。

榊先生を取り戻すというのは、シェリングから若きマルクスへさらには21世紀の人間観の転換への流れを取り戻すということでもあるわけです。まだまだネオヒューマニズムの思想は芽を出したばかりですから、榊先生を牢獄に閉じ込めておくわけにはいかないのです。そのことは榊先生が一番痛感されておられたはずです。そのことからも、榊先生が五十年前の恋の恨みやイエス本の評判への妬みなどから人殺しを考えることなどありえないことが分かります。」

**問　シェリング哲学の特色と現代的意義を論じなさい。**

## 二十九、榊周次の自宅へ

**うらぶれし五軒長屋の戸の鍵の難からざりき旧式なれば**

6月12日、日曜日毒殺事件が発生した6月1日から数えて12日目である。午前10時にＷＥＢ２チャンネルに「日本アナキスト革命団声明」が掲載された。その内容は「革命は電撃的にやってくる」しか校内放送では聞こえなかったが、校長室で三好が読み上げた内容とほぼ同じだった。

上村陽一は、三好六郎が息子のために死んでもいいと思い詰めて決起したことに魂を揺さぶられた。たしかに校長室に殴り込みをかけ、校長を監禁するなどもってのほかだが、妊娠が分かった時にはすでに離婚していて、何一つ父親として接してやれなかった息子に対して、自分の命を投げ出して復学を実現させてやろうとしたのである。これはすごいドラマだ。三好には収監されていて会えないだろうが、その息子は誰なのか突き止めて、話を聴きたいと思った。

陽一は自分の人生がもうすぐ終わるのではないかという恐怖心を拭い切れないでいる。わずか十七年の短い人生がもうすぐ幕を閉じるかもしれないのだ。三好六郎は63歳である。昔なら十分生きたと感じたかもしれないが、今はこれからでも勝負をかけてもう一花咲かせたい、あるいは今までは家族や会社のために働いていたが、これからは自分の人生を充実させたいと感じる年齢である。

その命をまだ対面もしたことがない息子のために投げ出してもいいというのである。そこには何らかの生きることの意味を掴んでいる人ならでは己の命を見切った覚悟がある。

その日陽一は平田慎二に会う約束を取り付けていた。陽一はまだ榊先生の自宅に伺ったことがなかったのだ。平田慎二は近所だというし、先生の自宅での「現代哲学研究会」のメンバーであったので、案内してもらうことになっていたのである。

平田慎二は「革命は電撃的に襲来する」というフレーズで三好六郎らに影響を与えた革命評論家である。極左のアナーキズムと極右のファシズムの両脚をかけて、アナルコ・ファシストと呼ばれている破天荒な思想家である。かなり怖い思想家ではないかとおっかなびっくりな気持ちはあったが、思想的には全く異なる非武装中立の憲法第九条を宗教的に信奉して、『グローバル憲法』の制定を訴えグローバルデモクラシーの実現を訴えている榊先生と

どうして親交があるのか、その謎も解いておかなくてはならないはずである。

午前11時に智子から携帯に電話がかかった。「上村君、あのね、今日は時間とれる？私一度榊先生の自宅を見ておきたいの、住所は分かっているので、だいたいのところはグーグル地図でわかったわ。どんな家で、靴箱はどんな様子なのかとか、ご家族はあれから自宅にはおられないでしょう。どうせマスコミ攻勢があるので、留守だとは思うけど、それに周辺の病院とかも見ておかないとね。よかったら一緒にいかない？」

「受験勉強は大丈夫、なんて訊いたら叱られちゃうかもしれないけれど、実は今日は午後2時に南海高野線の沢ノ町駅前で平田慎二さんと待ち合わせているんだ。彼に案内していただけることになっている。一緒に行こうよ。」

「へえー陽一君度胸あるわね。あの革命評論家の平田慎二さんでしょう。超コワイ理論をぶち上げている人でしょう。それこそ陽一君一人で行かせられないわ、私も行きます。」

ＷＥＢのＹＵＴＵＢＥでの映像では右翼ラジカリストと対談していて、平田が一方的に第二次世界大戦は英米帝国主義に対するドイツ・日本の解放戦争だったとして、この戦争の継続をまくしたてていた。陽一はあっけにとられてみていたが、結局平田の情念は、革命を起こすところにあるのかなと感じた。

一九六〇年代末の学生運動は大学解体を叫んでバリケード封鎖し、機動隊に排除されて終わったが、その総括から七〇年代初めに革命戦争派が分岐し、赤軍がパレスチナや北朝鮮へ革命拠点を求め、国内ではあさま山荘事件を惹き起こして、終息した。要するに左翼ラジカリストには、彼らの流儀で暴力的に革命を惹き起こすだけの戦略を失ったのである。

戦後右翼は反共で親米化し、日米安保体制を支える自民党政権の別動隊としてテロに走った連中もいたが、東西冷戦が終焉し、ソ連邦は崩壊した。中国も共産党独裁下で資本主義的な経済発展が本格化したのである。そうなるとグローバルな経済体制の下で、アメリカの軍事的、経済的覇権の下で日本の国益が損なわれているように見えるらしい。そこで東アジアで日本が再びリーダーシップを発揮して、反アメリカ帝国主義の世界戦争を継続するべきだという論理に飛躍する。

陽一は、アメリカとも、中国や韓国とも戦争ではなく話し合いと協力によって、自由な世界経済秩序を作り上げていくべきであると考えていて、何故多少の利害対立があるからといって、すぐに戦争継続論に飛躍するのか理解に苦しんだ。だからやむなく戦争というより、戦争継続を叫ぶことによって、矛盾を先鋭化させて革命情勢を作り上げようという革命戦略なのかなと推察した。結局、平田は革命の夢から醒めきれないのであろうと陽一は解釈したのである。

南海高野線でなんばから20分程で沢ノ町駅につくと、平田慎二が三十歳ぐらいのきりっとした表情の美女と出迎えてくれた。ＹＵＴＵＢＥの平田はどこか突っ張った気構えた感じがあったが、陽一と智子の前の平田は、小柄で温厚そうな初老のどこにでもいそうな気さくなおじさんという印象だった。とてもラジカリズムの思想家だとは思えない。

平田の方から口を開いた、「ユウユウ君とトモぴょんさんですね。私が平田慎二で、こちらは…」
「私は友成葵です。平田先生の親衛隊員といったところでしょうか」と微笑した。
「ハ、ハ、ハ、彼女は空手をやりますからね、なかなか強いですよ」と冗談を言った。「実は『鉄腕アトムは人間か？』のファンで、陽一君と智子ちゃんに会えるということで、奈良からやってきたのですよ」と打ち明けた。
「へー、僕たちファンがいるのですか、てれちゃうなあ」とにやけながら陽一が笑った。
「先ず、榊先生宅を案内しましょう」と平田は言った。住吉区役所や南住吉小学校の側を通ると坂本病院があった。榊が通っていた病院の一つで、ヒ素紛失事件があったところである。
平田は病院の入り口にある掲示板にある医師の名前を指さして言った。「各曜日の担当の医者の名前ぐらい控えておきなさい。それが手掛かりにならないとも限らないから。」陽一は頷いた「そうですね、真犯人がその医者とつながりがあれば、そのつながりを利用してヒ素を入手したかもしれないってことですね。」
「内科医横山葉子、外科医古谷庄次、小児科医寺田一平、皮膚科医東海林寛」と智子が読み上げた。「たとえばこの内科医古谷庄次が古文の古谷先生の親戚かなにかだったら、古谷先生を調べてみるという事ね。そうだＩＰＯＤで調べてみるわ。」
「あれ？この横山葉子先生は河内文化研究会で『ヤマトタケルの白鳥伝説』について報告されているわ。古谷先生も『古事記』にはお詳しいようだったわね。『河内文化研究会、古谷一哉』でも調べてみましょう。『ニギハヤヒに見る貴人信仰』を昨年機関紙『河内文化』に書かれているわ。」
陽一は驚いて言った。「へェーそれはすごい情報だね。そう言えば古谷先生の自宅は古市だったね。もしかしたら横山内科が古市あたりにあるのじゃないか？葉子先生はそこの娘さんだったりして。」智子も緊張して、ＩＰＯＤで検索した。「図星ね。八尾市に横山内科があるわ。」平田も葵も驚いて、次は横山内科を調べるよう勧めた。
そこから一分ほどしかかからないところの路地に二階建て五軒長屋の奥から二番目が榊の自宅だという。榊の妻千恵子の主宰する書道塾「住吉書院」は自宅から徒歩五分程度離れたところにある。
五軒長屋はもう築40年は経っていて、そろそろ建て替え時期がきているようだ。平田が榊から聞いた話では、家主が立て替えてマンションにしたいので、立ち退きを迫られているらしい。最近地上げ屋を自称する二十歳代の男が少々高圧的な態度で迫ってきたので、地元の借地借家人同盟の人に入ってもらって交渉が本格化しているということである。
やはり留守らしい、陽一はちょっと戸を開けようとするが、カギがかかっている。智子が不思議そうに言った、「鍵がかかっていてどうやって真犯人は、ヒ素を靴箱に入れたのでしょうね。」
平田は何でもないように平然と言った。「こんなの旧式の鍵だから、針金一本であきますよ。私はアパートの管理人ですので、カギを紛失された時などは何時でも針金で開けるのです。職業柄針

金はいつも持参しています。」友成葵はけしかけるように言った。「ちょうど誰も見張っている気配がないから、探偵さんたちのためにあけてあげたら。」

「おいおい、ちゃんと見張ってろよ」と言うなり、平田は三十秒もかからないうちにさっと手袋をして、針金を取出し、鍵を開けてしまった。そして戸をちょっと開いて「ほら、靴箱に手が届くでしょう。ヒ素を置いていくのなんか二、三分でできてしまいますよ。」

「ウェー、スゲェー、もし平田さんが真犯人なら、簡単に濡れ衣工作できますね。」平田は笑って言った。「おい、早速犯人扱いかい、ひどい探偵さんだな。」葵も笑って言った。「私も陽一君と同じこと思ったわ。でも口に出したらいけないわね。ところで平田さんはアリバイあるの？」

平田は少しずっこけてみせた。「六月一日だっただろう。それは警察にも訊かれているけれど、その日は午後7時から京都で講演が入っていたので、午後2時頃家を出て、5時から打ち合わせもかねて、京都の仲間と喫茶店でしゃべっていたよ。それから7時から9時まで府立文化会館の会場で喋って、後は飲み会だったな。全部警察が裏を取っている筈だよ、それにＹＵＴＵＢＥでも写っているしね。」

陽一ははにかんで言った。「どうもすみません。疑ったわけじゃないけれど、そんな技を持っている人ってザラにいるのでしょうか？」と尋ねた。平田はちょっと得意げに「私の場合は職業柄だけど、窃盗を職業にしている連中はお手のものだろうし、毒物を入手して、人を殺すような連中ならこれくらいはできるだろうな。組織的な犯行だったら、組織的に教え込んでいるだろう。カルトやテロリスト集団ならわけないよ」と答えた。

智子は突っ込んで訊ねた。「平田さんは組織的な犯行だとにらんでおられるのですか？」平田は少し考えて、おもむろに「単独犯なら毒殺だけで手一杯で、濡れ衣工作にここまでする余裕があるかどうか疑問ですね。でもこういう犯罪は想定外のことが多いので、決め付けは禁物だけれどね」と説明した。

葵が言った。「組織的犯行なら、一発で終わりでは、理窟に合わないでしょう。次々と断続的に類似の事件を起こして社会をパニックに追い込むのがねらいでしょうから。」

智子はうなづいて言った。「私もそう考えています。遠からず類似事件が起こる筈だと思います。」

陽一は考え込むような表情で「社会不安を惹き起こすことが目的の犯罪なら、校長先生への恨みの線から犯人を捜しても無駄だってことですか？」

「うーむ、でもまず大手門高校を選んだのには校長への恨みがあったからかもしれないね」と平田は応えた。

葵は明るい表情で言った。「愉快犯の線も考えられるでしょう。」「それはないでしょう」と智子は言った。「だって愉快犯なら犯行自体を楽しんでいるので、榊先生を犯人にしようとするかしら。」陽一も同調した。「愉快犯は動機面を追及しても浮かび上がってこないので、自分が怪しまれるとは思わないでしょう。だから他人に濡れ衣をきせることもないのじゃないでしょうか。」

「それもそうだけれど、毒殺を愉しんだ後で、濡れ衣を着せて愉しむ愉快犯がいないとも限らない。謎を解く場合は固定観念は禁物だな」と平田は諭すように言った。

そこへ榊の妻の千恵子が久しぶりに帰ってきた。「あら平田さんじゃないの、珍しいわね、若い子たちを連れて、今日は何の御用？あの人ならまだ帰れないわ。」

「あ、そうでしょうね。紹介します。こちらは榊先生のファンの友近葵さん。それからこちらのお二人は、大手門高校の高校生探偵上村陽一君と三輪智子さんです。」陽一は慌てて否定した。「探偵なんかじゃありません。僕たち先生のことが心配で、正しい情報が知りたくて調べているだけなんです。」

「本当に上村陽一君と三輪智子ちゃんなの。私、大ファンなのよ。へェーまるでファンタジーね。陽一君は鉄腕アトムになったのでしょう。かっこよかったわよ、国連本部に乗り込んで名演説ぶったじゃない。全人類とロボットの命運があなたの肩に掛かっていたのね。頼もしいわ、あなたが味方なら、百人力よ、いや全人類を敵に回したって負けないかも。それから三輪智子ちゃん、あなたのアララ大統領、とても立派でチャーミングだったわ。」

智子ははにかんで言った。「あれは陽一君が勝手に夢で見たアララ大統領です。私が体験したわけじゃないのです。」

「今日はそろそろ家に帰れないかなと思って、掃除がてら、様子を見に来たのよ。ブンヤさんとかポリさんとか見張ってなかったかしら。家はちらかっているから、入ってもらえないわ。でも探偵さんのために例の靴箱だけは見てもらうわね。ほら靴箱の中のこの紙箱に入っていたというのよ、警察は。もっとも私はそう言われただけで、それを見たわけではないけれど。警察の呼び出しで警察に行っていた間に見つけられたっていうことなの。警察がデッチ上げでそんなこと勝手に言っているのじゃないかしら。」

平田がうなずいた。「そう言えば、坂本病院のヒ素紛失事件もその後音沙汰なしですね。警察が榊さんの自白を誘うために鎌をかけてきたのかもしれません。」

「喫茶店で話すと人聞きが悪いから、むさ苦しいところだけれど書道塾で話しましょう。」と千恵子は言った。平田は「書道塾じゃお二階さんが文句を言ってくるのじゃないですか？」と尋ねた。千恵子は首を振った、「それがあの人半年ほど前に亡くなったのよ。二階は空き室だからちょうどいいわ。もっとも大声では困るけど。」

書道塾は二階建て文化住宅の一階にあった。「平田さん、この鍵先に行って開けてちょうだい。私は御茶菓子でもみつくろってくるから」書道塾から百メートル程のところに小さなスーパーがある。

千恵子が先に行くと、書道塾への道すがら、平田が口を開いた。「あの奥さん字もうまいけれど料理もうまいんだ。どら焼きのおやつが出るし、会費千円で会場費込みの夕食つきということで、御馳走がでたりする、それがなかなかうまいので、学習会よりそちらが目当ての人もいたようだ。」

「まさに内助の功ですね」と陽一は言った。「同じ大学の教師といっても専任と非常勤とでは天国と地獄ぐらいの差があるよって

言われていたけれど、万年非常勤講師を支える奥さんというのは本当に大変ですね。」

「陽一君も文転して哲学者に志したら榊先生みたいにならないとも限らないわね」と智子はつぶやいた。

葵はそれを聴きつけて言った。「その時は、智子ちゃんが書道教師でもして支えたら。ウフフ」と笑った。

智子は笑って言った。「あら、私は心理学のカウンセラーになるつもりなんですけれど」とはぐらかした。

「理工系でも指導教授とそりが合わない院生が挫折することがよくあるらしいね。まあ他人事じゃないけれど、人生順風満帆とはいかないし、順風満帆にいってしまったら平凡な業績しか遺せないものだ。榊先生なんかは、考えようによっては万年非常勤だからなかなか味がある思想家に成れたのかもしれない。」

葵もうなずいた。「平田先生も高校生の頃から破天荒だったから、未だに度肝を抜くような過激なこと仰って、魂をゆさぶっているのでしょう。」

平田は男女交際についてしみじみとした調子で言った。「まあ高校生の時からずっと続くというのは珍しいな、榊先生の場合は同じ高校で友達だったけれど、卒業して何年かしてからフォーリンラブしたらしいよ。今回露見した畑中瑠璃子を奪われてからかな?」と平田は解説した。

十五人程で満席になりそうなこじんまりした書道塾だった。そこには顔真卿や王羲之を臨書したのに混じって、白い字で書いて、バックが墨で拓本みたいになっている井真成の墓誌銘の臨書があった。珍しそうに眺めていると、千恵子が入って来て、「それ何で書いたか分かる?」と質問した。

智子は「拓本じゃないのですか?へェー白い墨なんかないですよね。」千恵子は笑って「牛乳で書いたのよ。それを水に墨を流した上に置くとこうなるの、おもしろいでしょう。まあ呑気に書道の話なんかしている場合じゃなかったですね」と言った。

千恵子は「二人は受験で大変なのにすみませんね」と申し訳なさそうに言った。

智子は頭を振って言った。「そんな、先生は留置所にいるのですよ、殺人罪で起訴されるかもしれないって言うのに、じっとしてなんかいられませんよ、私でも胸が張り裂けそうなのに、奥さんにそんなこと言われても」と目に涙を溜めて言った。

「智子ちゃんはやさしくて心まできれいなのね。ほんとうにうちの人は、こんないい生徒さんを持って幸せね。でも大丈夫よ、きっと本件逮捕まではいかないでしょう。」

「あら、本当は奥さんが慰められる役どころじゃなかったの、智子ちゃんが泣いたら駄目よ、あんたは探偵役なんだからね」と葵が言った。「そうでしたね、こりゃまた失礼しました」とさすが大阪人、智子までギャグをかまさずにはおれなかった。

千恵子は申し訳なさそうに言った。「せっかく来てもらっても、なかなかこれといった情報はみつからないでしょう。」

陽一は強がって言った。「ここに来た最大の目的は、真犯人がどうやって靴箱にヒ素を入れる濡れ衣工作をしたのかを調べることでした。それは平田さんのお蔭ですっきりしました。針金で簡単

に開けられると分かったわけです。それに古田先生と内科医の横山先生とのつながりが浮上してきたので、そこにヒ素が絡んでいるかどうかは分かりませんが、何か動き出しそうですね。本当に平田さんに助言いただいて助かりました。それと先生が大変な目に遭われて、奥さんが相当堪えておられるのではないかと心配していたのですが、とても気丈で安心しました。」

「まあ、これまでも綱渡りのような生活だったから、少々のことでは驚かないけれど、まさか殺人事件で濡れ衣を着せられるというのは想定外で、参ったわよ。でもあの人も心配してくれる人がたくさんいて、そういう人から励ましの言葉をいただいているし、梅原先生も御高齢なのに、いつでも力になるからって言って下さっているの、だから何とか持ってるわ。ほら先生からのハガキよ。読めますか？」と言って取り出した。

『この度、大手門高校の毒殺事件で濡れ衣を着せられ収監されているとのこと、まことにお気の毒です。榊さんのためにお力添えできることがあれば、できる限りのことをするつもりですので、奥さんも気持ちをしっかり持ってください。　梅原猛より』

直筆なので独特の崩し方がありとても陽一や智子には読めなかった。千恵子が読み上げたら、納得した。

「そう言えば、榊先生は、梅原先生の原稿を読むのが難しくて苦労したとおっしゃっていましたね。」

平田は心配そうに言った。「探偵さん、事件の真相に迫るということは、それだけ危険なことだから、真犯人は死にもの狂いになって、立ち向かってくるかもしれない。だから慎重にやらないと殺される危険だってあるのだからね。分っているとは思うけど。」

智子はうなずいて言った。「本当ですね。陽一君は今日でも平田さんに会うと勝手に決めていたでしょう。私が今朝電話しないと一人で来ていたのよね、きっと、平田さんはこんないい人だったからよかったものの、実際どんな恐ろしい人かも分からないじゃないですか、陽一君猪突猛進はだめよ。勝手に一人で行動しないでね。」

葵は微笑んだ。「そりゃそうね。いよいよ『哲学史で謎を解く』のトピックも大詰めのヘーゲルだから、事件もクライマックスになっていくわけでしょう。ふたりは離れちゃだめよ。」

陽一は素直に「はい分かりました」と答えた。「ヘーゲル哲学では『ミネルヴァの梟は黄昏に飛び立つ』ということで、総括的なものですからね。さあどんな書き込みがあるか楽しみですね。」

**問　平田慎二に榊周次の自宅や坂本病院を訪ねてどんな収穫があったか要約しなさい。**

## 三十、ヘーゲル哲学体系入門

弾丸（たま）のごと一足飛びに至るまじ遠き旅路を経てこそ知となれ

六月12日日曜日、午後9時陽一は、『哲学史で謎を解く』のトピックを開いたら、書き込みがあった。「午後3時、ワンネスです。いよいよこのトピックもヘーゲルに入ります。警察の動きはマスコミ報道では止まってしまっているように見えますね。真犯人が警戒しているために次の行動がでないので、膠着状態になってしまっているのでしょう。このままいったら不起訴か、毒物劇物取締法違反だけで起訴になるかもしれません。

さてヘーゲル哲学の解説に入ります。ヘーゲルは一八〇七年にイエナの町でナポレオンが進駐してくるのを目撃しました。「馬上の世界精神が行く」と手紙に表現しています。ドイツの敗北はその後進性故であり、ナポレオンの勝利はフランス人民が自分たちの革命の成果を守るために国民の軍隊を作っているところにあると見ていたのでしょう。

もうこの時点は、ジャコバン党の恐怖独裁の後ですから、フランス革命に対する幻想もだいぶ冷めてしまっていたと思われますが、それでもナポレオンの勝利はヨーロッパ全体が近代化する大きなきっかけになると評価していたようです。

この時ヘーゲルは『精神の現象学』を書いていたところだったようです。単なる感覚から悟性、自己意識に発展し、さらに理性や精神となって、最終的に絶対精神である絶対知に到達するという展開を叙述したものです。

これは対象の中に絶対者をピストルのように直観してしまうシェリングを批判するという問題意識に基づいているようです。知は媒介的なものであって、シェリングのように知的直観で一足飛びに真理に到達してしまったら、それは知とは言えないということなのです。もっともシェリングにすれば、スピノザ的汎神論が根底にあるので、見るものも見られるものも同じ絶対者の現れじゃないかということで、それが知的直観の根拠なのですが。

意識が自己を絶対者の現れであると自覚できるためには、意識が発展すれば絶対精神まで行き着くことを論証しなければならないのです。それには長い長い意識の発展の道のりが必要なのです。そしてはじめて絶対精神が自己を学として展開できるというわけです。

ヘーゲルはあまり「知を愛する」という原意のフィロソフィーとは言いませんね、「知ること」という意味のヴィッセンシャフトつまり学と言うようです。なぜなら学は本来絶対精神の自己展開なのですから、人間理性の限界を克服しています。ですからカン

トの場合のような不可知論は必要ないので、ソクラテスの「無知の知」はお呼びでないからです。

絶対精神の哲学体系『エンチクロペディー』は、『論理学』→『自然哲学』→『精神哲学』と展開します。精神が精神のままで自己を展開するのが『論理学』(有→本質→概念)です。それは先ず「有」からはじまり、関係においてある「本質」になり、生成・発展・消滅を総括して捉える「概念」を展開します。

ヘーゲル哲学は弁証法を使って論理展開します。その中でも哲学体系の論理展開は、〈即自→対自→即且対自〉の弁証法を使うのです。即自(an sich)はそれ自身に即してつまりそのままでということですから、絶対精神の即自は『論理学』となります。それに対して対自(für sich)はそれに対してつまり客観化して対象としてとらえることですから、絶対精神の対自は『自然哲学』になります。そして即且対自(an und für sich)は対象を貫く精神を自己として生きることですので、絶対精神の即且対自は『精神哲学』ということになります。

〈即自→対自→即且対自〉の弁証法はケースバイケースなので、ややこしい面もありますが、人間の即自は赤ん坊です、つまり人間の形とか素質は一応整っていますが、それを表すことはできないので、赤ん坊は即自的に人間なのです。人間の対自は子供ですね、人間として生きていくために必要な知識や能力、習慣や精神を客観的に示され、教育や躾、生活実践を通して身に着けるわけです。そして人間の即且対自は大人です。人間として生きる能力および心構えと慣習が身についていて、それで自由に社会生活を送れるわけですから。この人間の例を念頭において考えれば、〈即自→対自→即且対自〉の弁証法は比較的容易に使えるようです。

論理が論理にとどまっていては何の論理でもないので、現実の論理として自己を示すために世界として自己を展開しなければならないわけです。それが『自然哲学』(力学→物理学→有機体学)です。ですから全く非論理的な自然の中に精神が自己を自然の論理として見出していくという展開になります。

自然の即自はカオスですが、やがて量的な規定から力学的関係になり、そして個体の関係として物理的・化学的な関係となります。これは互いに対象として外的に関係するので自然の対自です。そしてやがて個体が自己を保存しようとするようになり、種の存続を図ろうとします。この生物的な有機体は環境を自己の存続の条件して自己の契機にしていているので即且対自的な自然なのです。

そして『精神哲学』(主観的精神→客観的精神→絶対精神)ですね。生物では個体と種の自己保存を図るわけですが、人間は社会形成を通して、その中で言語でコミュニケーションを図り、精神的な存在となっているわけです。そのことによって形成された人倫によって個体と種の保存も図っているということです。

「主観的精神」は、人間の意識の特色をはっきりさせる「人間学」からはじまり、感覚・知覚・悟性・自己意識・理性と展開する「精神の現象学」となり、「心理学」つまり精神の学になります。その内容は、理論的精神、実践的精神、自由な精神という展開です。先ず頭の中で構成し、それを対象化し、練り上げて自由な精神になるということでしょうね。

精神が自由として自己を展開するためには、主観の中にとどま

るのではなく、客観的な現実を貫く精神として自己を示さなければならないわけで、「客観的精神」は法→道徳→人倫として展開されます。

精神はそれが自由な意志であるためには現実において自己を実現できなければなりません。その意味で主権者の意志が法となって実現することで、法は自由の実現です。しかしそれは即自的にしか自由ではありません。主権者にとっての自由であり、禁止される人民にとっては自由の否定に見えますね。しかし主権者は人民の安全や福祉のために法を定めたつもりなので、法さえ遵守すれば、禁止されていないことは自由だということなのです。

そして法の精神を主体化して自己の道徳とします。法は客観的に対象化してその内容をよく吟味すれば、それなりの道理があり、道徳として主体化することによって人民は客観的精神を自由に生きることになります。だから道徳は対自なのです。

人倫は法やしきたりを主体化してそれに基づいて互いに助け合う人間関係を構築しています。つまり即且対自的に客観的精神を生きているのですね。それが家族・市民社会・国家だというのです。この人倫の弁証法だけでも大変なので、このあたりで、タッチします。」

陽一は、ヘーゲル哲学入門の文章を読んでいると、文章の意味がもう一つ明快でない、それだけ易しく噛み砕くというのは、ヘーゲル哲学の場合、無理があるのかもしれないと感じた。それに体系の方法についての説明から、現実をどう生きるかという問題は直接出てきそうもないので、今悩みを抱えた自分にとって、疎遠な存在にも思えたのである。

キルケゴールもヘーゲル哲学についてよく分からないものだったから、こんな客観的真理なんて、一体なんになるんだ、必要なのは自分がそのために生きることができ、そのために死ぬことができるような主体的真理だと「日記」に記している。

しかしその主体が、絶対精神に到達していない未熟な精神なら、哲学体系を構成出来ないはずなのに、ヘーゲルは絶対精神に到達したものの如く、哲学体系をとうとうと展開している。それがキルケゴールには空々しいものに感じたのかもしれない。

とはいえ、見通しとして哲学体系を立てておくことは、現実を吟味し、正しく位置づけ、今取り組むべき課題を明確にする上で必要なことであったのだろう。

それにしても、陽一は、精神がかなり疲労気味なのに気付いた。毒殺事件以降、あまりにも刺激が強すぎたのである。そして大人たちと対話し、そこから事件の手がかりを掴みだそうと、普段使わない神経をいっぱい使い過ぎたのだ。かなりの睡魔に襲われた、だが受験生が、これしきの睡魔に負けるわけにはいかない。と言いつつ、愛用のノートパソコンに抱きつくように、居眠りはじめていた。

**問　ヘーゲル哲学の哲学体系の特色を論じなさい。**

## 三十一、北津高校平泉校長射殺さる。

ひるまずに旗を振れよと言いし人一時後に果てにけるかも

陽一はｍｉｘｉを閉じて、ＹＡＨＯＯニュースを見て仰天した。なんと北津高校の平泉照正校長が射殺されたというではないか。

もちろん民間企業出身でなくても、進学校と呼ばれる一番校、二番校の校長は難関校突破率を上げるためにそれぞれ似たり寄ったりの改革を進めているので、大手門高校事件は、他校にも十分飛び火しかねないリスクがあったのである。御木本校長にはまだ警察から要人警護要員が付いていたのである。

その日は府下の府立高校の進学校の校長会が浪速会館であり、午後七時から二次会で腹を割って話し合った。当然御木本校長が話題の中心になり、「無事でなにより、ひるまず改革の旗を振り続けてください」と平泉校長から励まされた。あまりに無神経な発言に御木本校長は返す言葉が見つからず、気分を悪くして、その場で嘔吐したのである。死ねと言われているように感じたらしい。

嘔吐の瞬間、ひょっとしたら御木本校長の食事に毒が盛られていたのではと、一座は緊張が走った。しかしひとしきり吐いたら、落ち着いた様子になった。風邪気味だということにして、御木本校長は先に帰ったらしい。

午後九時にはお開きになり、平泉校長は大正区三軒家東の自宅に戻った。犯人は尾行していたのか、それとも自宅付近で待ち構

えていたのか分からないが、自宅に入ろうとしたところを、近づいてきて至近距離からピストルで背後から撃った。弾は心臓を貫通したのか、ほとんど即死だったらしい。

なんと三軒家東は陽一の自宅の三軒家西に隣接している。徒歩でも十分はかからない。それに平泉校長の一人息子平泉秀一は大正東中学校では陽一と同期で、成績は何時もトップクラスだったので、高校は灘高校に見事合格した。平泉秀一の事も心配になり、陽一はすぐに家を飛び出て、平泉校長宅に走って行った。既に自宅付近に縄が張られて、近づけないようになっていた。

しかし秀一が玄関先に出てきて、外の見物人の様子を見に来たので、幼馴染のよしみということで、陽一は秀一に話かけることができた。「秀一君、この度は、お父さんのこと本当に大変なことになってしまって、どう言っていいか分からないけれど、御愁傷様です。この事件はきっと大手門高校毒殺事件と同一犯と思うんだ。」

秀一は意外に冷静だった。「そうかな？普通さ、連続殺人事件だと犯人の手口は、たいてい同じだと思うけれど、父の場合はピストルで射殺されている。」陽一は頷いた。「でもね、大手門高校の毒殺の標的はどうも校長だったらしいんだ。今日も一番校の校長会の帰りということで、同じ月に府内の一番校の校長が二人も殺されかかるというのは、偶然の一致というのはまずないと見た方がいいのじゃないか？」

秀一は頷いた。「そうか、そうすると同一犯と言っても、手口が違うところを考え合わせると、同一組織の別人の犯行という線も考えられる。一人で別の校長を毒を盛ったり、ピストルでというのは考えにくいな、組織的に連係して、連続的に一番校の校長や教育関係者を殺そうということかもしれないね。それじゃあ榊先生の疑いは晴れたという事かな？」

陽一は「今度こそそう願いたいね、でも警察は、両事件の関連を認めるだろうか？犯人側から一連の事件についての声明みたいのが出ればいいのだけれど、足がつくのを恐れているのかそういう動きはしないようだな。秀一君はショックで動転していて何もする気になれないだろうけど、何か分かったら教えてくれないか、僕たちは榊先生を取り戻し、学校を守ろうと動いているんだ。」

「そうかい、君らしいな？それにしても、21世紀にこんな恐ろしいテロリズムが横行して、うちの親父まで犠牲になるなんて、想定していなかったよ」と言い終わると、さすが胸が詰まって秀一は嗚咽し始めた。

陽一は秀一の背中を摩りながら、「ごめんね、辛い時に話しかけて、落ち着いたら連絡してね」と言いながら、玄関まで送った。その時、35歳前後の女性がニタアと笑ってこちらを見ているような気がした。その女性は陽一の視線を避けるようにさっさと現場から離れていったのである。陽一は気になって、その女の後をつけたのだ。

その女は細い路地に入って行った。陽一もその路地に入ると、その路地の両側の家の明かりは全部消えて、突然陽一は暗闇に包まれたのだ。次の瞬間意識を失ったのか、奈落に落ちていく感覚に襲われ、目覚めると、どこかのマンションの一室に監禁されていた。

「あなたが上村陽一君でしょう。『鉄腕アトムは人間か？』では大活躍だったわね。」35歳位の女が、またニタアと笑った。陽一は恐怖で心臓の動悸が激しくなっているのを感じた。「一体何が起こったのですか？妖術でも使ったのですか？僕たちはただ榊先生を助けたくて、動いているだけです。あなたが榊先生の自宅の靴箱にヒ素を仕込んだのですか、ひょっとしてあなたは横山葉子先生ではないのですか、内科医の」と鎌をかけてみた。

その女は「だれ？その横山て女なんか知らないわ、生意気に探偵ごっこなんてしていると命はいくらあっても足りないわよ」と脅かした。

陽一は『ヤマトタケルの大冒険』のきっかけになった「上村陽一は十七歳で死ぬ運命だ」という天の声を思い出して、結局、この事件でテロ集団に殺されることだったのかと思い至った。「分かりました、命は惜しいので、手を引きますが、榊先生の無実は立証してくれませんか？」

「それは私たちが大手門高校事件の犯人だったらということでしょう。それを調べるのは警察の仕事でしょう。ともかくこれ以上嗅ぎまわるようだったら、陽一君も死んでもらうことになるので、覚悟しなさい。まだ高校生なのに死にたくはないわね。」と冷たく言い放った。

「じゃあせめて、連続殺人の対象をこれからも一番校の校長に標的を絞るのか、それから動機や目的ですね、これらを教えてください。あなた方は何を世間にアピールしたいのですか？」

「さあね、犯人が私なのか、私でないのか、私一人なのか、組織でやっていることなのか、そんなことは私自身にも分からない」謎の女は支離滅裂なことを語り始めた。「ターゲットは一番校の校長、それは陽一君、あなたが殺したいと思っているのではないの？ああ、犯人は本当は陽一君、あなたかもしれないわね、フフフフフ」と妖気じみた笑いを浮かべた。

「気がふれているのですか？まともに答えてもらえないようですね。」陽一は悲しげな表情になった。

「留美子を奪われたくなかったら、周次は、倉田を殺さなければならなかったのかも、もちろんそんな勇気はなかったし、留美子も周次が倉田を殺していれば、そんな殺人鬼からは逃げたでしょうね。でも欲望と欲望、自己意識と自己意識が正面衝突しちゃったら、殺すか、殺されるかというギリギリまでいっちゃうことだってあるのよ」と謎の女は諭すように言った。

「何故、そんな四十年前の榊先生の失恋話がでてくるのですか？榊先生の事は事件とは関係ないでしょう。北津高校の校長が殺されたことからもそれは明らかです。」陽一は切り返した。

「大手門高校でも北津高校でも学校改革をめぐって軋轢が強まって、自殺者が出たり、その恨みから校長が殺されたりは、そりゃあ当然でしょう。それでなくても大阪府は学力テストの成績が最悪クラスだというので、府知事がより競争を強化するために、今の極端な大学区制まで廃止して、完全自由選択制にしようとしているのだから、余計に一番校では落ちこぼれが増加し、底辺校は荒れることになるのよ」と謎の女は他人事のように事件の背景を説明した。

「だからと言って校長を殺していいなんてことにはならないでしょう。」と陽一は、イライラしながら話した。「殺してよければ殺し、殺して悪ければ殺さないなら、殺人事件なんかおこらないでしょう、アハハハハハ」というと路地の両側の家の明かりがともり、陽一は謎の女を見失った状態で立っていた。今の体験は一体何だ、幻でも見たのだろうか、やむなく陽一は自宅へ戻った。

**問　とうとう第二の殺人事件が起こりましたが、その結果事件の性格はどのように方向性が決まりましたか。またここでオカルト的な表現が出てきたのはどういう意味をこの作品に与えますか。**

## 三十二、ヘーゲル弁証法

**死がありて生くることあり死がなくば、息することすら物憂かりけり**

六月12日午後11時半、自宅に戻った陽一は、またｍｉｘｉを開いた。午後十時のヘーゲル弁証法についての書き込みがまずあり、午後十時半ごろからの書き込みには平泉校長射殺事件への反響があった。

「ノリリンです。事件から二週間経ってしまいましたね。そろそろ山場のような気がします。だって哲学史は既にヘーゲルまで来ているわけですから、榊先生のお話では、前期の哲学入門はベーコン、デカルトからドイツ観念論のヘーゲルまでということでしたからね。ヘーゲル哲学は体系と方法の二要素から成っていまして、マルクスに大きな影響を与えたのが方法としての弁証法です。

物事や議論は対立や矛盾があって、それらを原動力にして発展していくとヘーゲルは、発展の論理を弁証法的に展開したのです。労働組合や学生自治会、高校なら生徒自治会があります。そこでは一年間の活動方針を大会で決定しなければなりません。委員長や自治会長が先に選挙で選ばれています。

彼らを中心に執行部が作られ執行部原案（これがテーゼです）が提案されます。反主流派は執行部原案を検討しまして、問題点を指摘し、より良い案として対案（アンチテーゼといいます）を提案します。それで議論が闘わされ、執行部は反論を行い、修正に応じられるところは応じて、元の執行部原案や対案よりもいい案（ジンテーゼ）にして、圧倒的多数の支持を得ようと努力するわけです。

しかし主流派と反主流は対立が深刻で、互いに聴く耳を持たず議論が噛み合わないと、数の力だけで決しようとし、少数派なんとか採決を妨害しようとして、ゲバルトに成ってしまうことが榊先生の学生時代にはよくあったようです。

榊先生が倉吉良造を毒殺したというシナリオを警察はテーゼとして掲げようと策謀しています。でも毒の入手方法や動機面でなかなか説明できないので、まだテーゼが出来上がっていないわけですね。それに対して、我々は証拠も全く不十分だし、動機も根拠薄弱で、榊先生の人柄や抱えておられる仕事から考えて、倉吉殺しをするはずがないと警察のシナリオを否定しているわけです。でもでは真犯人はだれでどんな動機で茶壺に毒を入れたのかというアンチテーゼは書けていませんね。それでなかなか釈放を勝ち取れていないわけです。

それはともかく、議論はテーゼに対してアンチテーゼが対抗し、その議論によってジンテーゼに発展するのが議論の弁証法です。これは現実や事物の発展の論理にも応用が利くのです。

生きるということは、生の否定である死があるから生きるのです。生きるために動植物を栄養として摂取しますね。彼らの死があるからこそ我々の生があります。だから結局生命の循環で、我々も土や空気に還ります。大いなる生命である大地は我々の命を吸収するのです。人は大地女神に生贄として捧げられます。その代り大地女神は動植物に姿を変えて我々に食べられるのです。ですから我々は神を聖餐しているし、神に食べられているともいえますね。

もし死がなければ、死なないための努力も必要ありません。何も食べる必要もなければ、息をするのさえ面倒です。つまり死なければ生きることもないわけです。生は死という対立物があって初めて成立するということです。物事はこのように、己を否定する要素と対立し、闘争し、矛盾することによって存在する対立物の統一であるということです。

植物の生長を説明するのに弁証法がよく使われます。種（たね）が種のままで芽に成らなければ、本当にそれが種であるのか疑われますね。種は種でなくなる要素があるから種なのです。種である要素を肯定としたら、種でなくなる要素、つまり否定を抱えているから種なのです。種の否定を否定して種という肯定であるということですね。

種である要素となくなる要素の対立、矛盾を抱えて種のですが、やがて矛盾が大きくなり、もう種であることができなくなりますと、次の段階に発展するのです。つまり種の否定でしかなかったのが、単なる否定ではなくなり、否定を否定して新たな段階芽に発展します。芽に成ってしまえば、芽も肯定になりますね。これも否定の否定として肯定になるということです。この新たな発展段階にいくことを止揚（アウフ・ヘーベン）と呼びます。

止揚されて芽になりますと、種ではないのですが、種であったことは保存されています。ですから芽が茎になり、葉に成り、花に成り、そして最後にまた種に成りますね、それは芽に種であったことが保存されているからです。

榊周次は、今は被疑者として警察で取り調べられています。被疑者の段階ではまだ容疑が固まっていないので、疑わしいのを肯定としますと、疑わしくない否定の面もあるわけですね。さらにさまざまな物的証拠や状況証拠が出てきて、否定が否定されて容疑が固まりますと、送検され、そこで裁判で有罪に持ち込めると検察に判断されますと起訴されて被告人になります。

裁判の段階でも被告人が起訴事実を巡って否認することがあり、無罪の可能性を争う場合もありますね。まだ罪の宣告を受刑者ではないわけです。無罪の推定を受ける権利があるわけですね。もちろん榊先生の場合は送検まで行かないとは思いますが。」

六月12日午後10時半「ミョウです。遂に北津高校校長射殺事件が起こりましたね。これでほぼ組織的な犯行ということは確実になったのではないでしょうか？受験体制の矛盾が厳しくなってきたので、それを利用してテロリスト集団が社会を混乱に陥れようとしているようですね。私は犯行に及んだテロリストを早く警察に逮捕してもらいたいですが、同時に、受験体制の矛盾にメスを入れ、教育を正常化しなければ、このような犯罪はなくならないと思います。

ヘーゲル弁証法を府立高校の学区制の問題に適用したらどうなるでしょう。戦後の六・三・三・四制の学校制度になった時に、京都府では民主主義教育を徹底しようと、小学区制を採用しました。地元集中を徹底して、府立高校は一校しか選択できないようにしたのです。男女共学で商業や工業も含む総合制だったように記憶しています。そのようにして学校間格差を無くそうということだったのです。

そうしますと、府立高校から東大、京大に合格する人数は平均化してしまい、名門校がなくなるので、私学に秀才が流れる傾向が起こって、小学区制が批判にさらされるようになりました。

大阪府では中学区制を敷いていまして、職業高校は別に設置していました。普通科は実質三校程度、例外的に五校程度から選択していたようです。中学の教師が地元集中に力を入れていたので、学校格差はあるものの極端なことはなかったようです。

しかし、やはり一番校は受験指導に力を入れますから、学校間格差が目立つようになり、少しでも成績上位の学校に入れたいということで、学区が統合されていきます。

学区が拡大するにつれ、全人教育という民主教育の理念が崩れ、生徒間で教え合い、助け合い、友情を育むということができにくくなります。最早学校というより、進学校は受験予備校になり、困難校は勉学の場ですらなくなります。榊先生はグラムシの用語で組織体フェティシズムという言葉で表現されていますが、名前は学校でも実体は学校ではないということです。

日本アナキスト革命団の三好六郎さんも言われていましたが、イリイチの言葉に「病院に行ったら病気になり、学校に通ったら馬鹿になる」という言葉が、深刻な現実になってきているわけです。つまり最早病院は病院でなく、学校は学校ではないのです。

これは弁証法的発展でなく、弁証法的退化ですね。ヘーゲルは発展の論理に弁証法を使ったのですが、現代の日本の教育は発展しつつあるのではなく、退化しつつあるのですから、情けない話ですよね。

北津高校出身の大阪府知事は、競争原理を導入すれば、大阪の生徒たちの学力が上がると思い込んでいますが、それは全く間違いです。競争にしても適度がいいので、過度は弊害を招くというのは、孔子様の時代から賢人たちが指摘されておられたのではないでしょうか。実際に中学校でトップクラスだった生徒しか入れない一番校では、三十点未満の欠点がざらにいます。初めは脅かしのつもりで難問を出していたのでしょうが、すっかり自信を失くしてなかなか立ち上がれない生徒が多く、そのフォロー体制がしっかりとれていないのが現状です。

はっきり言って、過度の大学区制、学校格差のつけ過ぎが、一番校の学力低下を招いています。もちろんその他の学校もどんぐりの背比べの生徒ばかりでは、かえって伸びなくなってしまいます。大阪の学力低下の原因は大学区制にこそあると私は断言します。」

「トモぴょんです。北津高校の平泉校長が射殺されたとのこと、驚愕しました。ヨウヨウさんのお宅の近くらしいですね。ヨウヨウさんのことだから、つい現場に張り付いて、危ない目に遭ってないか、それが心配です。このまま事件がどんどんエスカレートしていって、大阪の高校だけでなく、日本の社会全体が大パニックにならないか心配ですね。」

**問　ヘーゲル弁証法の特色と意義を論じなさい。**

# 三十三、暁マンションの惨劇

## 銃声は哀しき獅子の咆哮か暁マンション午前の惨劇

陽一は六月13日月曜日早朝、ＪＲ鶴橋駅で降りて八尾市内の横山内科に向かった。あの幻のような謎の女がひょっとして横山葉子でないかという疑いが消えなかったからである。月曜日の朝坂本病院に出勤するとしたら、七時頃に家を出る筈である。グーグルの地図検索で病院の位置から画像まで確かめてあるから、近鉄八尾駅から徒歩五分ぐらいの横山内科はすぐに分かった。案の定、父が院長で、葉子も内科医になっている。

陽一は用心して病院から二十メートルほど離れたところで物陰から窺がっていた。するとちょうど七時に突然意識を失ったのである。何か鈍器のようなもので叩かれて気を失ったようだった。

智子は朝七時半には登校していた。いつもなら陽一と校門で出会う筈である。教室にもいない。昨夜の事件が気になっていただけに、陽一の携帯に電話したが、電源が切れていて出なかった。自宅に電話を入れたが、今日は何時もより早く出たという。智子は不安で胸が張り裂けそうになった。

智子は、横山葉子を調べに行こうとしている陽一に一人で行ったら駄目だと釘をさしておいたのだが、きっと陽一は探りに行ったのだと思った。でも探りに行ったとしても、まさか一人で医院の中に潜り込んだりはしないだろうと思った。一応病院を確かめ、できれば葉子の姿を一目見るぐらいで戻ってくるだろうと思った。それなら学校が始まる九時までに学校に到着する筈である。九時まで待って戻らなければ、誰かを誘って横山医院に探りに行こうと思った。

八時半になんと榊先生が出勤してきたのである。八時前に急に榊周次は放免になった。昨夜の事件で、大阪府警も榊を留置しておく必要を感じなくなったのであろう。倉吉良造毒殺の件で送検できるだけの容疑を固めることは無理だということになったようだ。毒物の不法所持については、引き続き捜査するとして、取り調べが終わったので帰ってよろしいとなったのである。

榊は自宅に戻る前に大手門高校に報告する方が先だと考えて、校長室を訪ねたが、校長は昨夜の事件で警察に呼び出されているらしい。職員室と社会科教員室に簡単に報告し、同僚たちは拍手したが、何しろ昨夜の事件のショックで榊周次の放免を祝している気分ではないらしい。榊は早々に上村陽一や三輪智子のホームルームの教室を覗き、心配かけましたがお蔭で無実ということで放免されましたと報告した。みんな「万歳、万歳」と明るく祝福してくれたのである。

「先生、それどころじゃないのです。上村陽一君が危ないのです。どうも八尾に調べに行ってまだ戻ってこない、犯人に捕まっているかもしれません」と智子が叫んだ。

「ゲェー、何だって！そりゃあ大変だ、すぐ行こう。手短に事情を聴かせてくれ。」智子と応接室に行き、常駐の刑事と一緒に一部始終を十分程度にして聞いた。「それじゃあ、坂本病院に電話して確かめてみましょう」と刑事は早速坂本病院に電話した。くじを十分ほど過ぎたがまだ出勤しておらず、今日は体調不良で休み

だということです。それでパトカーで智子も榊も同乗して、八尾に向かったのである。

私服の刑事が横山医院に入り、「葉子先生はおられますか？」と受付の看護師に訊いた。「さあ、何時もなら坂本病院に出勤のはずですが？」と看護師は応えた。院長の横山勘蔵が答えた。「ああ、今日は体調不良なので、マンションで寝ているようです。ここだと何かと気を遣うというので、近所にマンションを借りているのです。」「すみません、先生、警察の者ですが急用ですので、そのマンション教えてください。」「ここから西に百五十メートルほど行ったところにある暁マンション三階三〇五号室です。」

刑事は一人警官を残し、本人に連絡させないようにした。刑事二人と榊と智子で現場に急いだ。そして最寄りの八尾警察にも応援を求めた。ともかく四人で現場に着き、管理人に頼んで合鍵を借り受けた。

刑事は室内に人の気配を感じたので、鍵を静かに開けて、拳銃を持って踏み込んだ、一刻を争うと判断したためである。中には何と横山葉子と古谷一哉がいた。上村陽一はぐったり横たわっていた。刑事は手を上げろと言ったが古谷や内ポケットから拳銃を取り出して刑事めがけて発砲した。それが見事に刑事のこめかみに命中した。一緒にいた警官は拳銃を構えたが、古谷はニタァと笑って発砲したら、これも心臓に命中した。

三輪智子はキャーと叫んで上村陽一に近づき、「陽一君、死なないで！」と叫んだ。どうやら陽一も死んでしまっているようだった。古谷は拳銃を持って智子を撃とうとした。

「古谷さんどうして罪も恨みもない教え子まで殺そうとするんだ。」榊は古谷に叫んだ。「俺の野獣に火が付いたらだれも止められないんだ。知られた以上あんたも死んでもらう。」榊は古谷に飛びつこうとしたが、古谷はその榊の胸を打ち抜いたのである。

そのすぐ後に入ってきた警官が古谷に発砲して、古谷も倒れた。

**問　結局古谷一哉と横山葉子が犯人でしたが、ミステリーとして納得できますか。また最後に陽一君や榊先生まで殺されてしまうというのはどうでしょう。**

## 終わりに

妖艶な煎茶の香りに包まれて刹那に過ぎしミステリーかな

煎茶の濃い香りに包まれ、刹那に白昼夢を見ていた榊は、校長が戻ってきて「榊先生！どうされたのですか？お顔が真っ青ですよ」と言われて、はっと我に返った。倉吉良造は「この煎茶はなかなか味わい深いですな。こんな妖艶なお茶は初めてです」と茶を褒めた。榊は気を取り直してお茶を飲んだ。「なるほど、このお茶はミステリーですな」とわけのわからないことをつぶやいた。

問　結局榊先生の白昼夢だったことで落ちにしましたが、ミステリー仕立てのファンタジーということでどうでしょう。作品全体について論評してください。哲学の学習にはなったでしょうか。

この作品は二〇一一年十二月二十七日校了です。
著者やすいゆたか記

二〇一二年一月十七日改訂